

# 道宣撰『集古今仏道論衡』の日本古写経本 —— 解題と翻刻 ——

王 雪

## 要 旨

唐代の道宣によって編纂された『集古今仏道論衡』は、仏教と道教との間に繰り広げられた論争に関わる記事を集めたものである。10 世紀以後に開版された開宝蔵などすべての刊本大蔵経本は四巻本であるが、日本古写経本はすべて三巻本である。現存している『集古今仏道論衡』の日本古写経本は興聖寺本・七寺本・金剛寺本・西方寺本・新宮寺本・妙蓮寺本の 6 種が確認できる。経録の記載と現存テキストの内容を比較すれば、日本古写経本は同書の初治本であると確認され、『集古今仏道論衡』テキストを研究する上で、重要な資料となっている。現存している古写経本は 12 世紀以後のものであるが、その由来は少なくとも 9 世紀まで遡ると推測できる。また、刊本大蔵経本のテキストと比較すれば、江南系統大蔵経本と深くかかわっていることがわかる。

本論は、解題と翻刻の 2 つの部分に分けられている。解題では、まず日本古写経本『集古今仏道論衡』テキストの伝存状況及び翻刻で扱った底本の金剛寺一切経『集古今佛道論衡實録』（金本）と校本の興聖寺一切経本（興本）・七寺一切経本（七本）の基本情報を概観し、次に日本古写経本の由来及び文献学的系譜を確認した。最後に日本古写経本の翻刻本を掲げた。

## 【解題】

### はじめに

ここに紹介する日本古写経本は、『集古今仏道論衡』の成立と展開を考える上で、新たな座標を提供する伝本である。

唐、南山道宣（596～667 年）撰『集古今仏道論衡』（以下、『仏道論衡』）は、後漢から唐初に至るまで、仏教と道教との間に繰り広げられた論争に関わる記事を集めて撰述したもので、総計 33 件の記事で仏教の立場から護法

思想を全面的に打ち出し、神秘的な記述内容も多数含まれている。『仏道論衡』（661年初稿、664年増補）の撰述年からすれば、道宣の晩年の著作ということになる。

中国・高麗の刊本大蔵經に収められている『仏道論衡』のテキストはすべて四卷本である。現在、最も広く使われている『仏道論衡』のテキストは、『大正蔵』第五十二巻に収録されたものである。それは、高麗再雕本を底本とし、「宮」（開元寺蔵本）・「宋」（思溪蔵本）・「元」（普寧蔵本）・「明」（嘉興蔵本）の4本で対校したものである。しかし、経録<sup>1</sup>の記載によれば、『仏道論衡』のテキストとして、かつては三卷本と四卷本の2種があったことが分かる。ただし、三卷本の形態に関してはこれまで明らかになされてこなかった。しかしながら、日本の奈良・平安・鎌倉時代に書写された一切經の調査研究の進展に伴って、幾つかの古写経本『仏道論衡』が見出され、これらが現行の刊本に見られない三卷本の形態を持ち、内容的に別系統のテキストであることが判明した。

近年、国際仏教学大学院大学を中心とする日本古写経研究の一つの成果である『日本現存八種一切經対照目録』<sup>2</sup>により、現存している『仏道論衡』の日本古写経本は興聖寺本・七寺本・金剛寺本・西方寺本・新宮寺本・妙蓮寺本の6種が確認できた。いずれも平安・鎌倉時代の写経である。筆者が実際に見て研究対象として使用したのは興聖寺本と七寺本と金剛寺本の3本である。西方寺本<sup>3</sup>は画像写真を閲覧し、新宮寺本・妙蓮寺本の

1 『大唐内典録』（大正蔵 55 冊 0282a26）では「古今仏道論衡（一部三巻）」とあり、智昇撰『開元釈教録』では「集古今仏道論衡四巻、見『内典録』、前三巻龍朔元年於西明寺撰、第四卷麟徳元年撰、或三巻」（大正蔵 55 冊 0562a01）と記されている。

2 『日本現存八種一切經対照目録』、国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会、平成 18 年 292 頁。

3 『大和郡山市西方寺所蔵一切經調査報告書』によると、西方寺本は上・中・下の三巻があり、鎌倉の弘安四年（1281）の写経で、卷子本である。紙本墨書（混合紙、新表紙）、天地界、行間淡墨界。楷・行書。三巻いずれも蟲損・破損が甚だしい。巻上、24 紙、高さ 26.3 cm、一紙 25 行・一紙幅 42.1 cm、一行 17～18 字。外題「古今仏道論衡実録巻上」、内題「古今仏道論衡実録序」、撰者名「唐釈道宣撰」、

2本は、『名取新宮寺一切経調査報告書』<sup>4</sup>、『京都妙蓮寺蔵「松尾社一切経」調査報告書』<sup>5</sup>を参照したのみである。そこでその成果を踏まえ、『仏道論衡』研究の新たな視座として、以下、まず従来顧みられることのなかった、日本古写経本『集古今仏道論衡』に着目し、その書誌と由来を確認した上で、系譜を検討していきたい。次に日本古写経本の翻刻本を掲げる。

## 1. 書誌

翻刻本では成立年代の最も古い金剛寺本を底本とし、七寺本と興聖寺本を校本とした。次にそれらの書誌情報を紹介する。

尾題「集仏道論衡実録巻上」、奥書「(同筆) 弘安四年(歳次辛巳) 七月六日於河州茨田郡□……□/西谷書写了□……□」。巻中、26紙、高さ26.1cm、一紙26行・一紙幅42.7cm、一行15~17字。外題「集古今仏道論衡実録巻中」、内題「集古今仏道論衡実録巻中」、撰者名「唐釈道宣撰」、尾題「集仏道論衡実録巻中」。巻下、30紙、高さ26.1cm、一紙25行・一紙幅42.3cm、一行17~20字。外題「集古今仏道論衡実録巻下」、内題「集古今仏道論衡実録巻下」、撰者名「唐釈道宣撰」、尾題「集仏道論衡実録巻下」、奥書「(同筆) 弘安四年辛巳七月廿五日執筆朗意/(別筆) 交了『大和郡山市西方寺所蔵一切経調査報告書』、元興寺文化財研究所(編)、大和郡山市教育委員会、1984年、281頁。

4『名取新宮寺一切経調査報告書』によると、新宮寺本は上・中・下の三巻があり、鎌倉中期の寛喜二年(1230)の写経で、卷子本である。料紙は斐楮交漉紙である。巻上25紙、全長12.2m。尾題「集仏道論衡実録巻上」、奥書「寛喜第二壬正月十五日僧顕慶/(別筆) 一校了圓意」。巻中表紙欠、首欠。紙数は23紙で、全長10.9m。尾題「集仏道論衡実録巻中」、奥書「寛喜二年庚刀二月一日僧顕慶/(別筆) 一校了圓意」。巻下紙欠、首欠。紙数は36紙で、全長17.3m。首題「集古今仏道論衡実録巻下」、尾題「集仏道論衡実録巻下」、奥書「寛喜第二年正月十二日顕慶/(別筆) 一校了圓意」『名取新宮寺一切経調査報告書』、東北歴史資料館、1980年、315頁。

5『京都妙蓮寺蔵「松尾社一切経」調査報告書』によると、妙蓮寺本は巻中・巻下の二巻があり、平安後期の写経で、卷子本である。巻中26紙、首題「集古今仏道論衡実録巻中」、尾題「集古今仏道論衡実録巻中」。巻下34紙、首題「集古今仏道論衡実録巻下」、尾題「集仏道論衡実録巻下」『京都妙蓮寺蔵「松尾社一切経」調査報告書』、中尾堯編、大塚巧芸社、1997年、318頁。

## 金剛寺本

大阪府河内長野市天野山金剛寺所蔵の写本。

上・中・下の三巻から成り、平安後期の保延四年（1138）の写経で、卷子本である。紙本墨書（黄檗・白色の楮紙）、天地界、行間淡墨界。楷・行書。法量は25.5 cm×50.0 cm 前後<sup>6</sup>。文中に補入、訂正した文字が見られ、また一行分の字数程度の脱文が見られる。巻中には些か虫損・破損があるが、文字の判読を妨げるほどではない。日本古写経データベースにより上・中・下三巻のカラー画像が見られる。三巻の書誌情報を示せば、次の通りである。

## 卷上

[内容] 序文、漢・魏晋南北朝の十事	[存欠] 完本
[紙数] 26 紙	[行数／紙] 31 行
[字数／行] 17 字	[外題] 集古今仏道論衡卷上 外題下に「星函」
[内題] 集古今仏道論衡実録上序	[撰者名] 唐釈道宣撰
[尾題] 集仏道論衡実録卷上	[奥書] 校了

## 卷中

[内容] 北周・隋代の六事	[存欠] 卷首破損
[紙数] 23 紙	[行数／紙] 30 行
[字数／行] 17 字	[外題] 集古今仏道論衡卷下 外題下に「星函」
[内題] □……□衡実録卷中	[撰者名] 唐釈道宣撰
[尾題] 集仏道論衡実録卷中	[奥書] 校了

## 卷下

[内容] 唐高祖・太宗朝の十事、実録序、唐高宗時代の四事	
[存欠] 完本	[紙数] 33 紙
[字数／行] 17 字	[行数] 29 行

<sup>6</sup> 毎紙の具体的な長さは『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究（第2文冊）』（国際仏教学大学院大学、2007年）440～441頁参照。

- [内題] 集古今仏道論衡実録卷下 [外題] 集古今仏道論衡卷下  
外題下に「星函」
- [尾題] 集仏道論衡実録卷下 [撰者名] 唐釈道宣撰
- [奥書] 保延四年<sup>8</sup>六月廿日一交已了/願主聖人快尋奉書写一切経也<sup>7</sup>

### 興聖寺本

京都市上京区堀川通沿い、円通山興聖寺所蔵の写本。

興聖寺本『仏道論衡』は上・中・下の三巻から成り、折本である。紙本墨書（黄檗の楮紙）、天地界、行間淡墨界、楷書体。毎巻冒頭の上に「円通山興聖寺」と横書きされている。文中に補入、訂正した文字と倒置の符号が見られ、また一行分の字数程度の脱文が何箇所か見られる。当写本には校合や書写年代などの奥書が全く見られない。写本の筆跡や所蔵する興聖寺一切経の歴史状況からみて、凡そ平安末期（12世紀後半の長寛元年（1163）から嘉應元年（1166）にかけて）の頃に書写されたものと推測される。全巻にわたる若干の虫損箇所を除き、現存状態は良好である。三巻の書誌的概要は以下の通りである。（数字の単位は cm である）

#### 卷上

- |           |               |        |           |
|-----------|---------------|--------|-----------|
| [内容]      | 序文、漢・魏晋南北朝の十事 | [存欠]   | 完本        |
| [箱番号]     | 474           | [千字文]  | 次         |
| [法量（縦×横）] | 26.1×9.6      | [全長]   | 1345.1    |
| [界高]      | 19.8          | [界幅]   | 1.9       |
| [紙数]      | 27 紙          | [行数/紙] | 27 行      |
| [字数/行]    | 16 字前後        | [外題]   | 集古今仏道論衡卷上 |
| [内題]      | 古今仏道論衡実録序     | [撰者名]  | 唐釈道宣撰     |
| [尾題]      | 集仏道論衡録卷十一     |        |           |

#### 卷中

- |      |          |      |    |
|------|----------|------|----|
| [内容] | 北周・隋代の六事 | [存欠] | 完本 |
|------|----------|------|----|

<sup>7</sup> 金剛寺本の書誌情報については『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究（第2分冊）』（国際仏教学大学院大学、2007年）参照407頁。

[箱番号] 475	[千字文] 墳
[法量（縦×横）] 27×9.6	[全長] 1279.8
[界高] 19.7	[界幅] 2.0
[紙数] 26紙	[行数／紙] 27行
[字数／行] 16字前後	[外題] 集古今仏道論衡卷中
[内題] 集古今仏道論衡実録卷中	[撰者名] 唐釈道宣撰
[尾題] 集古今仏道論何実録卷中	

## 卷下

[内容] 唐高祖・太宗朝の十事、実録序、唐高宗時代の四事	
[存欠] 完本	[箱番号] 475
[千字文] 墳	[法量（縦×横）] 25.8×9.6
[全長] 1748	[界高] 19.7
[界幅] 1.9	[紙数] 38
[行数／紙] 27行	[字数／行] 17字前後
[外題] 集古今仏道論衡実録卷下	[内題] 集古今仏道論衡実録卷下
	第下
[撰者名] 唐釈道宣撰	[尾題] 集仏道論衡実録卷下 <sup>8</sup>

全文にわたってしばしば筆跡が変わっているが、書風から同一人の筆による写しとみてよい。

## 七寺本

愛知県名古屋市中区大須2丁目、真言宗智山派稲園山七寺所蔵の写本。

『仏道論衡』について詳しい調査が未だ行われておらず、法量・全長及び界高などの情報についての後続調査が待たれる。

七寺本『仏道論衡』上・中・下の三巻から成り、函号「甲復十」、卷子本である。紙本墨書（黄檗の楮紙）、天地朱界、行間淡墨界。楷書。文中では行間の補字、衍字、倒置・削除・補入の符号と行間の校勘が間間見られ、

<sup>8</sup> 興聖寺本については『興聖寺一切経調査報告書』（京都府教育委員会編、1998年）参照。

若干の虫損が見られるものの、文字の判読を妨げるほどではなく、状態のよい写本と言える。書写年代の記録を欠くが、七寺一切経の歴史的状況と奥書の「道胤」から見て、平安末期の承安五年（1175）から治承二年（1178）までに書写されたと推測される。日本古写経データベースにより巻上のカラー画像が見られる。三巻の基本情報は以下の通りである。

## 巻上

[内容] 序文、漢・魏晋南北朝の十事	[存欠] 表紙欠
[紙数] 24 紙	[行数／紙] 28 行
[字数／行] 19 字前後	[外題] 古今仏道論衡実録序
[内題] 古今仏道論衡実録序	[撰者名] 唐釈道宣撰
[尾題] 集仏道論衡実録巻上	[奥書] 一校了道胤

## 巻中

[内容] 北周・隋代の六事	[存欠] 完本
[紙数] 不明	[行数／紙] 27 行
[字数／行] 19 字前後	[外題] 集古今仏道論衡実録巻第中
[内題] 集古今仏道論衡実録巻第中	[撰者名] 唐釈道宣撰
[尾題] 集仏道論衡実録巻中	[奥書] 一校了道胤

## 巻下

[内容] 唐高祖・太宗朝の十事、実録序、唐高宗時代の四事	
[存欠] 完本	[行数／紙] 27 行
[字数／行] 19 字前後	[外題] 集古今仏道論衡実録巻第下
[内題] 集古今仏道論衡実録巻第下	[撰者名] 唐釈道宣撰
[尾題] 集仏道論衡実録巻下	[奥書] 一校了道胤 <sup>9</sup>

テキストの中に同一文字の同じ誤写が間々見られ、はっきりした誤写も

<sup>9</sup> 七寺本については『七寺一切経目録』（七寺一切経保存会、1968年）参照。紙数については、目録に記録がない。

少なくない。また訂正も多い。興聖寺本と同じ誤写が屡々見られ、特に第三巻で顕著である。三巻とも同筆であり、やや綺麗な筆致で書かれている。書写者は未知である一方で、校合者の道胤の名は七寺一切経の奥書に何箇所か見られる。

以上3点の古写経本は、各々誤字・脱字・衍字などの誤りが多々存するが、字句の大きな相違が少なく、3点ともに共通して17字前後のはっきりした脱文が認められ、同一箇所と同じ誤字が見られるため、共通している祖本を持っていると推測される。題名の「集古今仏道論衡実録」はただ福州版を始めとした江南系統大蔵経と一致している。経録の記録と現存テキストの内容を比較することにより、日本古写経本は同書の初治本であると確認される<sup>10</sup>。

## 2. 由来

以上、日本古写経本の書誌情報を紹介した。その由来を確認するために以下、正倉院文書と平安時代の伝来目録の記録を通して検討する。

### (1) 奈良時代の書写

五月一日経をはじめとした光明皇后御願経は、原則として『開元釈経録』<sup>11</sup>に準じて、隋・唐の写経に基づき書写されたと一般的に認識されている。天平五年（733）から天平勝宝元年（749）にかけて「開元入蔵録」を基準として、また別生・偽疑・録外経及び一部の章疏類などを含めて、

<sup>10</sup> 初治本に関する論証は拙論「道宣撰『集古今仏道論衡』の日本古写経本について」（『印度学仏教学研究』149号、2019年12月、194～197頁）を参照。

<sup>11</sup> 山下有美「正倉院文書の性格とその特質」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第192集、2014年2月、74頁）の中に「五月一日経は、天平初年の事業発足当時は、当時、日本にあった一切経ワンセットのコピーをつくろうとするものだった。だが、天平八年（736）に玄昉が、中国最新の開元釈教録（730年成立）を日本に持ち帰ると、その「入蔵録」（『開元釈教録』巻19・20）に基づいた大乘小乗の経・律・論と賢聖集伝からなる一切経5048巻をそろえようという方針に変更した。」と述べられている。



五月一日経写経事業の第一段階が行われた。正倉院文書の中に『仏道論衡』の名が初めて現れるのは、天平十九年（747）六月七日の写経所申文である。この上申文書の中に所写並びに、未写の章疏類の記録が載せられており、詳細は以下の通りである。

寫疏所解 申見所寫並未寫疏等事

合一千三百五十三卷七百六十五卷大乘、五百八十八卷小乘  
六百七十卷見所寫畢

（中略）

右件六百七十卷見所寫畢

（中略）

金七十論議三卷小乘

集古今佛道論衡四卷小乘

續集古今佛道論衡一卷小乘

弥勒經疏三卷憬興師撰、「先所寫了」

雙觀經疏一卷小乘

佛頂經疏一卷波論師撰、「先所寫了」

「又曰尊勝珠林序」

顯揚論述記八卷憬興師撰

護命放生軌儀一卷三藏義淨譯、小

乘

已上八百八十四卷疏百七十四卷大乘、十卷小乘

（中略）

右件六百八十三卷、依無本、所未寫、

以前、律論章疏集傳記等、見所寫並未寫、檢定如前、謹解、

天平十九年六月七日舍人少初位上志斐連「麻呂」

舍人正八位上田邊史「真人」<sup>（自署）</sup><sup>12</sup>

上記の記録から、合計で千三百五十三卷の律論・章疏集・伝記類の中、六百八十三卷は原本が未入手のため、まだ書写されておらず、小乗の章疏類に置かれた『仏道論衡』が未写の部分に属している。その天平勝宝元年（749）に、一区切りさせた五月一日経の書写は、天平勝宝二（750）に再開した。天平勝宝三年（751）からは光明皇太后の方針に沿って、章疏の書

<sup>12</sup>『大日本古文書』編年之九、東京帝国大学、1914年3月、385～395頁参照。

写を重点的に進めた。天平勝宝五年（753）に、五月一日経の経律論、賢聖集伝は東大寺に施し、東大寺所蔵経となった。章疏の書写は、天平勝宝八年（756）まで続けられ、聖武天皇の死去を機に書写が打ち切られたという<sup>13</sup>。『仏道論衡』が書写されなかったことは天平勝宝五年（753）五月七日の「未写経律論集目録」<sup>14</sup>に「集古今仏道論衡四卷或三卷 九十九紙」のごとく記されている。巻数と紙数は『開元釈教録』と同じように記載されている。なお全体的に比較して、この「未写経律論集目録」は間違いなく『開元釈教録』を参照して書き上げたものである。そうになると、753年までは正倉院写経所では『仏道論衡』が未だ存しておらず、尚且つ同書が日本に伝わってこなかったことがわかる。

その後、初めて写された『仏道論衡』の記述は、天平宝字五年（761）の写経所公文に現れ、それについては次のよう記載されている。

奉寫一切經所解 申後寫加經事  
合大小乘經論賢聖集別生並目錄外經惣一百七卷  
用紙一千八百卅二張  
大乘經廿六卷  
大乘論一卷  
小乘經一卷  
小乘論卅七卷  
賢聖集十卷  
別生疏九卷  
目錄外經十二卷

(中略)

賢聖集  
禪法要解二卷 卅六廿  
勸發諸王要偈一卷 九  
金七十論二卷欠第一 卅六

<sup>13</sup> 山下有美「正倉院文書の性格とその特質」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第192集、2014年2月、p65～76頁）。

<sup>14</sup> 『大日本古文書』編年之十二、東京帝国大学、1918年7月、549～563頁参照。

勝宗十句義論一卷	十三
集古今佛道論衡第一欠三	廿七
甄正論三卷	卅七

(中略)

以前經論、並是舊元來無本、去天平勝寶六年入唐廻使所請來、今從内堂請、奉寫加如前、謹解、

天平寶字五年三月廿日史生下道朝臣  
外從五位下行大外記兼坤宮少疏池原公  
造東大寺司主典安都宿禰<sup>15</sup>

上記の天平宝字五年三月二十日の上申文書には、天平勝宝六年（754）に入唐使が請來した典籍の中に含まれた百七巻のうち、もともと日本に未存であった經論があり、それを追加して写すために内堂から請ったことが記されている。上記の「集古今仏道論衡第一欠三 廿七」の記録から、賢聖集に属す『仏道論衡』が四巻の中で、ただ 27 紙の第一巻のみ請來されたことが読み取れる。

これらの正倉院文書の記録から見て、奈良時代に完全な『仏道論衡』の経本は、書写されなかった。この天平勝宝六年に遣唐使が齎したものは、古文書から見て、写経所が探せる限りの最初のもので、当時初めて請來された『仏道論衡』と見て良からう。『仏道論衡』について、諸系統の第一巻はほぼ同じで、入唐使が齎した『仏道論衡』の出所は確認できないが、恐らく長安を含めた中原の写経であろう<sup>16</sup>。

## (2) 平安時代の伝来

日本の将来目録により平安時代に『仏道論衡』が入唐八家によって二度請來されたことがわかる。第一回目は9世紀初頭、最澄が帰国前に『伝教大師将来越州録』（以下、『越州録』と略称する）に記したものである。最澄は遣唐使の第二船に乗って、延暦二十三年（804）九月上旬には明州（今の

<sup>15</sup>『大日本古文書』編年之十五、東京帝国大学、1922年3月、42～46頁参照。

<sup>16</sup>天平勝宝六年に帰國した遣唐使は天平勝宝四年（752）三月に出發しているが、鑑真、阿倍仲麻呂、吉備真備など名だたる人物に関わっている。

寧波)に上陸して天台に向かい、九月下旬に台州に到着した。台州の龍興寺で道邃の講筵に列席し、天台文献を書写した。天台山の禅林寺で行満に会い、仏書を授けられた。また国清寺で義真と共に声聞戒を授けられた。翌年(805)の三月二日、台州の龍興寺において、道邃から菩薩戒を授けられ、同月下旬、明州に帰る。遣唐大使を待つ間を利用して、越州の龍興寺に赴いて順暁阿闍梨にあい、五部の灌頂を伝授されると共に、台州で入手し得なかった経疏百二部百十五巻を収集し、同年の帰国前の五月十三日『越州録』に記した。その中の『仏道論衡』の記録に関する雑の第二帙に次のよう記載されている。

金剛經疏三卷(沙門圓暉撰)

瓦官寺維摩碑一卷

關河文筆一卷

智度論音一卷

古今佛道論衡二卷

五百問事一卷

真人集一卷

已上七部十卷同帙(雑第二)。<sup>17</sup>

以上の目録から、最澄は二巻の『仏道論衡』を日本に齎した。この二巻についての詳細は不明であるが、どういふものかについて推測してみたい。『台州録』と『越州録』の中にはいずれにも『日本国求法目録』があり、最澄は入唐するに際してこれを持っていたので、仏典収集には一定の計画をもっていたようである。天平宝字五年(761)の写経所公文と合わせて見れば、第一巻が既に存するため、三巻本の残りの二巻を持ち帰った可能性がある。ただし中国の南部に三巻本の『仏道論衡』が流伝しているため<sup>18</sup>、最澄が見たものは三巻本であると推測される。あるいは最澄が収集したものは完本ではなく、三巻本のうちの二巻分であった可能性もある。ちなみに雑の第三帙に載せられた『仏道二宗論』一卷と『三教不斉論』一

<sup>17</sup> 大正藏 55 卷 1059a15~1059a22。

<sup>18</sup> 中国の南部における三巻本の流伝状況については、以下の第三章を参照。

巻のような三教関係の書物から、最澄はその方面に一定の関心を持っていたようである。

次に伝来が記録されているのは円珍の『智証大師請来目録』に載せられたものである。智証大師円珍は唐の宣宗大中七年（853）に唐の貿易船に便乗し、福州に着岸した。その後五年にわたって、福州・温州・台州・天台山・越州・蘇州・洛陽・長安などを巡り、大中十二年（858）六月八日に台州を辞し、日本へ戻った。中国に滞在した期間は会昌廢仏後、即ち仏教の復興期の時に当たり、円珍の収集した書籍は、五部の求法目録を通して知られる<sup>19</sup>。五部中の『智証大師請来目録』は、帰国直前の中十二年五月十五日に出来上がり、求めて得たものの総数として、聖教の四百四十一部一千巻と法具類の十六事を載せている。「小乗経論伝記部」に属する『仏道論衡』の関連記述は次の通りである。

（前略）

續集古今佛道論衡一卷（冊子崇福）

古今佛道論衡實録三卷（南山）

東夏三寶感通録下卷（南山）

已上小乗経論傳記部、總計大小乗七十一本一百二十三巻、並本寺目録闕本、於天台山國清寺并福州開元寺請本抄得。<sup>20</sup>

これによると、円珍は叡山延暦寺に欠いている七十一本、一百二十三巻の経論・伝記部の典籍を天台山国清寺並びに福州開元寺の経本を借りて写した。『仏道論衡』は、小乗経論伝記部に属し、前述した正倉院天平十九年の文書と同じように小乗の章疏類に置かれている。天台山と福州は、いずれも中国の南部に位置し、「古今仏道論衡実録」という書名からみて、やはり中国江南系統に属している写本大蔵経を底本にして写されたものである。更に「三巻」の形態と日本古写経本の特徴を考えれば、日本古写経

<sup>19</sup> その五部の目録は『開元寺求得経疏記等目録』『福州・温州・台州求得経律論疏記外書等目録』『青龍寺求法目録』『日本比丘円珍入唐求法目録』（また『国清寺求法目録』）及び『智証大師請来目録』（また『国清寺及諸寺求法総目録』）で、いずれも『八家秘録』に収録された。

<sup>20</sup> 大正藏 55 卷 1103a04～1103a09。

本系統本の祖本と見なしてよかろう。したがって、以上の記述から、完全な『仏道論衡』の経本は天安二年（858）の円珍帰国による請来を以って初めて日本に伝わり、その伝写本は後の平安・鎌倉写経によって保存され、現在に至っている<sup>21</sup>。近年の大蔵経研究によれば、従来宋版の伝写本とみなされてきた平安・鎌倉期における書写一切経が唐代写経の系譜に連なる奈良写経の伝写本である事例が報告されており<sup>22</sup>、当経の場合には、奈良写経の伝写本ではないが、以上の研究によれば、唐代写経の系譜を引き継ぐ伝写本であるとみなされるであろう。

### 3. 系譜

従来、宋・元時代の刊本大蔵経は、流布した地域によって第1類の「中原系」・第2類の「北方系」・第3類の「江南系」と分けられるため、刊本『仏道論衡』の本文系統も3類のように分類されている。第1類のうち、最初の刊本大蔵経である開宝蔵は、十二巻のみが現存しており、開宝蔵系統の『仏道論衡』テキストを概観しようとするれば、既に失われた開宝蔵そのものではなく、その覆刻にあたる高麗初雕本と趙城金蔵本を参照することができる。現存する契丹蔵や房山石経本など第2類の北方系統に属する大蔵経の中に残念ながら『仏道論衡』のテキストは全く伝わっていないが、高麗再雕蔵を開版した際に契丹蔵本を校本に利用したため、ほぼ契丹蔵本

<sup>21</sup> 梶浦晋氏が平安前期（遅くとも中期）、落合俊典氏が9世紀中期以降のものとして推定した法金剛院の『大小乗経律論疏記目録』の巻下「人師集伝記」部に「集古今仏道論衡四巻 道宣 百冊」と記されている。落合俊典氏は本目録を藤原一族の氏寺である興福寺の現存蔵書目録と推定した。以上の推定に立脚すれば、平安前期頃（或いは中期）までに四巻本の『仏道論衡』はずでに日本へ伝わってきたことになる。しかしながら、その「百冊」紙は智昇が「開元入蔵録」に記した「九十九紙」よりほぼ40紙増えている。梶浦晋「法金剛院蔵『大小乗経律論疏記目録』について」、七寺古逸経典研究叢書第六巻『中国・日本経典章疏目録』、大東出版社、1998年、329頁。落合俊典『平安時代における入蔵録と章疏目録について』、七寺古逸経典研究叢書第六巻『中国・日本経典章疏目録』、大東出版社、1998年、471頁。

<sup>22</sup> 『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究（平成15～18年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書）第一分冊、55頁参照。

の形態を反映したと判断される。第3類の江南系統本に、大正蔵の校本として用いられた宋・元・明・宮本のほか、磧砂蔵<sup>23</sup>・洪武南蔵<sup>24</sup>・永楽北蔵<sup>25</sup>及び乾隆大蔵経<sup>26</sup>本が挙げられる。その中で早く成立したのは福州版と思溪版で、次は南宋の末から元末にかけて印造された磧砂蔵である。磧砂蔵本の影印版は既に出版され、版式から見て、普寧蔵本<sup>27</sup>の影響を受けているため<sup>28</sup>、元代で開版された可能性が高い。元・明の江南諸蔵のテキストの間には目立つ相違が見られず、僅かな訂正が認められるのみなので、ほとんど福州版と思溪版のテキストを継承し流伝したものであると考えられる。それでは日本古写経本はいかなる系譜に連なるものであろうか。

日本古写経本と他の版本大蔵経本とを対照した所、顕著な差異として巻数と内容の差が挙げられる。日本古写経本はすべて三巻本で、前二巻の内容は四巻本の刊本系統本の内容と同じだが、第三巻には唐代の記事、すなわち太祖・太宗時代の十事と高宗時代の四事が組み合わせられて載せられている。四巻本の第四巻に比べて最後の「今上在東都有洛邑僧靜泰勅対道士李栄叙道事」、「大慈恩寺沙門靈弁与道士対論」、「茅斎中与国学博士范贇談論」三事が欠けている。

日本古写経本と刊本大蔵経本の関係については、諸巻の巻首において掲

<sup>23</sup> 磧砂蔵本『集古今仏道論衡』の影印版是北京と台北で出版された2種類がある。台北版は『宋版磧砂大蔵経』（新文豊出版社、1987年4月）第30冊で、北京版は『影印宋元版一磧砂大蔵経』（線装書局、2005年11月）第98冊である。

<sup>24</sup> 洪武南蔵本『集古今仏道論衡』の影印版は『洪武南蔵』（四川省仏教協会、1999年2月）第166冊に収められている。

<sup>25</sup> 永楽北蔵本『集古今仏道論衡』の影印版は『永楽北蔵』（『永楽北蔵』整理委員会、2000年3月）第133冊に収められている。

<sup>26</sup> 乾隆大蔵経本『集古今仏道論衡』の影印版は『乾隆大蔵経』（新文豊出版、1991年12月）第121冊No.1525参照。

<sup>27</sup> 普寧蔵版のテキストは筆者が未見のため、その内容については、大正蔵本と中華大蔵経の脚注を参考にして推測するしかない。

<sup>28</sup> 磧砂蔵の『集古今仏道論衡』の折目に「千字文函号・帖数・紙数・刻工名」が刻され、「略経名・巻数」が消され「帖数」が加わっているのは普寧蔵の影響であろう。磧砂蔵の版式については、野沢佳美の『印刷漢文大蔵経の歴史—中国・高麗篇』（立正大学情報メディアセンター、2015年）55頁を参照。

第4卷		第3卷	
又在司成宣范義頰宅難莊易義一條	又在司成宣范義頰宅難莊易義第三十三		
上在西京蓬萊宮令僧靈辯與道士對論一條	上在西京蓬萊宮令僧靈辯與道士對論第三十		
上在東都令洛邑僧靜泰與道士李榮對論一條	上在東都令洛邑僧靜泰與道士李榮對論第三十一		
上幸東都召西京僧道士等於彼論義一條	上幸東都召西京僧道士等於彼論義事第三十	上幸東都召西京僧道士等於彼論義事第十四	
上以冬雪未降內立齋祀召佛道二宗論義事一條	上以冬雪未降內立齋祀召佛道二宗論義事第二十九	上以冬雪未降內立齋祀召佛道二宗論義事第十三	
今上召佛道二宗入內詳述名理事一條	今上召佛道二宗入內詳述名理事第二十七	今上召佛道二宗入內詳述名理事第十一	
上以西明寺成召僧道士入內論義事一條	上以西明寺成召僧道士入內論義事第二十八	上以西明寺成召僧道士入內論義事第十二	
上以冬雪未降內立齋祀召佛道二宗論義事一條	上以冬雪未降內立齋祀召佛道二宗論義事第二十九	上以冬雪未降內立齋祀召佛道二宗論義事第十三	
太宗詔契法師翻道經為梵文與道士辯駁事二十六	太宗詔契法師翻道經為梵文與道士辯駁事第二十六	太宗詔契法師翻道經為梵文與道士辯駁事第十	
太宗勅道士三皇經不足開化令焚除事九	太宗勅道士三皇經不足開化令焚除第二十五	太宗幸弘福寺手製願文并敘佛道先後事第九	
太宗幸弘福寺手製願文并敘佛道後先八	文帝幸弘福寺立願重施敘佛道先後第二十四	太宗問琳師辯正論信毀交報事第八	
太宗問琳師辯正論信毀交報事七	太宗文皇帝問沙門法琳交報顯應第二十三	辛中舍著齊物論淨琳二師抗釋事第七	
辛中舍著齊物論淨琳二師抗釋事六	辛中舍著齊物論淨琳二師抗釋第二十二	皇太子名佛道二宗入宮親觀論義事第六	
皇太子集三教學者詳論事五	皇太子集三教學者詳論事第二十一	太宗勅道士三皇經不足開化令焚除事第五	
太宗勅道先佛後僧等上諫事四	太宗勅道先佛後僧等上表請校勘第二十	太宗勸道先佛後僧等上表請校勘事第四	
道士李仲卿著論毀佛琳法師抗辯事三	道士李仲卿著論毀佛琳法師抗辯第十九	道士李仲卿著論毀佛琳法師抗辯事第三	
高祖幸國學統集三教問道是佛師事二	武皇幸國學問僧道能生佛事第十八	武皇幸國學問僧道能生佛事第二	
大唐高祖問僧形服利益事一	大唐高祖問僧形服利益事第十七	大唐高祖問僧形服利益事第一	

卷下



第2卷					第1卷					高麗再雕本（北方系統本）	開元寺藏本（江南系統本）	金剛寺本（日本古写経本）		
隋兩帝事宗佛理稟受歸戒事	隋高祖下詔述絳州天火焚老君像事	周天元皇帝納王明廣表開佛法事	周祖東巡滅法已久任道林請興佛事	周祖平齊集論毀法遠法師抗詔事	周高祖登朝論屏佛法安法師上論事	北齊高祖文宣帝下勅廢道教事七	梁高祖先事黃老後歸信佛下勅捨奉老子事六	魏明帝登極召沙門道士對論敘佛道先後事五	宋太宗文皇帝朝會群臣論佛理治致太平事四				元魏君臨釋李雙信致有興廢故述其由事三	晉孫盛老聃非大賢論附
隋兩帝事宗佛理稟受歸戒事第十六	隋高祖下詔述絳州天火燒焚老君像事第十五	周天元皇帝納王明廣表開佛法事第十四	周祖東巡滅法已久任道林請興佛事第十三	周祖平齊集論毀法遠法師抗詔事第十二	周高祖登朝論屏佛法安法師上論事第十一	齊高祖文宣帝下勅廢道事第十	魏明帝召佛道二宗論先後事第九	梁高祖下勅捨奉老子事第八	宋文帝集群臣論佛理致太平第七	後魏太武重道毀佛感應事第六	晉孫盛老聃子疑問反結事第五	魏陳思王辯道論事第三	魏時吳王立寺問三教優劣事第二	後漢隆法道士表請角試事第一
隋兩帝事宗佛理稟受歸戒事第六	隋高祖下詔述絳州天火燒焚老君像事第五	周天元皇帝納王明廣表開佛法事第四	周祖東巡滅法已久任道林與佛事第三	周祖平齊集論毀法遠法師抗詔事第二	周高祖登朝論屏佛法安法師上論事第一	齊高祖文宣帝下勅廢道事第十	魏明帝召佛道二宗論先後事第九	梁高祖下勅捨奉老子事第八	宋文帝集群臣論佛理致太平第七	後魏太武重道毀佛感應事第六	晉孫盛老聃子疑問反詰事第五	魏陳思王辯道論事第三	魏時吳王立寺問三教優劣事第一	後漢隆法道士表請求角試事第一
卷中					卷上									

げられた巻の目次から窺い知ることができる。次の表は開寶藏系統大藏経本を代表する高麗再雕本と江南系統大藏経本を代表する福州版及び日本古写経本を代表する金剛寺本を相互に比較した結果をまとめたものである。

網掛の箇所を示したように、巻の目次と本文の掲載順との相違が認められるのは、江南系統本の第一巻と日本古写経本の巻上と巻下である。すなわち、江南系統本の第一巻と日本古写経本の巻上の第八事「梁高祖下勅捨奉老子事第八」と第九事「魏明帝召佛道二宗論先後事第九」は掲載順が本文と逆である。また日本古写経本の巻下の第五事から第九事までの

「太宗勅道士三皇經不足開化令焚除事第五」

「皇太子名佛道二宗入宮親觀論義事第六」

「辛中舍著齊物論淨琳二師抗釋事事第七」

「太宗問琳師辯正論信毀交報事第八」

「太宗幸弘福寺手製願文并敘佛道先後事第九」

等に対応する本文の掲載順がそれぞれ

第九事

第五事

第六事

第七事

第八事

となっている。

一方、北方系統を反映する高麗再雕本の巻の目次の掲載順はすべて本文と一致している。

記事の数字番号を除いて、日本古写経本と江南系統本は巻の目次のタイトル（日本古写経本・巻下の第五事から第九事までを除き）がほぼ一致している。一方で、北方系統本は両者のタイトルと相違する箇所が多く、特に第一巻の巻の目次に集中している。例えば再雕本の第一巻の第一事は「後漢明帝感夢金人騰蘭入雒道士等請求角試事一」で、開元寺藏本と興聖寺本の「後漢隆法道士表請角試事第一」より「明帝感夢金人騰蘭入雒」の十文字が増え、再雕本の第一巻の第三事は「元魏君臨釋李雙信致有興廢故述其由事三」で、開元寺藏本と興聖寺本が完全に別のタイトルの「後魏太武重道

毀佛感應事第六」である。再雕本の巻一の附録分「魏陳思王曹植辯道論附」、「晉孫盛老聃非大賢論附」、「晉孫盛老子疑問反訊附」が開元寺蔵本と興聖寺本では独立した記事として扱われている。これは恐らく道宣が再治本を編纂した際に、加筆したと考えられる。なお、開元寺蔵本の巻の目次の題名は三巻本の古い形態を残しているが、一から三十三まで整った番号は、後の人によって再編集されたとみて良からう。また、刊本のテキストと比較すれば、日本古写経本は江南系統本と近い。要するに、初治本の日本古写経本は江南系統本の四巻本と高い親近性を持っているので、源泉が近い地域に流伝している両者の底本が深い関係を持っていると考えられる。

## 【翻刻】

## 『集古今仏道論衡』の日本古写経本翻刻

## 凡例

- 1 本翻刻は、金剛寺一切経にある三卷本『集古今仏道論衡實録』（金本）を底本とし、興聖寺一切経本（興本）と七寺一切経本（七本）の二種類の校本によって翻刻したものである。
- 2 底本の文字が、虫損と欠損等によって判読できない場合、一字につき□一つで示した。文字数を推定できない場合は□…□で示した。
- 3 底本に削除・衍字・顛倒符・補入符などの訂正符号が付されている場合は、それらの符号によって訂正し、その結果を示した。
- 4 底本の踊り字は、それが代表する文字に置き換えて示した。
- 5 読解の便の為、私意によって句読点を施し、また内容によって段落に分けた。
- 6 典籍名はすべて『 』で示した。二列の小文字の脚注は一列に変更して（ ）を付した。引用文は「 」で示し、引用文のなかに引かれた引用は“ ”で示した。
- 7 俗字・異体字・古今字などはすべて旧漢字（正字）に直し、脚注で示さない。  
（例）「花」＝「華」・「无」＝「無」・「煞」＝「殺」・「祝」＝「咒」。また「二十」・「三十」・「菩薩」などの合字は、現行の字に置き換えた。

## 集古今仏道論衡實録卷上

## 古今仏道論衡實録序

唐釋道宣撰

若夫無上佛覺、迥出籠樊、超<sup>1</sup>三界而獨高、截四流而稱聖。故使隄封所漸、區寓統於大千、聲教所鼻<sup>2</sup>、沐道露<sup>3</sup>於八部。所以金剛御座、寺<sup>4</sup>閻浮

1「超」、興本「起」。2「鼻」、興・七本「覃」。3「露」、興・七本「霑」。4「寺」、興・

之地心、至覺據焉、南<sup>5</sup>英聖之良衛<sup>6</sup>。遂有天人受道、龍鬼皈<sup>7</sup>心、挹酌不相之方、散<sup>8</sup>釋無明之患。

然夫聖人所作起必因時、時<sup>9</sup>有邪倒之夫、故即因而陶化、天竺盛於六諦、神洲<sup>10</sup>重於二篇、遂使儒道互<sup>11</sup>先眞偽交正。自非入證登位、何由分析殊途。致令<sup>12</sup>九十六道競飾澆詞、六十二見各陳名理、右<sup>13</sup>緣或異、大約斯歸、莫不謂無想<sup>14</sup>爲泥洹、指梵主爲生本。故二十五諦開計度之街<sup>15</sup>衢、六大論師立<sup>16</sup>神我之眞宰。居然設教、億載斯年、攝統塵蒙、九土崇<sup>17</sup>敬。考其術也、輕生而<sup>18</sup>會其源、論其行也、封因<sup>19</sup>而登其信。故有四韋陀論、推理極於<sup>20</sup>冥初、二有天根、尋生窮於劫始。臆度玄遠、冒日<sup>21</sup>生靈、致<sup>22</sup>有超<sup>23</sup>水投巖、坐熱臥棘、吸風露而曰仙、祖形骸而號聖、守死長迷、莫知迴覺。如來哀彼黔<sup>24</sup>塗<sup>25</sup>、降雲<sup>26</sup>赤澤。曜形丈六、金色駭於人天、敷暢<sup>27</sup>四辯、慧解暢<sup>28</sup>於幽顯。能使魔王列陣、十軍碎於一言、梵主來儀、三輪摧於萬惑。於是鏢腹戴爐之輩、結舌伏於道場、敬日重火之徒、洗心仰於覺教。舍<sup>29</sup>衛城側大偃邪鋒、堅固林中傾倒<sup>30</sup>巢穴。能事既顯、將務弘通、揚<sup>31</sup>正道之秋、金陵表乘機之瑞。清涼臺上圖以靈儀、顯節陵中陳茲聖景。度人立寺、創廣仁風、抑邪通正、於斯啓轍。

于斯時也、喋喋黔<sup>32</sup>首、無敢抗言、瑣瑣黃巾、時褻異議。然其化被不及於龍勒、名位無踐於槐庭王、何達其上賢、斑馬隆<sup>33</sup>其褒貶、安得與夫釋門相抗。雷同混迹者哉。斯何故耶。良以博識既寡、信<sup>34</sup>常迷、今則通視<sup>35</sup>具瞻、義必爽開前惑<sup>36</sup>。且<sup>37</sup>夫其流易曉、闢<sup>38</sup>澤之對天分、其理難通、孫盛之談之<sup>39</sup>海截。然猶覺<sup>40</sup>未經遠、情弊疎通、邪辯逼真、能<sup>41</sup>無猜貳。孔

七本「峙」。5「南」、興・七本「布」。6「衛」、興・七本「術」。7「皈」、興本「販」。8「散」、七本「敢」。9「時」、七本ナシ。10「洲」、七本「州」。11「互」、興本「亦」。12「令」、興本ナシ。13「右」、興・七本「在」。14「想」、七本「相」。15「街」、興・七本「衛」。16「立」、七本「之」。17「崇」、興本「家」。18「而」、七本「四」。19「因」、興・七本「固」。20「於」、七本ナシ。21「日」、興・七本「罔」。22「致」、興本「至」。23「超」、興・七本「起」。24「黔」、興本「野」。25「塗」、興・七本「梨」。26「雲」、七本「靈」。27「暢」、興・七本「揚」。28「暢」、興・七本「暢」。29「舍」、興本「金」。30「傾倒」、七本「倒傾」31「揚」、興本「玉關揚」32「一」、七本ナシ。33「隆」、興本「除」。34「信」、本「信保」。35「視」、興・七本「觀」。36「惑」、興・七本「或」。37「且」、七本「具」。38「闢」、興・七本「闕」。39「之」、興・七本ナシ。40「覺」、興・

丘之在東魯、尚啓虛<sup>42</sup>盈、卜商之據西河、猶參疑聖。自餘恒俗、無足計<sup>43</sup>論。啓啓

今以天竺胥徒、聲華久隔、振<sup>44</sup>旦張葛、交論寔繫。故商榷由來、銓衡敘列、筆削<sup>45</sup>監<sup>46</sup>、披圖藻鏡、總會聚之號、曰「佛道論衡」。分爲上中下三卷、如有隱括、覽者詳焉。

### 集古今佛道論衡實錄卷上

唐釋道宣撰

- 後漢隆法道士表請求角試事第一
- 魏時吳王<sup>47</sup>立寺問三教優劣事第二
- 魏陳思王雜道論事第三<sup>48</sup>
- 晉孫盛聖賢同軌聃非大賢論事第四
- 晉孫盛老子疑問反詰事第五
- 後魏太武重道毀佛感應事第六
- 宋文帝集群臣論佛理致太平第七
- 梁高祖下勅捨奉老子事第八
- 魏明帝召佛道二宗論先後事第九
- 齊高祖文宣帝下勅廢道事第十

### 後漢隆法道士表請通<sup>49</sup>試事第一

漢顯宗孝明皇帝感夢金人、乃遣使尋佛法。還洛陽、與道士角神力、僧護信爲立寺度人。『漢法本內傳』云明帝永平三年、上夢神人金身丈六、項有白光飛在殿前、欣然悅之。明日博問群臣「此爲何神。」有通人傳<sup>50</sup>毅<sup>51</sup>曰「臣聞天竺有得道者、號曰佛、飛行虛空、身有日光、殆將其神乎。」於是上悟、遣郎中蔡愔<sup>52</sup>、博士弟子王遵一十八人、於大日<sup>53</sup>支中天竺國、寫佛經四十四<sup>54</sup>章、藏於蘭臺石室第十四間<sup>55</sup>。又於洛陽城西雍門外爲起佛寺、於是

七本「學」。41「能」、七本ナシ。42「虛」、七本ナシ。43「計」、興本「討」。44「振」、興・七本「震」。45「削」、七本「削燕」。46「監」、興・七本「濫」。47「王」、七本「主」。48「雜」、興・七本「辨」。49「通」、興・七本「求角」。50「傳」、七本ナシ。51「毅」、興・七本「教」。52「愔」、七本「情」。53「日」、興・七本「月」。54「十」、七

壁畫<sup>56</sup>千乘萬騎、繞塔三匝。又於南宮清涼臺及開陽城門上、圖佛儀像。時造壽陵、名曰顯節、亦於其上作佛<sup>57</sup>圖像、廣如牟<sup>58</sup>子所顯。

時有沙門攝摩騰・竺法蘭、位行難論、志在開化。承蔡愔達天竺、請騰東行、不守區域<sup>59</sup>、隨至洛陽、曉<sup>60</sup>喻物情、宗<sup>61</sup>明信本。當<sup>62</sup>問騰曰「法王出世、何以化不及此。」騰曰「迦毘<sup>63</sup>羅衛者、三千大千世界百億日月之中心、三世諸佛皆在彼生、及<sup>64</sup>至天龍鬼神有願行者、皆生於<sup>65</sup>彼、受佛正化、盛<sup>66</sup>得悟道。餘處眾生無緣感<sup>67</sup>佛、佛<sup>68</sup>不往也。佛雖不往、光明及處、或五百年、或一千年外皆有聖人、傳佛聲教而化道<sup>69</sup>、廣說教<sup>70</sup>義。」帝信重<sup>71</sup>之。永平<sup>72</sup>四年正月一日、五嶽諸山道士朝正之次、自相命曰「天子棄<sup>73</sup>我道法、遠求胡<sup>74</sup>教、今日<sup>75</sup>朝集、可以表抗之。」其表曰「五嶽十八山觀、太上三洞弟子褚<sup>76</sup>善信等、死罪上言臣聞太上無形無名・無極無上・靈寶自然。大道出於造化之前、上士同遵<sup>77</sup>、百王不易。今陛下道遇<sup>78</sup>羲皇、德過堯<sup>79</sup>舜、竊承陛下棄本<sup>80</sup>末、求教西域、所事乃是胡神、所說不參華夏<sup>81</sup>。願陛下怒<sup>82</sup>臣等<sup>83</sup>罪、聽與試驗。馬<sup>84</sup>等諸山道士、多有徹視遠聽、博通經典。從元皇已來、太上群錄・太<sup>85</sup>虛符呪、無不綜練、達其涯極。或策使鬼神、或吞霞飲氣、或入火不燒、或履水不溺、或日<sup>86</sup>昇天、或隱形不測。至於方術藥餌、無所不能、願得與其比較<sup>87</sup>。一則聖上意安、二則得辨真偽、三則大道有歸、四則不亂華俗。臣等若比對不如、任聽重決、如其有勝、乞<sup>88</sup>除虛<sup>89</sup>妄。」

勅遣尚書令宋庠引入長樂宮、勅以今月<sup>90</sup>十五日、可集白馬寺。道士等

本「十二」。55「聞」、興本「問」、七本「問」。56「畫」、七本「畫」。57「佛」、興本ナシ。58「牟」、七本「手」。59「城」、七本「域」。60「曉」、興本ナシ。61「宗」、興・七本「崇」。62「當」、興・七本「帝」。63「毘」、七本ナシ。64「及」、興・七本「乃」。65「於」、七本ナシ。66「盛」、興本「感」、七本「咸」。67「感」、七本「咸」。68「佛」、興本ナシ。69「道」、興本「道導」、七本「導」。70「教」、七本ナシ。71「重」、興本「稱重」。72「十」、七本ナシ。73「棄」、興本「竊」。74「胡」、興本「朝」。75「今日」、興本「命因」、七本「今因」。76「褚」、興本「諸」。77「遵」、七本「導」。78「遇」、興・七本「邁」。79「堯」、七本「遼」。80「遂」、七本「逐」。81「夏」、興本「憂」。82「怒」、興・七本「怒」。83「等」、興本「華」。84「馬」、興・七本「臣」。85「太」、興本「大」。86「日」、興・七本「白」。87「校」、興・七本「校」。88「乞」、興本「氣」。89「虛」、興本ナシ。90「月」、興本「月虛」。

便置三壇、壇<sup>91</sup>別開二十四門<sup>92</sup>。南嶽道士褚<sup>93</sup>善信、華嶽道士劉正金<sup>94</sup>、恒嶽道士文<sup>95</sup>度、岱嶽道士焦<sup>96</sup>德<sup>97</sup>心、嵩<sup>98</sup>嶽道士呂惠通、霍山・天目山・五臺山・白鹿等八山道士祁文信等、都<sup>99</sup>合六百九十人、各持靈寶真文・太上<sup>100</sup>訣・三无<sup>101</sup>符錄等五百九<sup>102</sup>卷、置<sup>103</sup>於西<sup>104</sup>壇。茅成子・許成子・黃子・老子等二十七家子書、有三百三十五卷、置於中壇。饌食奠<sup>105</sup>祀<sup>106</sup>百神、置於東壇。帝時御行殿在寺南門、以佛舍利經像、置於道西<sup>107</sup>、十五日齋<sup>108</sup>。道士等以柴荻和檀<sup>109</sup>・沈香爲炬、遶子經而泣曰<sup>110</sup>臣等上啓太<sup>111</sup>極大道・元<sup>112</sup>始天尊・眾仙百靈、今胡亂中<sup>113</sup>憂<sup>114</sup>、人主信邪、正教失縱<sup>115</sup>、玄風墜緒。臣等敢置經壇、上以大<sup>116</sup>取驗、欲使開示群心、得辨<sup>117</sup>真偽。便縱火焚經、經從火化、悉成灰燼。道士等相顧失色、大生怖懼。將欲昇天隱形者、無力可能、禁劾鬼神者、呼策不應、各懷赧愧。南嶽<sup>118</sup>道士費叔才、自感而死、太<sup>119</sup>傅張衍語褚信曰「卿等所試無驗、即是虛妄、宜就西來真法。」褚信曰「茅成<sup>120</sup>子云太<sup>121</sup>上者、靈寶天<sup>122</sup>尊是也。造化之初、謂之太素、斯豈妄乎。」衍曰「太素<sup>123</sup>有貴德之名、無言教之稱、今子說有言教、即爲妄<sup>124</sup>也。」信便默然。

時舍利光明五色、直上空中、旋環如蓋、遍覆大眾、弊<sup>125</sup>日光。摩騰法師踊身高飛、坐臥在空、廣現神變、于時天雨寶花在<sup>126</sup>佛僧上。又聞天樂感動人情、大眾感悅、歎未曾有、皆繞法蘭、請說<sup>127</sup>要。蘭乃出大梵音、歎佛功德、亦令大<sup>128</sup>衆稱<sup>129</sup>三寶。說善惡<sup>130</sup>諸業皆有果報、六通<sup>131</sup>三乘、諸相不

91「壇」、興本ナシ。92「門」、興本「日門」。93「褚」、興本「諸」。94「金」、興・七本「念」。95「文」、七本「桓文」。96「焦」、興・七本「集」。97「德」、興・七本「得」。98「嵩」、七本「山高」。99「都」、興本「都」。100「上」、興・七本「上玉」。101「无」、七本「元」。102「九」、興本「九十」。103「寶真……置」、十九字興本ナシ。104「西」、七本「四」。105「奠」、七本「貪」。106「祀」、興本「礼」。107「西」、興本「面」。108「齋」、興・七本「齋訖」。109「檀」、七本「壇」。110「泣曰」、七本「清」。111「太」、興本「大」。112「元」、興本「无」。113「亂中」、興・七本「神亂」。114「憂」、興・七本「夏」。115「縱」、興・七本「縱」。116「大」、七本「火」。117「辨」、七本「辯」。118「嶽」、興本「丘」。119「太」、興本「大」、七本「火」。120「成」、七本「信成」。121「太」、興本「大」。122「天」、興本「大」。123「素」、七本「毒」。124「妄」、興本「委」。125「弊」、興・七本「映蔽」。126「在」、興本ナシ。127「說」、興・七本「說法」。128「大」、興本「太」。129「稱」、興・七本「稱揚」。130「惡」、七本「要」。131「通」、興・七本「道」。



一、以説出家功德其福最高、初立佛寺、同梵福量。時有司空陽城使<sup>132</sup>劉<sup>133</sup>峻與諸官人士庶等千餘人出家、及四嶽諸山道士呂惠通等六百二十八人出家、陰<sup>134</sup>夫人・王婕妤<sup>135</sup>等與諸官人婦女等二百三十人出家。至月末以來、日日供設、種種行施、法衣瓶器並出所司。便立十寺安僧在城邑外、三寺安尼在雒城內、漢立佛法自此興焉。摩騰西來、將畫<sup>136</sup>釋迦<sup>137</sup>像、帝乃令圖出之、於陵園及洛城供養。

### 魏時吳主爲佛造塔因問孔<sup>138</sup>三教優劣事第二

『吳書』云孫權赤烏四年、有沙門康僧會者、是康居國大丞相之長子、神儀剛正、遊化爲任。於<sup>139</sup>時、三國鼎峙、各擅威衡、佛法北通、未達南國、會欲道被未聞<sup>140</sup>、開<sup>141</sup>教江表。初達建鄴、營立茅茨、設像行道、吳人初見、謂之<sup>142</sup>妖異。有司奏聞、吳主問曰「佛有何神驗也。」會曰「佛晦靈迹、出餘千載、遺形舍利、應現無方。」吳主曰「若得舍利、當爲立塔。」經三七日、遂獲舍利、五色曜天、剖之逾堅、燒之不然、光明出火、作大蓮華、照曜宮殿。臣主驚嗟、信情發越、因爲造塔、度人立寺。以其所住爲佛陀里、教法創興、故遂名建初寺焉。

下勅問尚書令闕澤曰「漢明已來、凡有幾年、佛教入漢<sup>143</sup>既久、何緣始至江東。」澤曰「自永平十年佛法初來、至今赤烏四年、則一百七十年矣。初永平十四年、五嶽道士與摩騰角力之時、道士不如。南嶽道士諸<sup>144</sup>善信・費叔才等在會自憾而死、門徒弟子歸葬南嶽、不預出<sup>145</sup>家、無人流<sup>146</sup>南<sup>147</sup>。後遭漢政凌通<sup>148</sup>、兵戎<sup>149</sup>不息、經今年<sup>150</sup>載、始得興行。」又問曰「孔<sup>151</sup>丘老子得與佛比對不。」澤曰、「臣聞魯<sup>152</sup>孔丘<sup>153</sup>者、英才誕秀、聖德<sup>154</sup>不群、世號素王、制述經典、訓獎周道、教化來葉。師儒之風、澤潤今古。亦有逸

132「使」、興・七本「侯」。133「劉」、興本「譽」。134「陰」、七本「陰陰」。135「好」、興本「婦」。136「畫」、七本「畫」。137「迦」、興・七本「迦立」。138「因問孔」、興本「司問孔」。139「於」、七本「子」。140「聞」、興本ナシ。141「開」、七本ナシ。142「之」、興本ナシ。143「教入漢」、興本「受入漢入漢」。144「諸」、七本「褚」。145「出」、興本「不預」。146「人流」、興本ナシ。147「南」、興・七本「布」。148「通」、興・七本「遲」。149「兵戎」、七本「岳式」。150「年」、七本「多」。151「孔」、興本「死」。152「魯」、興本「曾」。153「丘」、七本「岳」。154「德」、七本「德德」。

民、如許成子・原陽子・莊子・老子等百家子書、皆修身自翫、放暢山谷、縱汰其心。學<sup>155</sup>歸淡泊<sup>156</sup>、事乖<sup>157</sup>倫、長幼之節、亦非安俗化物之風。至漢景帝、以黃子・老子義體俗化物之<sup>158</sup>子爲經、始立道學、勅令朝野悉諷誦焉。若將孔老二教遠方佛法、遠則<sup>159</sup>遠矣。所以然者、孔老二教、法天制用、不敢違天。諸佛設教、天法奉行、不敢違佛、以此言之、實非比對。」吳主大悅<sup>160</sup>、澤爲太子太<sup>161</sup>傅。餘如晉宋炳『明佛論』廣之。

### 魏陳思王曹子建違<sup>162</sup>道論第三

夫神仙之書・道家之言、乃傳云說「上<sup>163</sup>爲辰尾宿、歲星降爲東方預<sup>164</sup>、淮南王安誅於淮<sup>165</sup>南、而謂之獲道輕舉<sup>166</sup>、鉤弋死於雲陽、而謂之尸逝極宮<sup>167</sup>。」其爲虛妄甚矣。中<sup>168</sup>興篤論之士、有桓君山者、其所著述多善。劉子<sup>169</sup>駿當<sup>170</sup>問<sup>171</sup>言「人誠能仰耆<sup>172</sup>欲・闔耳目、可不衰竭乎。」時庭中有一老榆、君山指而謂曰「此樹無情欲可忍、無耳目可闔、然猶枯槁腐朽。而子<sup>173</sup>乃言可不衰竭、非談也。」君山援榆喻之、未是也。何者。余前爲王莽典樂大夫、『樂記』言「文帝得魏文侯樂人竇公、年百八十兩<sup>174</sup>目盲。帝奇而問之何所施行。對曰臣年十三而失明、父母哀其不及事、教臣鼓琴、臣不能導引、不知壽得何力。」君山論之曰「頗得少盲、專一內視、精不外鑒之助也。」先<sup>175</sup>難子駿以內視無益、退論竇公便以不鑒證之、吾未見其定<sup>176</sup>論也。君山又曰「方士有董仲君者、有罪繫獄、楊死數日、目陷<sup>177</sup>蟲出、死而復生、然後竟死。生之必死、君子所達、夫何喻乎。夫至神不過天地、不能使蟄虫夏<sup>178</sup>潛、震雷冬發、時變則物動、氣移而事應。彼仲君者乃能藏其氣、屍其體、爛其膚、出其虫、無乃大怪乎。」

155「學」、興本「覺」。156「泊」、興本「白」。157「乖」、興・七本「乖人」。158「俗化物之」、興・七本「尤深改」。159「遠則」、七本「遠則遠則」。160「悅」、興・七本「悅以」。161「太」、興本「大」。162「違」、興・七本「辯」。163「傳云說上」、興本「云說」、七本「云傳說上」。164「預」、興本ナシ、七本「朔」。165「淮」、興本「維」。166「舉」、興本「與」。167「極宮」、興・七本「樞空」。168「中」、七本ナシ。169「子」、興本ナシ。170「當」、興・七本「嘗」。171「問」、興本「聞」、七本ナシ。172「仰耆」、興・七本「抑嗜」。173「子」、興・七本「子駿」。174「兩」、興本作「而」。175「先」、興本「光」。176「定」、七本「之」。177「陷」、興本「涌」。178「夏」、興本「憂」。

世<sup>179</sup>有方士、吾王悉所招致。甘<sup>180</sup>陵有甘<sup>181</sup>始、廬江有左慈、陽城有都<sup>182</sup>儉、始得行氣導引、慈<sup>183</sup>房中之術、儉善辟穀、悉號<sup>184</sup>三百歲。本所以集之於魏國者、誠恐斯人之徒接姦讒以欺衆、行妖慝以惑<sup>185</sup>人、故聚而禁之。甘始者老而有少容、自餘術士咸共一<sup>186</sup>歸之。然始詞繁寡<sup>187</sup>實、頗竊有怪之言。若遭秦始皇・漢武帝、則復徐福・欒大之徒矣。桀紂殊世而齊惡、姦人異代而等偽、乃如此耶<sup>188</sup>。

又世虛然有仙人之<sup>189</sup>說。仙人者、黨獠後<sup>190</sup>之屬與。世人得道化爲仙人乎。夫知<sup>191</sup>入海爲蛤、鷺<sup>192</sup>入海爲蜃<sup>193</sup>、當其徘徊其翼、差池其羽、猶自<sup>194</sup>也。忽<sup>195</sup>然自投、神化體變、乃更與元龜鼈<sup>196</sup>群<sup>197</sup>、豈復自識翔林薄・巢垣屋之娛乎。而頗爲匹夫所罔。虛<sup>198</sup>妄之詞、信眩惑之說、隆禮以招弗臣、傾產以供虛求、散王爵以榮之、清閑館以居之、經年累稔、終無一効。或歿於沙丘、或崩於五柞。臨時雖復誅其身・滅其族、紛經<sup>199</sup>足爲天下笑<sup>200</sup>矣。然壽命長短、骨體強劣、各有人焉、善養者終之、勞擾者半之、虛用者夭之、其斯之謂與<sup>201</sup>。

陳思王曹植、字建、魏武帝第四子也。初封東阿<sup>202</sup>郡王、終後諡爲陳思王也。幼含陸<sup>203</sup>障、十歲能屬<sup>204</sup>文、下筆便成、初不改定、世間術藝無不畢<sup>205</sup>善、邯鄲<sup>206</sup>鄆<sup>207</sup>淳見而駭服、稱爲天人。

植每讀佛經、輒流連嗟<sup>208</sup>、以爲至道之宗極也、遂制轉讀七聲昇降、曲<sup>209</sup>折之響、世之諷誦、咸憲章焉。嘗遊漁山、忽聞空中梵天之響、清颺哀婉、其聲動心、獨聽良久、而侍御莫聞。植深感神理、彌悟法應、乃摹其聲節、寫爲梵唄、撰文制音、傳爲後<sup>210</sup>式。梵聲光顯、始於此焉。其所傳唄<sup>211</sup>

179「世」、七本ナシ。180「甘」、興本「耳」。181「甘」、興本「耳」、七本ナシ。182「都」、七本「郗」。183「慈」、興・七本「慈曉」。184「號」、興本ナシ。185「惑」、七本「或」。186「一」、興・七本ナシ。187「寡」、興本「宣」。188「耶」、興本ナシ。189「之」、七本ナシ。190「後」、興・七本「後」。191「知」、興・七本「雉」。192「鷺」、興本「燕」。193「蜃」、七本「辱虫」。194「自」、興・七本「自識」。195「忽」、興本ナシ。196「元龜鼈」、興本「元龜欲龜」、七本「鼈鼈」。197「群」、興・七本「爲群」。198「虛」、興・七本「納虛」。199「經」、興本「絃」、七本「然」。200「笑」、七本「嘆」。201「與」、興・七本「歟」。202「阿」、興本「河」。203「陸」、七本ナシ。204「能屬」、七本ナシ。205「畢」、興本「異」。206「邯」、興・七本「耶」。207「鄆」、七本「戰」。208「嗟」、七本「嗟翫」。209「曲」、興本「典」。210「後」、興本ナシ。211「唄」、興本

凡六契、見梁釋僧祐『法苑集』。然統栖<sup>212</sup>道源、精據仙錄、姦妄奇妖、終歸飾詐、故前論所委辯當明矣。

#### 晉孫盛撰聖賢同執老聃非大賢論第四

頃獲閑<sup>213</sup>居、復申所詠。仰先哲之玄<sup>214</sup>、考大賢於靈<sup>215</sup>術、詳觀風流、究覽行止、高下之辯殆可髣髴。夫大聖乘時、故迹<sup>216</sup>浪於所因、大賢次微、故與<sup>217</sup>聖而舒卷。所因不同、故有揖讓<sup>218</sup>與干戈迹乖<sup>219</sup>、次微道惡、故行嚴<sup>220</sup>之軌莫異。亦猶龍虎之從風雲、形聲之會影響、理固自然、一<sup>221</sup>非召之也。是故箕・文同兆、元吉於虎光<sup>222</sup>之吻、顔・孔俱否、道匡<sup>223</sup>於匡陳之間。唐堯則天、稷契翼其化、湯<sup>224</sup>武革命、伊呂讚<sup>225</sup>其功。由斯以言、用舍影響之論、惟我與爾之談、豈不信哉。何者。大賢<sup>226</sup>庶幾觀象知器、觀象知器預籠吉凶、預籠吉凶是運形<sup>227</sup>同、御治月<sup>228</sup>應、對接群子<sup>229</sup>、終保元吉、窮通滯礙、其揆一也。但欣聖樂易、有待而<sup>230</sup>亨、欽冥而不能冥、悅家<sup>231</sup>而不能寂、以此爲優劣耳。至於中賢・第三之人、去聖有間<sup>232</sup>、故冥體之道未盡、自然運用、自不得玄同<sup>233</sup>。然希<sup>234</sup>爲勝、高想頓足、仰慕淳風、專詠至靈<sup>235</sup>、故有栖峙林<sup>236</sup>壑、若巢許之倫者、言行抗轡、如老彭之徒者、亦非故然、理自然也。

夫形躁好靜、質柔愛剛、讀所常習、愒<sup>237</sup>所希聞<sup>238</sup>、世俗之常也。是以見編<sup>239</sup>抗之詞、不復尋因應之適、觀矯枉之論、不復悟過直之失耳。雜<sup>240</sup>老書之作與聖教同者、是代大匠斲、駢<sup>241</sup>枝指之喩、其詭乎。聖教<sup>242</sup>者、是遠

ナシ。212「栖」、興・七本「括」。213「閑」、七本「聞」。214「玄」、興本「玄微」、七本「微」。215「靈」、七本「虛」。216「迹」、七本「遠」。217「興」、七本「大興」。218「讓」、七本ナシ。219「乖」、七本「半」。220「嚴」、興・七本「藏」。221「一」、興・七本ナシ。222「光」、七本「兕」。223「道匡」、興・七本「逍遙」。224「湯」、興・七本「陽」。225「讚」、興本「贊」。226「賢」、七本「聖賢」。227「運形」、七本「以運形期」。228「月」、興・七本「因」。229「子」、興・七本「方」。230「吉窮通滯礙其揆一也但欣聖樂易有待而」、十七字、興本ナシ。231「家」、興・七本「寂」。232「間」、七本「問」。233「玄同」、興本「商」。234「希」、興・七本「希古」。235「靈」、七本「云」。236「林」、興本「林林」、七本ナシ。237「愒」、興本「惕」。238「聞」、興本「門」。239「編」、七本「綸」。240「雜」、七本「案」。241「駢」、七本「駢拇」。242「故」、興・七本「教」。

救世之宜、違明道若殊之義也。六經何常闕虛靜之訓、謙冲之誨哉。孔子曰「述而不作、信而好古、竊比我於老彭。」尋斯指。則老彭之道、以籠田早<sup>243</sup>乎聖教之<sup>244</sup>矣。且旨<sup>245</sup>說二事而不非實言也。何以明之。聖人淵寂、何不好哉。又三皇五帝已<sup>246</sup>下、靡不制作、是故『易』象經墳<sup>247</sup>、爛然炳著、棟<sup>248</sup>字衣<sup>249</sup>裳、與時、安在述而不作乎。故『易』曰「聖人作而萬物觀。」斯言之發、蓋指說老彭之德、有以髣<sup>250</sup>髴類已形迹<sup>251</sup>之處所耳、亦猶匿怨而友其人。「左丘明恥之、丘亦恥之。」豈若於吾言無所不說、相體之至也。且顏孔不以導養爲事、而老彭養之、孔顏同乎斯人、而老彭異之。凡斯數<sup>252</sup>者、非不惡<sup>253</sup>聖之迹、而又其書往往矛盾、粗列如左<sup>254</sup>。大雅摺袖<sup>255</sup>、幸祛其弊盛、又不達老聃輕舉之旨、爲欲著訓我狄、宣導殊域類乎。

若欲宣導殊類、則左<sup>256</sup>衽非玄<sup>257</sup>之所、孤逝非嘉遁之舉。諸憂<sup>258</sup>凌遲、郭訓所先、聖人之教、自近及遠、未有輒張遐險、如此之遊也。若懼禍避地、則聖門可隱、商朝魯邦有無如者矣。苟得其道、則遊刃有餘、觸地元吉、何違天心於我貂<sup>259</sup>。如不能然者、得無廣<sup>260</sup>於朝隱、而祈仙之徒乎。

昔裴逸民、作『崇有』・『貴無』二論。時談者、或以爲不虛達勝之道者、或以爲矯時流通者。余以爲尚無既失之矣、崇有亦未爲得也。道之爲物、惟悅<sup>261</sup>惟怨、因應無方、惟變所適。值澄淳之時、則司契垂拱、遇萬動之化、則形體欲<sup>262</sup>興。是以洞鑿雖同、有無之教異陳、聖致雖一、而稱爲之名殊目。唐唐天<sup>263</sup>不希結繩、湯武不擬揖讓、夫豈異哉。時運故也。陽伯<sup>264</sup>以執古之道以御今之有、逸民欲執今之有<sup>265</sup>以絕<sup>266</sup>古之風。吾<sup>267</sup>故以爲、彼二子者、不達圓化之道、各矜其一方<sup>268</sup>者耳。

243「田早」、興本「日卓」、七本「單」。244「之」、興・七本「之内」。245「旨」、七本「指」。246「已」、七本ナシ。247「墳」、興本「憤」。248「棟」、七本ナシ。249「字衣」、興本ナシ。250「髣」、七本ナシ。251「迹」、興本「遠」。252「數」、七本ナシ。253「惡」、七本「亞」。254「左」、七本「在」。255「袖」、七本「紳」、興本「紳」。256「左」、七本「在」。257「玄」、七本「玄化」。258「憂」、七本「夏」。259「我貂」、興本「我猶」、七本「戒指」。260「廣」、興・七本「庶」。261「悅」、七本「恍惚」。262「欲」、興本「興」、七本「教」。263「唐天」、興・七本「虞」。264「陽伯」、七本「伯陽」。265「有」、興本ナシ。266「絕」、七本「施」。267「吾」、七本「五」。268「方」、七本「万」。

## 晉孫盛老子疑問反詰第五

『道經』云「故常無欲以觀其妙、常<sup>269</sup>有欲以觀其徼。此兩者同出而異名、同謂之玄、玄之又玄、衆妙之門」。舊說及王弼解、妙謂始、徼謂終也。夫觀始要終觀妙知著、達人之鑒也。既以欲澄神照其妙始、則自斯以已宜悉鎮之。何以復須有欲得其終乎。且有欲俱出妙門、同謂之玄。若然以往復、何獨貴於無欲乎。天下皆知美之爲美、斯惡已、皆知善之爲善、斯不善已<sup>270</sup>。

盛以爲夫美惡之名、生乎美惡之實、道德淳美、則有善名、頑嚚聲味、則有惡聲。故『易』曰「惡不積、不足以滅身。」又曰「美在其<sup>271</sup>中、暢於四支而發於事業。」又曰「『韶』盡美矣、未盡善也。」然則大美大善、天下皆知之、何得云斯惡乎。若虛美非美、爲善非善。所美過美、所善違中、若此皆世教所疾。聖王奮誠天下、亦自知之、於斯談也不尚賢、使民不諍、不貴難得之貨、使民不爲盜、常使民無知無欲、使知者不敢爲。又曰「絕字<sup>272</sup>無憂。唯之與阿相去幾何。善之與惡相去何若。」又下章云「善人、不善人之師、不善人、善人之賢<sup>273</sup>。不貴其師、不愛其資、雖智大迷。」盛以爲、民苟無欲、亦何<sup>274</sup>所師於師哉。既相師資、非學如何不善師善。非尚賢如何貴愛既在<sup>275</sup>。則善惡不得不彰<sup>276</sup>、非相去何若之謂。下<sup>277</sup>章云「人之所教我、亦以教人。吾言甚易知、而天下莫能知。」又曰「吾將以爲教父。」

原<sup>278</sup>斯談也、未爲絕學。所云絕者、孔之學耶。堯之學耶隨時設教、老氏之言一其所尚。隨時設教、所以通百代、一其所尚、不得不滯於適變、此又闢弊所未能通者也。

「道冲而用之又不盈」・「知<sup>279</sup>其光同其塵」、盛以爲老聃可謂知道、非體道也。昔陶唐之莅天下也、無日解哉、則維昭<sup>280</sup>任衆師、錫<sup>281</sup>匹夫則馭然禪授。豈非冲而用之、光塵同彼哉。伯陽則不然、既處渴<sup>282</sup>位、復遠導西戎、行止則猖狂其迹、善<sup>283</sup>書則<sup>284</sup>矯譎<sup>285</sup>其言、和光同塵固若是乎。余固以爲知道、體道則未也。「三<sup>286</sup>者不可致詰、混然爲一繩。」、「号<sup>287</sup>不可名。復歸於

269「常」、七本「故常」。270「已」、興本ナシ。271「其」、興本「身」。272「字」、興・七本「學」。273「賢」、興・七本「資」。274「何」、興本ナシ。275「在」、興本「存」。276「彰」、興本「障」。277「下」、七本「又下」。278「原」、興・七本「源」。279「知」、興・七本「和」。280「昭」、興本「照」。281「錫」、興本ナシ。282「渴」、興・七本「濁」。283「善」、興・七本「著」。284「則」、興本ナシ。285「譎」、興・七本「誑」。

無物、無物之像、是謂惚恍。」下<sup>288</sup>章云「道之爲物、惟恍與惚。惚兮恍兮、其中有象、恍兮惚兮、其中有物。」此二章或言無物、或言有物、先有所不宜者也。

執足<sup>289</sup>道、以御今之有。上章云「執者失之、爲者敗之。」而復云「執古之道以御今之有。」或執或否、得無陷矛盾<sup>290</sup>之論乎。「絕聖棄智、民利百倍。」盛曰夫有仁聖、必有仁聖之迹、此而不崇、則陶訓焉融。仁義不尚、則孝慈道喪。老氏既云絕聖、而每章輒稱聖人、既稱聖人、則迹焉能得絕。若所欲絕者、堯<sup>291</sup>舜・周孔之迹、則所稱聖者、爲是何迹乎。即如其言、聖人有宜滅其迹者、有宜稱其<sup>292</sup>迹者、稱滅不同、吾<sup>293</sup>誰適從。「絕仁棄義、民復孝慈。」若如此談、仁義不絕、則不孝不慈矣。復云「居善地」、「與善仁」。不審「與善仁<sup>294</sup>」之仁、是向所云「欲絕者」非耶。如其是也、則不宜復稱述<sup>295</sup>矣、如其非也、則未詳二仁之義。一仁宜絕、一<sup>296</sup>仁宜明、此又所未達也。若謂不聖<sup>297</sup>、不仁之仁、則教所未詳、不假高唱矣。退至莊周云「聖人不死、大盜不止。」又曰日當<sup>298</sup>竊仁義、以取<sup>299</sup>齊國。夫天地陶鑄、善惡兼育、各稟自然、理不相關。梟鳩縱毒、不假學<sup>300</sup>鸞鳳、豺虎肆害、不借術於騏驎。此皆天資自然、不須外物者也、何至凶頑之<sup>301</sup>、獨當假仁義以濟<sup>302</sup>其姦乎。若有何至凶頑之人獨當假仁義以濟其見姦乎若<sup>303</sup>乃冒<sup>304</sup>頓殺父、鄭伯盜鄆、豈復先假孝道獲其終害乎。而莊李楛擊殺根、毀駁正訓、何異疾盜賊而銷鑄干戈、都<sup>305</sup>食壹<sup>306</sup>而絕棄嘉穀乎。後之談者、雖曲爲其義、辯而釋之、莫不艱頓於殺聖、同<sup>307</sup>躓於忘親也。知我者希<sup>308</sup>、則我貴矣。上<sup>309</sup>章云「聖人之在天下」、「百姓皆注其耳目」。師資貴愛、必彰萬物、如斯則知之者安得布<sup>310</sup>哉。知希者何必貴哉。即己之身<sup>311</sup>貴、九服何得背。實抗言云

286「三」、七本「道經云三」。287「号」、七本「繩兮」。288「下」、七本「又下」。289「足」、興・七本「古之」。290「盾」、興本「消」。291「堯」、興本「絕堯」。292「其」、興本ナシ。293「吾」、興本「五口」。294「仁」、興本「人」。295「述」、興本「迷」。296「一」、興本ナシ。297「聖」、七本「聖之聖」。298「日當」、興・七本「田常」。299「取」、興本ナシ。300「學」、七本「學於」。301「之」、興・七本「之人」。302「濟」、興本「齊」。303「若有何至凶頑之人獨當假仁義以濟其見姦乎」、興・七本ナシ。304「冒」、興本「日月」。305「都」、興・七本「觀」。306「壹」、興・七本「噎」。307「同」、興・七本「困」。308「希」、興本「不布」。309「上」、七本「又上」。310「布」、興・七本「希」。311「之身」、興本「身」、七本「之身見」。

貴由知希哉。斯蓋欲抑動恒俗、故發此過言耳。聖教則不然、中和<sup>312</sup>其詞、以理訓道<sup>313</sup>。故曰在家必聞、在邦必聞也、是聞必達也、不見善而無悶、潛龍之德、人不知而不愠。君子之道、衆好之必察焉、衆惡之必察<sup>314</sup>焉、既不以知多爲顯、亦不<sup>315</sup>以知少爲貴。誨誘<sup>316</sup>綽綽、理中自然、何與老聃之言、同日而語其優劣哉。「禮者、忠信之薄而亂之首、前識者、道之華而愚始<sup>317</sup>。是以本丈夫<sup>318</sup>處其厚不居其<sup>319</sup>薄、處其實不居<sup>320</sup>其華也。」盛曰「老聃足知聖人禮樂、非玄勝之具不獲已而制作耳、而故毀之何哉。是故屏撥禮學、以全其任自然之論、豈不知菽麥不復得返自然之道、直欲申已好之懷、然則不免情於所悅、非浪心救物者也。非惟不救、乃獎其弊矣。」或問「老莊所以故發此唱、蓋與聖<sup>321</sup>教相爲表裏、其於陶物明訓其歸一也。」盛以爲不然、夫聖人之道、廣大悉備<sup>322</sup>、猶日月懸天、有何不照<sup>323</sup>哉。老氏<sup>324</sup>之言、皆<sup>325</sup>絞於六經矣、寧復有所僭之、俟佐助於聃周乎。即莊周所謂「日月出矣、而燭火不息」者也。至於虛詠譎怪微詭之言、尚拘<sup>326</sup>滯於一方、而於<sup>327</sup>橫稱不經之奇詞也。「王侯得一以爲天下貞」、貞、正也。下<sup>328</sup>章云「孰<sup>329</sup>知其極、其無正耶。正復爲奇、善復爲妖。」尋此二章、或云「爲天下正」、或云「無正」。既云「善人不善人師」、而復云「爲妖」、天下之善一也、而或師或妖、天下之正道一也、而云「正復爲奇」、斯反鄙見所未能通也。

集論者曰盛字安國、師<sup>330</sup>東晉名士綽之子<sup>331</sup>也、祖則魏名臣之子荊也。綽有顯論、才學所推、聞之前史、盛以<sup>332</sup>爲名父之子仕晉、爲給事中祕書監散騎常侍。吳昌男、少好墳典、遊心史籍、常以爲雖賢聖玄邈、得諸言表、而仁愛自我、陶染庶物、漸漬之功、莫過乎經史。是以仲尼因魯史記以著『陽<sup>333</sup>秋』、使百代之後仰高風以式瞻。孟軻・孫卿並讚揚大化、既<sup>334</sup>乎史遷、亦記一代之成敗、明鑒誠作來今。遂曆<sup>335</sup>心博綜、撰<sup>336</sup>考諸事疏<sup>337</sup>、著

312「和」、興本「知」。313「道」、七本「導」。314「之必察」、興本「必之察察」。315「以」、興本ナシ。316「誘」、興本「誘誘」。317「始」、七本「之始」。318「本丈夫」、興本「大夫」、七本「大丈夫」。319「居其」、興本「居其其」、七本「處其」。320「居」、七本「處」。321「聖」、興本ナシ。322「備」、七本「備矣」。323「照」、七本「照者」。324「老氏」、興本「老伏」、七本「孔氏」。325「皆」、七本「智」。326「拘」、興本ナシ。327「於」、興・七本ナシ。328「下」、七本「又下」。329「孰」、興本「執」。330「師」、七本「有說云即」。331「子」、七本「後」。332「以」、七本ナシ。333「陽」、七本「春」。334「既」、七本「暨」。335「曆」、七本「歷」。336「撰」、興本ナシ。337「疏」、興本ナ



『陽<sup>338</sup>秋』、庶擬前賢、以美道訓傳、本并音合三十二卷。又命掌國史竭意經論、一時名作是稱良<sup>339</sup>史、未奏遂卒。子潛以晉太元十五年上之、詔曰「得<sup>340</sup>上故、祕書監所著書、省以慨然。遠模前典、憲章在昔、與<sup>341</sup>一代之事。」輒勅納之祕閣、以貽于後。潛襲父爵、位參驃騎將軍諮議參軍、見於『晉紀』。盛凡著述、備如別集。品評老氏中賢之流、故知爲尹喜述書、乃祖承有據。嵇子云、「老子就涓子學九仙之術、尋乎練餌、斯或有之。至於聖也、則不云學。」故語云「生知者上、學知者次」。王何所位<sup>342</sup>、典達鴻猷。故斑固敘人九等之例、孔丘等爲上上、類例皆是聖、李耳等爲中上、類例皆是賢。聖有極聖惡<sup>343</sup>聖、賢有大賢小<sup>344</sup>賢、並以神機有利鈍、故智用有漸頓。盛敘老非大賢、取其閑放自牧、不能兼濟於萬物、坐觀周衰、陽遁於西裔、行及秦壤、而實死味<sup>345</sup>風、葬槐里、非遁天之仙、信矣。

#### 元魏君臨釋李雙信致有廢興之相故述其由第六

魏太祖道武帝、託跋珪天興元年下詔曰「夫佛法之興、其來遠矣。濟<sup>346</sup>之功冥及存沒、神蹤遺跡信可依憑。可於京邑建飾容範、脩整宮舍、令信向之徒有所居止。」是歲、始作五級佛圖・耆闍崛山及須彌殿。加<sup>347</sup>以飾繪、別構講堂禪室・沙門座處、莫不具焉。

魏世祖太武託跋壽<sup>348</sup>即位、亦遵太祖・太宮<sup>349</sup>之業。雖有黃老不味其術、每引高德沙門與談玄理。於四月八日、与<sup>350</sup>諸佛像行於廣衢、帝親御門樓、散花禮敬、篤敬兼至。晚據有平城、興敬李術、爲立道壇。司徒雀時<sup>351</sup>少習左道、猜忌釋門、既位居佐輔、尤不信有佛、謂是虛誕。見讀佛經奪而投井中、密欲加滅<sup>352</sup>、燾所杖<sup>353</sup>信。道士寇謙之與皓歎狎、遂奏拜謙位稱天師皓有才略太武信用國人以爲摸措<sup>354</sup>。

時有沙門玄高、道王河西、名高海右、神用莫測、貴賤咸重。燾乃軍

シ。338「陽」、興・七本「晉陽」。339「良」、興本「長」。340「得」、興本「得得」。341「與」、七本「亦」。342「位」、興本「謂」。343「惡」、七本「亞」。344「小」、七本「中」。345「味」、興・七本「扶」。346「濟」、七本「濟益」。347「加」興本ナシ。348「壽」、七本「燾」。349「宮」、興・七本「宗」。350「与」、興・七本「與」351「雀時」、興・七本「崔皓」。352「滅」、七本「滅皓有才略太武信用國人以爲摸措」。353「杖」、興・七本「仗」。354「皓有才略太武信用國人以爲摸措」、七本ナシ。

逼<sup>355</sup>境、徵高東還、暨達平城、大弘禪化。太子晃事高爲師、形心盡禮。晃時被讒、爲父所疑、乃告高曰「空羅枉苦、何由可脱。」高令作金光明齋懺七日懇誠、燾乃夢見其祖及父<sup>356</sup>執劍列威<sup>357</sup>曰、「何故信讒、枉疑太子。」燾驚覺、大集群臣、說所告夢、諸臣咸言太子無過、實如皇靈降誥。燾於太子、無復疑焉、蓋高誠感之力也。因下書曰「朕承祖宗重光之緒、思闡鴻基、恢隆萬代、武功雖昭而文教未暢、非所以崇太平之治也。今城内安逸、百姓富昌、宜定制度爲萬代之法。夫陰陽有往復、四時有代序、授子任賢、安全相付、所以休息疲勞、式固長久、古今不易之令典也。可令皇太子副理萬機、總緣<sup>358</sup>百揆、更舉賢良、以備列職。擇人授任而黜陟之。」其朝士庶民皆稱臣於太子。

于時、崔寇先得寵於燾、恐晃篡政、有奪<sup>359</sup>威權。又譖云「太子前事實有謀心、但結高公<sup>360</sup>道術、故令先帝降夢、如此物論、事跡難明。若不早除、必爲巨<sup>361</sup>害。」燾納<sup>362</sup>之、即勅收高。於太平五年九月十五日、縊於平城之隅、太子又幽殺之、即宋元嘉之二十一<sup>363</sup>年也。爾夜門人莫知其死、忽有光明繞塔入房、其光聲曰「五<sup>364</sup>其已逝、弟子等崩赴屍所、請告遺累。」言畢、高眼稍開、汗遍<sup>365</sup>香起、便<sup>366</sup>坐謂曰「大法應化、隨緣盛衰。在<sup>367</sup>迹、理恒湛然。但念<sup>368</sup>汝等不久復當如我耳、汝等死後、法後法<sup>369</sup>當更興、善自修心、無令中悔。」言已便臥而絕、崔皓於此縱以姦心、每與帝<sup>370</sup>、恒加非毀。以佛<sup>371</sup>無益於政、有傷民利、勸令廢之。

後太武至長安入僧寺、見有弓盾。帝怒誅寺僧、皓因集<sup>372</sup>說、盡殺沙門、焚經毀僧<sup>373</sup>、勅留臺下四方僧寺有者、依長安法除之。道士寇謙不從其毀。苦與皓爭、皓拒之。謙謂皓曰「卿從從<sup>374</sup>今年受戮滅門矣。」燾惑其言、以太平七年、遂普滅佛法。分軍四出、燒掠寺舍、統<sup>375</sup>内僧尼罷令還俗<sup>376</sup>、其

355「逼」、七本「逼掠」。356「父」、七本「父皆」。357「威」、興本ナシ。358「緣」、興・七本「統」。359「子于……有奪」、十六字興本ナシ。360「公」、興本「公于時崔寇先得寵於燾恐晃篡政有奪」。361「巨」、興本「臣」。362「納」、興本ナシ。363「一」、七本「二」。364「五」、興・七本「吾」。365「遍」、興・七本「通」。366「便」、興本「更」。367「在」、七本「盛衰在」。368「念」、興本「念念」。369「後法」、興・七本ナシ。370「帝」、七本「帝言」。371「佛」、興・七本「佛法」。372「集」、興・七本「進」。373「僧」、興・七本「像」。374「從」、七本ナシ。375「統」、興・七本「緣」。376「罷令還俗」、興本「罷合還俗」、七本「無少長坑之」。

竄逸者、捕獲梟斬。

有沙門慧始、甚有神異。昔赫連昌破長安、始被白刃、而體不傷、五十餘年未嘗寢臥。跣行泥塗、初不汚足、而色逾<sup>377</sup>鮮白、世號「白足和上」、死十餘年身相如在。初入深山、習行蘭若、太平之末方知滅治<sup>378</sup>、始聞之、乃於元會之日杖錫宮門。有司奏「有一云<sup>379</sup>道人、足白於面、云欲入見。」屬依軍法斬而不僧<sup>380</sup>、遂至殿庭、燾大怒、自以所佩劍斫之、體無餘異。時北園養虎、勅以始飴之、虎皆潛伏、終不敢視、試以天師近檻、虎輒鳴吼<sup>381</sup>、燾方知佛化高尊、黃老之所不及。即迎上<sup>382</sup>殿、頂禮足下、悔其僭各<sup>383</sup>、始爲說法、明辯因果。燾於是大生愧懼、遂感勵<sup>384</sup>、通身發瘡、痛苦難忍。群<sup>385</sup>臣議曰、崔皓邪佞、毀害佛僧、陛下所患、必由於此。于時、崔寇二人次發惡疾、燾惟過由於彼。以太平十一年乃載皓於露車、官使十人於車上便尿其口、行數里、不堪困苦。又生理出口而尿之、自古三公戮辱、味<sup>386</sup>之過此之甚。遂誅諸姻親門族都盡、宣下國中興復正法。俄而燾崩、孫濬襲位、大弘佛事、即高宗文武帝是也。見『後魏書』及『十六國春秋』・『高僧傳』等。

### 宋太<sup>387</sup>宗文皇帝朝會與群臣論佛事第七

文帝即宗<sup>388</sup>武第三子也。聰睿英博、雅稱令達、在位三十年。嘗以暇日從容而顧侍中何尚之・吏部羊玄保曰「朕少來讀經、不多比日、彌復無暇<sup>389</sup>。三世因果未辨厝懷、而復不敢立異者、正以卿輩時秀、率所敬信也。范泰・謝靈運常言、六經典文、本在濟俗、爲政必求、性靈眞奧、豈得不以佛理爲指南耶。近見顏延之『析達性論』・宗炳『難白異<sup>390</sup>論』、明法江注<sup>391</sup>、尤爲名理、並足開獎人意。若使率土之濱皆淳<sup>392</sup>此化、則朕坐致太平矣、夫復何事。」尚之對曰「悠悠之徒<sup>393</sup>多不信法、以臣庸弊、更荷褒拂、非所敢當。

377「逾」、興本ナシ。378「治」、七本「法」。379「有一云」、興・七本「云有一」。380「僧」、興・七本「傷」。381「孔」、興・七本「吼」。382「迎上」、七本「延始入」。383「各」、七本「咎」。384「勵」、七「癘疾」。385「群」、興本「君羊」。386「味」、興・七本「未」。387「宋太」、興本「宗大」。388「宗」、七本「宋」。389「暇」、興本ナシ。390「異」、興・七本「黑」。391「法江注」、七本「佛法汪汪」。392「淳」、興本「障」。393「徒」、興本「從」。

至如前代群英、則不負明詔矣。中朝已遠、難復知<sup>394</sup>。渡<sup>395</sup>江已來、則王道・周顛・庾亮・王濛・謝當<sup>396</sup>・郗超・王坦・王恭・王澄<sup>397</sup>・郭文・謝敷・戴逵・許詢、及亡高祖兄弟、及王元琳昆季・范汪・孫綽・張玄・殷顛花<sup>398</sup>、或<sup>399</sup>宰輔之冠蓋、或人倫之羽儀、或置情天人之際、或抗跡煙霞之表、並稟志歸依、厝心歸信。其聞<sup>400</sup>皆<sup>401</sup>對、則蘭護開潛、深遁崇<sup>402</sup>邃、皆惡<sup>403</sup>迹黃中、或不測之人也。慧遠法師嘗云“釋氏之<sup>404</sup>化、無所不<sup>405</sup>。適<sup>406</sup>固自教原<sup>407</sup>、濟俗亦爲要<sup>408</sup>務。”竊尋此說有契理奧。若使家家奉戒、則罪息形清。陛下所謂坐致太平、誠如聖旨。」羊玄保進曰「此談蓋天人之際、豈臣所宜預。竊恐秦楚<sup>409</sup>論強兵之事、孫吳盡吞併之術、將無取於此也。」帝曰「此非戰國之具、良<sup>410</sup>如卿言。」尚之曰「夫禮隱逸、則戰士怠、貴仁德、則兵氣衰。若以孫吳爲志、苟在吞噬、亦無取堯舜之道、豈惟釋教而已哉。」帝曰「釋門有卿、亦猶孔門之有季路、所謂惡言不入於耳也。」自是文帝致意佛經、及見嚴觀諸僧、輒論道義、屢延僧殿會、帝躬御地筵、同僧列<sup>411</sup>飯。

時有竺道生法師、學出群品、英義獨拔、帝重之。曾述生頓悟義、沙門僧衛<sup>412</sup>等皆設臣<sup>413</sup>難、帝曰「若使逝者可興、豈爲諸君所屈。」時顏延之著『離識論』、帝命嚴法法<sup>414</sup>師辯其同異、往返終日。帝笑曰「公等今日無愧支許之談也云云。」見僧史傳。

### 魏明帝登極名<sup>415</sup>佛道對論敘先後事第八

元魏君臨、凡一十<sup>416</sup>七帝一百七十九年、興願<sup>417</sup>佛法教、不可勝言。惟太武在位五六年中屏除佛法、自餘光顯、具彰魏史、略陳相狀、以成信<sup>418</sup>重。

獻文即位、興皇元年、於五級大寺、太祖已下、五帝鑄像。五軀各長一丈六尺、用金二十五萬斤。正光元年、明帝加朝服、大赦天下。請僧尼・道

394「知」、七本「盡知」。395「渡」、興本「度」。396「當」、興・七本「尚」。397「證」、興・七本「謚」。398「花」、興・七本「等」。399「或」、興本ナシ。400「聞」、七本「問」。401「皆」、興・七本「比」。402「崇」、興本「宗」。403「惡」、七本「亞」。404「氏之」、興本「代」。405「不」、七本「不可」。406「適」、七本「適道」。407「原」、七本「源」。408「要」、興本「惡」。409「楚」、興本「梵」。410「良」、興本ナシ。411「列」、七本「例」。412「衛」、七本「弼」。413「臣」、七本「巨」。414「法」、興・七本ナシ。415「名」、興・七本「明」。416「十一」、本「一十」。417「願」、興・七本「顯」。418「佛法……成信」、十七字興本ナシ。

士・女官前殿<sup>419</sup>齋訖、侍中劉勝宣勅。法<sup>420</sup>師等與道士論議、以釋弟子疑網。時<sup>421</sup>清通視<sup>422</sup>道士姜斌與融覺寺法師曇謨最對論。

帝曰「佛與老子同時以不。」姜斌曰「老子西入化胡、佛時以死<sup>423</sup>侍者、明是同時。」法師曰「何以知之。」斌曰「案『老子開天經』、是以得知。」法師曰「老子當周何王・幾年而生。周何王・幾年西入。」斌曰「郡<sup>424</sup>・苦縣・厲鄉<sup>425</sup>・曲仁里、九月十四日夜子時生、周簡王四年丁丑歲、事周爲守藏吏、簡王十三年遷爲太史。至敬王元年庚辰之藏<sup>426</sup>、年八十五、見周德凌遲、遂與散開<sup>427</sup>金君<sup>428</sup>喜、西入化胡、斯足明矣。」法師曰「佛以周昭王二十四年四月八日生、穆王五十二年二月十五日滅度。計入涅槃後經三百四十五年、始到定<sup>429</sup>王三年老子方生、生已年八十五、至敬王元年、凡經四百二十五年。始與君<sup>430</sup>喜西遁、據此則知年代懸殊、無乃謬乎。」斌曰「若佛生周昭<sup>431</sup>之時、出何文記。」法師曰「『周書異記』・『漢法本內傳』並有明文。」斌曰「孔子既是制法聖人、當時於佛迥無文記、何耶。」法師曰「仁者識同管窺、覽不弘遠。案孔子有三備卜經、謂天地人也、佛之文言出於中備、仁者幸自披究、不有此迷。」斌曰「孔子聖人、不言而識、何假卜乎。」法師曰「惟佛是衆聖之王、四生之首、達一切含靈・前後二際・吉凶終始、不假卜觀。自餘小聖雖曉未然之理、必籍著龜以通靈卦也。」

侍<sup>432</sup>中尚書令元义宣勅語「道士姜斌論無宗旨、宜下席。」又問「『開天經』何處得來。是誰所說。」即遣中書侍郎魏收・尚書郎祖瑩等、就觀取經、帝令議之。太尉丹陽王箭源<sup>433</sup>・太傅李寔・衛尉<sup>434</sup>許伯桃・吏部尚書邢彥・散騎常侍溫子昇等一百七十人、讀訖奏云「老子只著五十<sup>435</sup>文、更無言說、臣等所議、姜斌罪當惑衆、帝加斌極刑。」三<sup>436</sup>藏法師菩提流支極諫乃止、配待<sup>437</sup>馬邑。

419「前殿」、七本「等殿前」。420「法」、七本「請法」。421「時」、興本ナシ。422「視」、興・七本「觀」。423「死」、七本「充」。424「郡」、興・七本「當周定王即位三年乙卯之歲於楚國陳郡」。425「卿」、興・七本「鄉」。426「藏」、興・七本「歲」。427「散開」、七本「函關」。428「金君」、興・七本「令尹」。429「年始到定」、興本「至敬王元」。430「君」、興・七本「尹」。431「昭」、七本「昭王」。432「侍」、七本「時侍」。433「箭源」、興・七本「蕭綜」。434「尉」、七本「尉卿」。435「十」、興・七本「千」。436「三」、七本「時三」。437「待」、興・七本「徙」。

## 梁武帝捨事道法事第九

梁高祖武皇帝、年三十四登位、在政四十九年。雖億兆務殷、而卷不釋手。內經外典、罔不曆懷、皆爲訓解、數千<sup>438</sup>餘卷。而儉約自節、羅綺不緣、寢處虛閑、晝夜無怠。致有南被苑<sup>439</sup>席、草屨葛巾。初臨大寶、即備斯事、日惟一食、永絕辛羶、自有帝王罕能及此。舊事老子、宗<sup>440</sup>尚符圖、窮討根源、有同委作。帝乃躬運神筆下詔捨道、文曰

「維天鑒三年四月八日、梁國皇帝蘭陵蕭御<sup>441</sup>、稽首和南十方諸佛・十方尊法・十方聖僧。伏見經云“發菩提心者、即是佛心。其餘散善、不得爲喻、能使衆生出三界之苦門。入無爲之勝路。”故如來漏盡、智凝成覺、至道通機、德圓最聖。發慧炬以照迷、鏡法流以澄垢<sup>442</sup>、啓瑞迹於天中、爍靈儀於像外、度群迷於欲海、引含識於涅槃、登常樂之高山、出愛何<sup>443</sup>之深際。言乖四句、語絕百非、應迹娑婆、王宮誕相。步三界而爲尊、普大千而流照。但以機心淺薄、好生厭怠、遂乃湛說圓常、亦復潛輝鶴樹。闍王滅罪、婆<sup>444</sup>藪除殃。若不逢值大聖法王、誰能救援。在迹雖隱、其道無鶴<sup>445</sup>。弟子比經迷荒、耽事老子、歷<sup>446</sup>葉相承、染此邪法、習因善散<sup>447</sup>、棄迷知返。今捨舊醫、歸憑正覺、願使未來生世童男出家、廣弘經教、化度含識、同苦<sup>448</sup>成佛。寧在正法中長淪惡道、不樂依老子教暫得生天、涉大乘心、離二乘念、正願諸佛證明、菩薩攝受、弟子蕭衍和南。」

于時、帝與道俗二萬人、於重雲殿重閣上、手書此文、發菩提心。至四月十一日<sup>449</sup>勅門下「大經中說道有九十六種、惟佛一道是於正道、其餘九十五種名爲邪道、朕捨邪外以事正內。諸佛如來、若有公卿能入此誓者、各可發菩提心、老子・周公・孔子等、雖是如來弟子、而化迹既邪、止是世間之善、不能漓几<sup>450</sup>成聖、其公卿百官侯王宗強<sup>451</sup>、宜反偽就眞、捨邪入正。故經教『成實論』云、若事外道心重、佛法心輕、即是邪見。若心一寺<sup>452</sup>、是無記性、不當善惡。若事佛心強、老子心弱者、乃是清信。言清信者、清是

438「千」、興本ナシ。439「南被苑」、興・七本「布被莞」。440「絕辛羶……宗」、十六字興本ナシ。441「御」、興・七本「衍」。442「垢」、興本「恬」。443「何」、興・七本「河」。444「婆」、興本「娑婆」。445「鶴」、興・七本「虧」。446「歷」、興本「曆」。447「散」、七本「發」。448「苦」、興・七本「共」。449「日」、七本「日又」。450「漓几」、興・七本「革凡」。451「強」、興・七本「族」。452「寺」、興・七本「等」。

表裏俱淨、垢穢惑累皆盡、信是信正不信邪、故言清信。佛弟子、其餘諸信、皆是邪見、不得稱清信也。」門下速施行。

至四月十四日、侍中安前將軍丹陽尹欲<sup>453</sup>陵王上啓云

「臣綸聞如來嚴相、巍巍架于有頂、微妙色身、蕩蕩<sup>454</sup>顯乎無際。假金輪而啓物、託銀粟以應凡<sup>455</sup>。砥波若之利刀、收涅槃之妙果、汎生死之苦海、濟常樂於彼岸。故能降慈悲雲、乘<sup>456</sup>甘露雨。七處八會、教化之義不窮、四諦五時、利益之方無盡。並<sup>457</sup>汎氷清日盛、霧豁雲除、燭火翳光、塵熱自靜。可謂入俗<sup>458</sup>化於蒙底、出世冥此眞如。使稠林邪徑之人、景法門而無倦、渴愛聳聳之士、慕探<sup>459</sup>蹟而和<sup>460</sup>迴。道樹始於迦維、德音盛乎京洛。恒星不見、周鑿娠微、滿月圓姿、漢感<sup>461</sup>宵夢。五法用傳、萬德方兆、華俗潛改、競扇高風。資此三明、照迷途之失、憑慈<sup>462</sup>七覺、拔長夜之苦。

屬值皇帝菩薩、應天御物、負屨臨民、含光宇宙、照清海表、垂無礙辯、以接黎度<sup>463</sup>。以本願力攝受衆生、故能隨方逗藥、示權因顯。崇一乘之旨、廣十地之<sup>464</sup>、是以萬邦迴向、俱稟正識。照<sup>465</sup>顯靈祇、皆蒙誘濟。人興等覺之願、物起菩提之心、莫不翹勤歸宗之境、悅懌還源之趣、共保慈悲、俱修忍辱、所謂覆護饒益、橋梁津濟者矣。道既光被、民亦化之。於是應眞飛錫、騰虛接影、破邪外道、堅持正法、伽藍精舍寶刹相聖<sup>466</sup>、講會侍<sup>467</sup>經德音盈耳。

臣者<sup>468</sup>未達理源、稟承外道、如欲植甘果翻種苦栽、欲除渴乏返<sup>469</sup>趣鹹水。今啓迷方、粗知歸向、受菩薩大戒、節<sup>470</sup>身心、捨老子之邪風、入法流之眞教、伏惟天慈、曲垂矜許、謹啓。」

至四月十八日、中書舍人臣任孝恭宣勅云「能改迷入正、可謂是宿植勝因、宜加勇猛也。」

453「欲」、興・七本「邵」。454「蕩」、興本ナシ。455「凡」、興本ナシ。456「乘」、興・七本「垂」。457「並」、興本「益」。458「俗」、興本「俗俗」。459「探」、興本「樹」。460「和」、興・七本「知」。461「感」、興本「咸」。462「慈」、興・七本「茲」。463「度」、興・七本「庶」。464「之」、七本「之基」。465「照」、興・七本「幽」。466「聖」、興・七本「望」。467「侍」、興・七本「傳」。468「者」、七本「昔」。469「返」、七本「反」。470「節」、七本「戒節」。

## 北齊高祖文宣皇帝廢道事第十

昔金陵道士陸修靜者、道門之望。在宋齊兩代、祖述三張、弘衍二葛。邴張之士、封門受錄、遂妄加穿鑿、廣制齋儀、糜費極繁、意在王者尊<sup>471</sup>奉。會梁祖啓運、下詔捨道、修靜不勝其憤、遂與門人乃<sup>472</sup>邊<sup>473</sup>亡命、叛入北齊。又傾散金玉、贈諸貴遊、託以襟<sup>474</sup>期、冀興道法。帝惑之也、於天保六年九月、乃下勅召諸沙門與道士學達者十人、親自對校。于時道士咒諸沙門衣鉢、或飛或轉、咒諸梁木、或橫或豎。沙門曾不學方術、默無一對、士女擁闥、貴賤移心、並以靜徒爲勝也。諸道士等雀躍騰倚、魚睨雲漢。高談自矜、誇衒其道術、仍又唱言<sup>475</sup>「神角<sup>476</sup>權設、抑挫強禦、沙門現一、我當現二。今薄示小術、並辭退屈、事亦可見。」

帝命上統法師與靜角試、上曰「方術小伏、伎<sup>477</sup>儒恥<sup>478</sup>之、況出家人也。雖然天命拒、豈得無言。可令最下坐僧對之。」即尋往<sup>479</sup>覓有僧<sup>480</sup>曇顯者、不知何許人、遊行無定、飲噉同俗、時有放言、標樞宏遠。上統知其深量、私與之交。于時名僧盛集、顯居行末、酣酒大醉、昂兀而坐。有司不敢召之、以事告於上統。上曰<sup>481</sup>「道士祭酒、常道所行、止是飲酒道人可共言耳、扶<sup>482</sup>舉將來。」於是合衆皆憚、而怯上<sup>483</sup>統威權、不敢有諫、乃兩<sup>484</sup>扶顯、令上高座。便立含笑曰「我飲酒大醉、耳中有所聞云“沙門現一、我當現二”、此言虛實。」道士曰「有實。」顯即翹足而立「我以現一、卿所<sup>485</sup>現二。」各無對之。顯曰「向咒諸衣物飛颺者、我故開門試卿術耳。」命取稠禪師衣鉢咒之、諸道士一時奮發共咒、一無動搖。帝勅取衣、乃至十人牽舉不動。顯乃令以衣<sup>486</sup>置諸梁木、又<sup>487</sup>令呪之、九十<sup>488</sup>無一驗。道士等相顧無賴、猶以言辯自高、乃曰「佛家自號爲內、內則小也、詔我道家爲外、外則天<sup>489</sup>也。」顯應聲曰「若然、則天子處內、定小下<sup>490</sup>百官矣。」靜與其屬滅<sup>491</sup>口無

471「尊」、興·七本「遵」。472「乃」、興·七本「及」。473「邊」、興·七本「邊境」。474「襟」、興本「礎」。475「言」、興·七本「言曰」。476「角」、興·七本「通」。477「伏伎」、興·七本「伎俗」。478「恥」、興本「聖」。479「尋往」、七本「往尋」。480「僧」、七本「僧佛鑄一名」。481「上曰」、興本「曰」、七本「上統曰」。482「扶」、興·七本「可扶」。483「怯上」、興本「怯」。484「兩」、興·七本「兩人」。485「所」、興·七本「可」。486「衣」、興本ナシ。487「又」、興本ナシ。488「九十」、興本「九無」、七本「卒」。489「天」、興·七本「大」。490「下」、興·七本ナシ。491「滅」、興本「咸」、七本「緘」。



言。帝目驗臧否、便<sup>492</sup>詔曰「法門不二、眞宗在一、求之正路、寂泊爲本。祭酒道者、世中假妄、俗人未悟、仍有祇崇。麴〔麥\*薛〕是味、清虛焉在。瞿瞞斯百<sup>493</sup>、慈悲永隔。上異仁祠、下乖祭典、皆宜禁絶、不復尊<sup>494</sup>事。」頒勅遠近、咸使知聞、其道士歸伏者、並付照<sup>495</sup>玄大統上法師、度聽出家。不<sup>496</sup>發心者、可令染剃、爾日斬首者非一。自謂神仙者、可上三爵臺、令其投身飛逝、皆碎<sup>497</sup>屍塗地、偽妄斯絶。到<sup>498</sup>使齊境國無兩信、迄于隋初漸開其術、至今東川此宗微末、無足抗言矣<sup>499</sup>。

帝諱詳、即魏丞相王歡<sup>500</sup>之第二子也。嫡兄澄、怠慢爲奴所害、詳襲其位、爲<sup>501</sup>相國。魏將曆窮、詳築壇於南列<sup>502</sup>、筮遇大横、大吉、漢文之卦也。乃鑄<sup>503</sup>金像、一瀉而成、魏收爲禪文、魏帝署之、即受其禪<sup>504</sup>、爲大齊也。凡所行履、不測其愚智。委政僕射楊尊<sup>505</sup>彦、帝大起佛寺、僧尼滿諸州縣、冬夏供施、行道不絶。時稠禪師歲帝曰「檀越羅刹、殆臨水自見。」帝從之觀、群羅刹在後、於是遂不<sup>506</sup>食肉。禁鷹鷄、去官漁屠、辛章悉除、不得入市。帝恒坐禪、竟日不出、禮佛行繞、其疾如風<sup>507</sup>。受戒於昭玄大統法上、面掩地、令上履髮而授正与<sup>508</sup>。

先是帝在晉陽、使人騎駝、勅曰「向寺取經函。」使問所在、帝曰、「任駝出城。」及出奄如夢至一山、山<sup>509</sup>半有佛寺、郡<sup>510</sup>沙彌遙曰「高詳託駝來。」便引見。一老僧拜之曰「高詳作天子何如。」曰「聖明。」曰「爾來何爲。」曰「取經函。」僧曰「詳在寺懶讀經、令北行東頭與之。」使者及<sup>511</sup>命。初帝至谷口木井佛寺、有捨身癡人、不解語。忽謂帝曰「我去、爾後來。」是夜癡人死、帝尋崩於晉陽。

著作王邵曰「釋氏非管窺所及、率爾妄言之。」別<sup>512</sup>列子述商、太宰問孔子聖人事。又云「黃帝夢遊華胥氏之國、在佛神遊而已。佛之所言、欲<sup>513</sup>

492「便」、興・七本「便下」。493「百」、興・七本「甘」。494「尊」、興・七本「遵」。495「照」、興本「照照」、七本「昭」。496「不」、興・七本「未」。497「碎」、興本ナシ。498「到」、興・七本「致」。499「矣」、興本ナシ。500「歡」、興本「觀」。501「爲」、七本「代爲」。502「列」、七本「郊」。503「鑄」、興本ナシ。504「禪」、興本ナシ。505「尊」、興・七本「遵」。506「不」、興本ナシ。507「如風」、興本ナシ。508「正与」、興・七本「焉」。509「山」、興本ナシ。510「郡」、興・七本「群」。511「及」、興本「反」、七本「返」。512「別」、興・七本「引」。513「欲」、興・七本「蓋」。

欲柔伏人心、故多寓言以方便、不<sup>514</sup>知是何神變、浩蕩之甚乎。説人身善惡、世事因緣、以慈悲喜捨、常樂我淨、書辯至精、明如日月、非正覺就<sup>515</sup>能證之。凡在順首、莫不歸命。達人則慎其身口、修其慧定、平等解脫、究竟菩提。及僻者爲之、不能通理、徒務費竭財力、功利煩濁、猶六經皆有所失、未之深也已矣。」其事如此、依『齊書<sup>516</sup>』錄之。

集古今佛道論衡卷上

□……□<sup>517</sup>衡實錄卷第中

唐釋道宣撰

- 周高祖登朝論屏佛法安法師上論事第一  
 周祖平齊集論毀法遠法師抗詔事第二  
 周祖東巡滅法已久任道林興<sup>518</sup>佛事第三  
 周天元皇帝納王明廣表開佛法事第四  
 隋高祖不<sup>519</sup>詔述絳洲天火燒焚老君像事第五  
 隋兩帝事完<sup>520</sup>佛理稟受歸戒事第六

□……□<sup>521</sup>將滅佛法有安法師上論事第一

周武初信佛、後以讖緯云黑衣當王、遂重於道法、躬受符籙。玄冠黃褐內常服禦、心忌釋門志欲誅殄、而患信佛者多未敢專制。有道士張賓、譎詐罔<sup>522</sup>上私達其策、潛進李宗、排棄釋氏<sup>523</sup>、又與前僧衛元嵩唇齒相赴、共相<sup>524</sup>狙醜。帝納其言、欲親覘視經過、貶量佛失。召僧入內、七宵行道。時既密知、各加懇倒<sup>525</sup>。帝亦同僧七夕不寐、爲僧讚<sup>526</sup>唄<sup>527</sup>并諸法事、既無過犯、無何而止。天和四年、歲在己丑、三月十三日、勅召有德衆僧、名儒道士、文武百官二千餘人昇正殿。帝御坐、量述三教優劣廢立。衆議紛紜、情

514「不」、興本ナシ。515「就」、興・七本「孰」。516「書」、興本ナシ。517「□……□」、興・七本「集古今佛道論」。518「興」、麗本「請興」。519「不」、興・七本「下」。520「完」、七本「宗」。521「□……□」、興・七本「周高祖武皇帝」。522「罔」、七本「內」。523「氏」、七本「代」。524「相」、七本ナシ。525「倒」、七本「到」。526「讚」、興本「讀」。527「唄」、七本「咀」。

見乖咎<sup>528</sup>、不定而散。至其月二十日、依前集論、是非更廣、莫簡帝心、索然又<sup>529</sup>散。至四月初、又依前集、令極言陳理。又勅司隸大夫甄鸞、詳佛道二教、定其深淺。鸞乃上『笑道論』三卷、用笑三<sup>530</sup>洞之名及『笑經』、稱三十六部、文極據明、事多商榷。至五月十五日。帝大集群臣詳<sup>531</sup>鸞上論、以爲傷蠹道士、即於殿庭焚之。

有道安法師、慧解洞達、内外淹通、時號釋宗、衆標僧保<sup>532</sup>、帝所信重、常侍對揚、僉議攸同、三教齊立、惟安抗辯。教止三焉、言出難尋、著文易顯、乃撰『二教論』一十二篇。初歸宗顯本篇、略云、「夫萬化本於生<sup>533</sup>生、三<sup>534</sup>才兆於無始。然則無始、物之性也<sup>535</sup>、有化有生、人之聚<sup>536</sup>也。聚雖一體、而形神兩異、散雖質別、而心數不忘<sup>537</sup>。故救形之教、教<sup>538</sup>稱爲外、濟神之教、教稱爲內。是以智論有内外兩<sup>539</sup>徑<sup>540</sup>、『仁王』辯内外兩論、『方等』明内外兩律、『百論』言内外二道。若通論内外、則該彼華戎、若局命此方、則可<sup>541</sup>云儒釋。釋教爲內、儒教爲外、道無別教、宗結<sup>542</sup>儒流。備彰前典、非爲誕謬、詳賢<sup>543</sup>載籍、尋計<sup>544</sup>根源。教惟有二、何得有三。何者、昔玄<sup>545</sup>古樸青<sup>546</sup>、墳典之誥未弘、淳風稍雜<sup>547</sup>、丘索之文乃著。故包論七典、統<sup>548</sup>括九流、減<sup>549</sup>爲軍國之謨、並是修身之術。若派而別之、則應爲九教、令<sup>550</sup>物<sup>551</sup>而合之、則同屬儒宗。論其官也、各王朝之<sup>552</sup>一職、談其籍也、並皇家之一書。何欲於一化之內、令流爭川、大道之世、使小成競辯。豈不上傷皇極莫二之風、下開拘放鄙蕩之弊。眞所謂巨蠹鴻猷、眩曜朝野矣。」

「言佛教者、窮理<sup>553</sup>盡性之格言、出世入眞之正轉<sup>554</sup>。論其文則部分十二、語其旨則四種悉檀。理妙域<sup>555</sup>中、因<sup>556</sup>非名號所及、化檀像表、又非情知所尋。至於遣累落筌、陶神盡照、近超生死、遠證泥洹。播闢五乘、接群之深

528「咎」、興・七本「各」。529「又」、七本「文」。530「三」、七本「之」。531「詳」、七本ナシ。532「保」、興・七本「傑」。533「生」、七本ナシ。534「三」、七本「之」。535「也」、七本ナシ。536「聚」、興本「眾」・七本「聖」。537「不忘」、七本「不」。538「教」、七本ナシ。539「兩」、七本「而」。540「徑」、興本「經」。541「可」、興本ナシ。542「結」、七本ナシ。543「賢」、興・七本「覽」。544「計」、七本ナシ、興本「討」。545「玄」、七本「云」。546「青」、興・七本「素」。547「雜」、七本「離」。548「統」、七本「緣」。549「減」、興・七本「咸」。550「令」、七本「今」。551「物」、興・七本「總」。552「之」、七本「文」。553「理」、興本「野野」。554「轉」、興・七本「轍」。555「域」、興本「城」。556「因」、興・七本「固」。

淺、該明六道、辯善惡之昇沈。復期出世、而理無不周、迹及王化、而事無不盡。能博能惡<sup>557</sup>、不質不文、自非天下之至慮、孰能與斯教哉。雖復儒道千家、農墨百氏、取捨駟<sup>558</sup>馳、未及其度者也。夫厚生情篤、身患之誠遂興、不悟遷流、逝川之歎乃作、並<sup>559</sup>是域內之至談、非踰方之臣<sup>560</sup>唱也。何者、推色盡於極衛<sup>561</sup>、老氏之所未辯、究心窮於生滅、宣尼又所不言、可謂瞻之似盡、而察之未極者也。經曰、分別色心、有無量相、非諸聲聞緣覺所知、況凡夫識想、安得齊於佛聖乎。經云、“無以田<sup>562</sup>光等彼螢火”、斯喻極也。若夫以齊而齊不齊者、未曰齊也。余聞善齊天下者、以不齊而齊天下者、何須夷嶽實淵、然後方平。續覺<sup>563</sup>截鶴於焉始等、此蓋狷夫之野議、豈達士之貞觀乎、故諺曰、紫實昧朱、狂<sup>564</sup>斯濫<sup>565</sup>。請廣其類、上至天子、下至庶人、莫不資色心以成軀、稟陰陽而作體。不可以色心是等、而便混以智愚、陰陽義齊、則使同之貴賤。此之不可、至理皎然、雖強<sup>566</sup>齊之、其義安在。」餘文多不載。

又史記云、「李老西邁、止及流沙」。『化胡』・『西昇』等經不足窮究。漢末三張、方行其道惑<sup>567</sup>亂天下、備見史書。故李膺『蜀記』云、張陵避瘴、病於丘社中、得呪鬼術書、遂解鬼法。後爲大蛇所喻、弟子等妄述昇天。其子衡、衡子<sup>568</sup>魯、還習其道、自號三師。陵爲天師、衡爲係師、魯爲嗣師、咸以鬼道<sup>569</sup>以愚俗。『後漢書』云、張魯初爲督義司馬、遂掩殺<sup>570</sup>漢中太守蘇固、斷絕斜谷。煞漢使者、專<sup>571</sup>據漢中三十餘載、載黃巾、服黃巾、造作符書、以<sup>572</sup>百姓。受其道者、出米五斗、世號米賊。初來與字<sup>573</sup>者、名爲鬼卒、後云祭酒、各領部衆、夷俗信向。朝廷不能討<sup>574</sup>、遂就拜魯鎮夷中郎將、通其貢獻。至獻帝二十年、曹<sup>575</sup>操征而破之。初漢末鬼音<sup>576</sup>、黃衣當王、於是<sup>577</sup>張魯等、始服黃衣、曹氏<sup>578</sup>受命、以黃代赤、故年號黃初。黃巾之賊、

557「惡」、興・七本「要」。558「駟」、七本ナシ。559「並」、興本「普」。560「臣」、興本「巨」。561「衛」、興・七本「微」。562「田」、興・七本「日」。563「鳥」、七本「覺」。564「狂」、七本「枉」。565「濫」、興・七本「濫哲」。566「強」、興・七本「張」。567「惑」、七本「或」。568「子」、興本「子子」。569「道」、興本「首」。570「殺」、興・七本「教」。571「者專」、興本「者者專專」。572「以」、七本「以惑」。573「與字」、興・七本「學」。574「討」、興本「計」。575「曹」、七本「專」。576「音」、七本「言」。577「是」、興本「是張角」。578「曹氏」、七本「魯代」。

至是始平、元魏寇謙、稍稍還服。今大道之世、風化宜同小巫、巾色宜改復古。且老子大賢絕棄貴尚、又是朝臣、服色寧異。古有專任<sup>579</sup>之學、而無服象之殊、黃巾布<sup>580</sup>衣、出自張民<sup>581</sup>。夫<sup>582</sup>聖賢作訓、弘裕溫柔、鬼神嚴厲、動爲寒暑。老子誠味、祭酒咸飲、張制鬼服、黃衣則齊。眞偽皎然、急緩可見。故略引張氏<sup>583</sup>數條<sup>584</sup>妄作、用懲未<sup>585</sup>聞。

一初言禁經止價者、玄光論云、道家諸經、制雜凡意、教迹邪險、是故不經。但得金帛、便<sup>586</sup>與其經、貧者造之、至死不覩、貪利無慈、逆莫過此。又其方術穢濁不清、乃有扣<sup>587</sup>齒爲大<sup>588</sup>鼓、咽唾爲醴泉、馬屎爲靈<sup>589</sup>薪、老鼠爲芝藥。資此<sup>590</sup>求道、焉能得乎。

或妄稱眞道者、『蜀記』云、張陵入鶴鳴山、自稱天師、信<sup>591</sup>嘉<sup>592</sup>平末爲蟒<sup>593</sup>所喻<sup>594</sup>。子衡奔出、假設權方、用表靈<sup>595</sup>化、生糜鵠足、置石崖頂。到光和元年、遣使告曰、正月七日、天師昇玄。都米民此<sup>596</sup>、獠<sup>597</sup>遂因妄傳、敗死利生、逆莫過此之甚。

或令<sup>598</sup>氣釋罪者、妄造黃書、呪癩無端、乃云開<sup>599</sup>命門、抱眞人、三五七九、天羅地網、士女溷亂、不異禽<sup>600</sup>獸、用銷災禍、其可然乎。

或挾道作亂者、黃巾鬼道、毒流漢室、孫恩求仙、禍延皇晉。破國害俗、惑亂天下、五千道德、全不許之。

或章書代<sup>601</sup>德者、遷達七祖、乞免<sup>602</sup>擔沙、橫費<sup>603</sup>紙筆、奏章太上。又云、戊辰之日、上必不達、不達太上、則生民枉死。嗚乎哀哉。

或畏鬼帶符者、符云、左佩太極章、右佩昆吾鐵、指自<sup>604</sup>則停暉、擬鬼千里血、若受黃書赤章、即是靈仙。

或制約輸課者、『蜀記』云、受其道者、輸米肉<sup>605</sup>布絹、器物紙筆、薦蓆

579「侄」、興・七本「經」 580「布」、興本ナシ。581「民」、七本「代」、興本「氏」。582「夫」、興本ナシ。583「氏」、七本「代」。584「條」、七本「脩」。585「未」、七本「生」。586「便」、七本「使」。587「扣」、興本「和」、七本「弘」。588「大」、興・七本「天」。589「靈」、七本「雲」。590「此」、七本「此述」。591「信」、興・七本「漢」。592「嘉」、七本「壽」。593「末爲」、七本「爲末」。594「喻」、興本「喻」。595「靈」、七本「雲」。596「此」、興・七本「山」。597「獠」、興・七本「獠」。598「令」、興・七本「合」。599「開」、興本「聞」。600「禽」、興本ナシ。601「代」、興本「伐」。602「免」、興本「逸」。603「費」、七本「責」。604「自」、興・七本「日」。605「肉」、七本「肉」。

五綵。後生邪濁、増立米代。

或解除墓門者、左道餘氣也。墓門解除、春<sup>606</sup>秋二分、祭竈礼社、冬夏兩至、祠祀同俗。先受治籙、兵符社契、皆言軍將吏兵<sup>607</sup>、都無教誡之義。

或妄度苦厄者、立塗炭齋、事起張魯。驢輾泥中、黃土塗面、摘頭懸櫛、埏埴使熟。至義濫<sup>608</sup>初<sup>609</sup>、道士王公旗省去打拍、吳陸修靜猶泥額、反縛懸頭而已。資此度厄、何癡之甚。

或夢中作罪者、夢見先亡、輒云變怪、召鬼神兵吏、奏章斷之。

或輕作凶佞者、造黃神越章、用持彼<sup>610</sup>鬼、又造赤章、用持彼<sup>611</sup>人。趣悅世情、不計殃<sup>612</sup>罪。陰<sup>613</sup>謀懷嫉、凶邪之甚。

斯並三張之鬼法、非老子之本懷、頃<sup>614</sup>世濫行、罕有覺者。論成上<sup>615</sup>之、帝覽安論、以問臣下、僚宰尋校、莫敢排斥、當時廢<sup>616</sup>立遂寢、誠所推焉。

乃經六載、至建德三年、歲在甲午、五月十七日、遂普<sup>617</sup>滅佛道二宗。別置通道觀、簡釋季<sup>618</sup>有名者<sup>619</sup>、百二十員、並著衣冠、名爲通道觀<sup>620</sup>學<sup>621</sup>士。

時有蜀地新州願果寺僧猛法師<sup>622</sup>、不遠千<sup>623</sup>里躬詣魏闕、雖面陳至理、邪正未分、而帝滅毀之。情已決、乃著論、十有八條難道本宗、又以三科釋其前執。

其詞略云、猛以世之濫<sup>624</sup>述老子・尹喜西度、化胡出家、老子爲說經誡、令尹<sup>625</sup>喜作佛教化胡人、又稱鬼谷先生、撰『南山四時注』。未善尋者、莫不信從、以爲口實。異哉此傳、君子尚不可罔、況貶大聖者乎。今具陳此說、非眞<sup>626</sup>人世差錯、假託名家、亦乃言不及義、翻辱老子者乎。勝人達士不出此言、將是無識異道、誇競佛法、假託鬼谷<sup>627</sup>四皓之名、附尹<sup>628</sup>喜傳後、作此異論、用迷昏俗。竊聞傳而不習、未<sup>629</sup>子不許妄作者、凶<sup>630</sup>老尹<sup>631</sup>所誡、此之過患增長三塗、宜應糾正、救其此失。然教有內外、用生疑假、人有賢

606「春」、興本「俗死受春」。607「兵」、七本「丘」。608「濫」、興・七本「熙」。609「初」、興本ナシ。610「彼」、興本「故」、七本「煞」。611「彼」、興本「故」、七本「煞」。612「殃」、七本「殊」。613「陰」、七本「除」。614「頃」、七本「領」。615「上」、七本ナシ。616「廢」、七本「度」。617「普」、興本ナシ。618「季」、興・七本「李」。619「者」、七本ナシ。620「簡釋……道觀」、十九字、興本ナシ。621「學」、興本「覺」。622「師」、七本ナシ。623「千」、興本「十」。624「濫」、興・七本「監」。625「尹」、興本「君尹」。626「眞」、興本「眞直」。627「谷」、七本「俗」。628「尹」、興本「君」。629「未」、興・七本「夫」。630「凶」、七本「山」。631「尹」、興・七本「君」。

聖、多迷本迹、故班固『漢書』品人九等。孔丘之徒爲上上、類例<sup>632</sup>皆是聖、李耳之儔爲中上、類例皆是賢。何晏・王弼之<sup>633</sup>、老未及聖、此則賢聖自分、優劣路顯、故魏文之博識也。黃初三年、下勅告豫州刺史、老聃賢人未宜先孔子、不知魯郡爲孔子立廟成未。漢桓帝不師聖法、正以嬖<sup>634</sup>臣而事老子、欲以求<sup>635</sup>福、良足笑也。此祠之興由皇帝、武皇帝以老子賢人、不毀其屋、朕亦<sup>636</sup>以此亭當路、行來者輒往瞻視、而樓屋傾頽、儻能壓人、故令修整。昨過<sup>637</sup>視之、殊整<sup>638</sup>頓、恐小人謂此爲神、妄作禱禮<sup>639</sup>、犯常禁、宜宣告吏民、咸使知聞。據斯以言、呈露久<sup>640</sup>矣、愚惑<sup>641</sup>者多、致有前弊、故著論焉。雖復上聞、終不見納。有猛法師者、氣調橫挺。抗言帝旨、詞頗激切、衆恐禍及其身、帝通容<sup>642</sup>之、情無愧惡。

次有藹<sup>643</sup>法師者、年德榮盛、道俗所販<sup>644</sup>、聞之歎曰<sup>645</sup>、朱紫雜糅、狂哲交侵至矣、可使五衆流離<sup>646</sup>、四生倒<sup>647</sup>惑哉。又曰、餐周之粟、飲周之水、食椹懷音、寧無酬德。又佛之弟子、豈可見此<sup>648</sup>淪湮、坐此形嚴<sup>649</sup>、晏然青<sup>650</sup>靜。住來上表、引見登殿、舉手而言曰、來意有二、所謂報三寶慈恩、酬檀越厚德。援<sup>651</sup>引卓明、從旦至午、交言支任、抗對如流、梗詞厲色、鏗然無撓<sup>652</sup>。帝雖納其言、情決已定、遲疑不言。藹又進曰、釋李邪正、即事可求、不煩聖慮、索鑊煮兩宗門人、不害者立<sup>653</sup>可見矣。帝怯其言、乃引出。

時宜州沙門道積者、次又<sup>654</sup>出諫、不用其言、遂與同志七人、於彌<sup>655</sup>勒像前不食禮懺、經<sup>656</sup>於七日、一時同逝。藹入南山錫谷、自割<sup>657</sup>身肉<sup>658</sup>布於石上、引腸掛樹、捧心而卒、有人尋之、於崖上見捨身偈三十餘行、其後<sup>659</sup>偈云、

願捨此身已、早令身自在。

法身自在已、在在諸趣中。

632「例」、七本「倒」。633「之」、興・七本「云」。634「嬖」、興本「辟」。635「以求」、興・七本「求以」。636「亦」、興本「之」。637「過」、七本「遇」。638「整」、七本「勅」。639「礼」、興・七本「祀」。640「久」、七本「人」。641「惑」、七本「或」。642「通容」、興本「逼客」。643「藹」、七本「蕩」。644「販」、興・七本「歸」。645「曰」、興本「白」。646「離」、興本「雜離」。647「倒」、興本「例」。648「此」、興本ナシ。649「嚴」、興・七本「骸」。650「青」、興・七本ナシ。651「援」、興本「授」。652「撓」、七本「授」。653「立」、七本「之」。654「又」、興本「有」。655「彌」、七本ナシ。656「經」、七本「住」。657「割」、興・七本「部」。658「肉」、七本「同」。659「後」、興本ナシ。

隨有利益處、護法救衆生。  
 又復業應盡、有爲法皆<sup>660</sup>然。  
 三界皆無常、時來不自在。  
 他殺<sup>661</sup>及自死、終歸如是處。  
 智者所不樂、業盡於今日。

### 周武平齊大集僧徒問<sup>662</sup>以興廢慧<sup>663</sup>遠法師抗詔事第二

周武帝以齊承光二年春、東平<sup>664</sup>高氏召前修大德並赴殿集。帝昇御<sup>665</sup>座、序廢立<sup>666</sup>義云<sup>667</sup>、朕受天命、寧一區宇、世弘三教、甚<sup>668</sup>風逾遠、考<sup>669</sup>定至理、多愆陶化、今並廢之。然其六經儒教、久弘<sup>670</sup>政術、禮義忠孝、於世有宜、故須<sup>671</sup>存意<sup>672</sup>。自眞佛無像、遙敬表心、佛經廣陳、崇建圖塔、壯麗修造、致福極多、此實無情、何能恩惠、愚人嚮信、傾竭珍財、徒爲引費、故須除蕩、凡是經象皆毀<sup>673</sup>滅之。父母恩重、沙門不敬、勃逆之其<sup>674</sup>、國法不容、並退還家、用崇孝始<sup>675</sup>、朕意如此、諸大德謂理何如<sup>676</sup>。

于時沙門大統等五百餘人、咸以王威震赫、訣<sup>677</sup>諫難從、關內以除、義非孤立<sup>678</sup>、衆各默然。下勅催答、並相顧無色、俛首垂淚。有慧遠法師、聲名光價、乃自<sup>679</sup>惟曰、佛法之寄、四衆是依、豈以杜言、謂能通理<sup>680</sup>。遂出對曰、陛下統臨大域<sup>681</sup>、得一居尊、隨俗致詞、憲章三教。詔云、眞佛無像、誠以天旨、但耳<sup>682</sup>生靈、賴經聞佛、藉像表眞。今若廢之、無以興敬。帝曰、虛空眞佛、咸自知之、未假經像。遠曰、漢明已前、經像未至、此土含生、何故不知虛空眞佛。帝時無答。遠曰、若不藉經教、自知有法者、三皇已前、未有文字、人應自知五常等法。當時諸人何爲、但識其母、不識其父、同於禽獸。帝又無答。遠曰、若以形像無情、事之無福、故須廢者、國家七廟之

660「皆」、興本「自」。661「殺」、七本「教」。662「問」、七本「問」。663「慧」、七本「惠」。664「平」、七本ナシ。665「御」、七本ナシ。666「立」、興・七本「之」。667「云」、七本「之」。668「甚」、興・七本「其」。669「考」、興・七本ナシ。670「弘」、七本「加」。671「須」、興本ナシ。672「意」、興・七本「立且」。673「毀」、七本「興」。674「其」、興・七本「甚」。675「始」、七本「如」。676「如」、興本ナシ。677「訣」、興・七本「決」。678「立」、七本「之」。679「自」、七本ナシ。680「理」、七本ナシ。681「域」、興・七本「城」。682「耳」、七本「耳目」。



像、豈是有情、而妄相尊事。

帝不答此難、乃云、佛經外國之法、此國不<sup>683</sup>須、廢而不用、七廟上代所立、朕亦不以爲是、將同廢之。遠曰、若以外國之<sup>684</sup>經非此用者、仲尼<sup>685</sup>所說出自魯國、秦晉之地亦<sup>686</sup>應廢而不行。又以七廟爲非、將欲廢者、則是不尊祖考、祖考不尊、則穆<sup>687</sup>失序、昭穆失序、則五經無用、前存儒教、其義安在。若爾、則三<sup>688</sup>教同廢、將何治國。帝曰、魯邦之與秦晉、封域乃殊、莫非王者一化、故不類佛經。七廟之難、帝無以通。遠曰、若以秦魯同遵一化、經教通行者、震旦之與<sup>689</sup>天竺、國界雖殊、莫不同在閭浮四海之內、輪王一化、何不同遵佛經、而今獨廢。帝又無答。

遠曰、詔云、並退還家、崇孝養者、孔經亦云、立身行道、以顯父母、即是孝行、何必還家。曰<sup>690</sup>、父母恩重、交資<sup>691</sup>色養、棄親向疎、未成至孝。遠曰、若如來言、陛下<sup>692</sup>、不見父母。帝曰、朕亦依番上下、得歸侍奉。遠曰、佛亦聽僧冬<sup>693</sup>夏隨緣修道、春秋歸家侍養、故目連乞飯<sup>694</sup>餉母、如來擔棺臨葬、此理大通、未可獨廢。帝又無答、遠抗聲曰、陛下今恃王力、自在破滅三寶、是邪見人、阿鼻地獄不簡貴賤、陛下何得不怖。帝勃然作色大<sup>695</sup>怒、直視於遠曰、但令百姓得樂、朕亦不辭地獄之苦。遠曰、陛下以邪法化人、現種苦業、當共陛下同趣阿鼻、何處有樂可得。帝理屈、言前所圖意盛、更無所答。但云、僧<sup>696</sup>等且還、有司錄取論僧<sup>697</sup>姓字。

帝已行虐三年、關隴佛法誅除略盡、既克齊境、還准毀之。爾時魏齊東川佛法崇盛、見成寺齊<sup>698</sup>出四十千、並賜王公充爲第宅。五衆釋門減三百萬、皆復軍民、還歸編戶。融刮佛像、焚燒經教、三寶福財、簿錄入官、登即賞賜、分散蕩盡。帝以爲得志於天下也、未盈一年、癘氣內蒸、身瘡外發、業相已顯、無悔可銷、遂隱於雲陽宮。纔經七日、尋爾傾崩、天元<sup>699</sup>嗣曆、於東西二京立陟岵寺、置菩薩僧、用開<sup>700</sup>佛化、不久帝崩、國運移革。

683「國不」、興本「土」… 684「之」、興本「諸」。685「尼」、七本「座」。686「亦」、興本ナシ、七本「乘」。687「穆」、七本「昭穆」。688「三」、七本「之」。689「興」、七本ナシ。690「曰」、興・七本「帝曰」。691「資」、興本「以」。692「下」、興・七本「下左右皆有二親何不放之乃使長役五年」。693「冬」、七本「各」。694「飯」、興・七本「食」。695「大」、七本「大德」。696「僧」、興・七本「價」。697「僧」、興・七本「價」。698「齊」、興・七本「廟」。699「元」、興本「无」。700「開」、興本「聞」。

至隋高祖方始<sup>701</sup>大通、如後所顯（注云<sup>702</sup>）。近見大唐吏部尚書臨『冥報記』云、外祖隋左僕射齊公、親見文帝、問死<sup>703</sup>還活人。云、初死見周武帝、云、爲我相<sup>704</sup>聞大隋天子、昔與我共食、倉庫玉帛、亦我之儲、我今爲滅佛法極受大苦、可爲我作功德也。文帝出勅普及天下人出一錢、爲之追福焉。

### 周高祖巡鄴除殄佛法有前僧任道林上表請開<sup>705</sup>法事第三<sup>706</sup>

周建德六年十一月四日、上臨鄴宮新殿、內史宇文昂・上事李德林收上書人表。于時、任道林以表上之、上土覽表曰、君二教也、聖主機辯、特難酬答、可思審之。對曰、主上鋒辯、名流十方、林亦且<sup>707</sup>聞、正以聞辯、故來得辯、無爽云云。乃引入上階御座西立。

詔曰、卿既上事、助匡治政、朕甚嘉尚、可條別自申、勿廣詞費。林乃上撫安齊餘省減賦役事、帝備納之。又曰、林原<sup>708</sup>誓弘佛道、向且<sup>709</sup>專論俗政、似欲諂附君人、其實本心護法。自釋氏弘訓、權應無方、智力高奇、廣宣政<sup>710</sup>法、救茲<sup>711</sup>五濁、特拔三有。人中天上、六道四生、莫不歸依迴向、受其開悟。自漢至今踰五百載、王公<sup>712</sup>卿士、遵奉傳通、及至大周、頓令<sup>713</sup>廢絕。陛下治襲前王、化承後帝、何容偏於佛教、獨不師古。如其非善、先賢久滅、如言有益、陛下可行<sup>714</sup>、廢佛之義、臣所未曉。

詔曰、佛生西域、寄傳東夏、原其風教、殊乖中國、漢魏晉世、似有若無。五胡亂治、風化<sup>715</sup>方盛。朕非五胡<sup>716</sup>、心無敬事、既非正教、所以廢之。

奏<sup>717</sup>曰、佛教東傳、時過七代<sup>718</sup>、劉淵篡晉、元非中夏。以非正朔<sup>719</sup>、稱爲五胡、其漢魏晉世、佛化已弘、宋趙符燕、久習崇盛。陛下恥同五胡、盛修佛法、請如漢魏、不絕其宗。

詔曰、佛義雖廣、朕亦嘗覽、言多虛大、語好浮奢、罪到憲推過去、無福則指未來、事者無徵、行之多惑、論其勸善、未殊古禮、研其斷惡、何異俗

701「始」、興本「如」。702「注云」、七本ナシ。703「死」、興・七本「死者」。704「相」、興本「想」。705「開」、興本「皆」、七本「問」。706「三」、興・七本「二」。707「且」、興・七本「早」。708「原」、興・七本「愿」。709「且」、七本「具」。710「政」、興・七本「正」。711「茲」、七本「慈」。712「公」、興本ナシ。713「令」、興本「合」。714「行」、七本「得」。715「化」、七本ナシ。716「胡」、七本「胡王胡」。717「奏」、七本「奉」。718「代」、興本「伐」。719「朔」、七本「胡」。

律。昔嘗爲廢、所以暫學、決知非益、所以除之。

奏曰、理深語大、非近情所測、時遠事高、寧小機欲辯。豈以一世之局見、而拒久遠之通議、封迷忽悟、不亦過乎。是以佛理極於法界、教體通於內外。談行、自他俱益、辯果、常樂無爲、樹德、恩隆天地、授道、廣利無邊、見奇、則神通自在、布化、則萬國同歸、救度、則怨親等濟、慈愛、則有識無傷。戒除外惡、定止止<sup>720</sup>非、慧照古今、智窮萬物。若家家行此、則民無不治、國國修之、則兵<sup>721</sup>戈無用、今離不行、何處求益。因<sup>722</sup>重奏曰<sup>723</sup>、臣聞孝者、至天之道、順者、極地之養。所以通神明、光四海、百行之本、孰先此孝。昔世道將傾、魏室崩壞、太祖奮威、補天夷難、創啓王業。陛下因斯鴻緒、遂登皇極、君臨四海、德加天下、追惟莫大、終身無報、何有信己心智、執固自解、倚恃爪牙、任縱王力。殘壞<sup>724</sup>太祖所立寺廟、毀破太祖所事靈像、休廢太祖所奉法教、退落太祖所敬<sup>725</sup>師尊。且父母床几、尚不敢損虧、況<sup>726</sup>父之親事、輒能輕壞。國祚延促、弗<sup>727</sup>由於佛、政治興毀、何關於法。豈信一時之<sup>728</sup>慮、招萬世之譏。愚臣冒<sup>729</sup>死、特爲不可。

詔曰、孝道之義、寧非至極、若專<sup>730</sup>守執、惟利一身、是使大智權方、反常令<sup>731</sup>道。湯武伐<sup>732</sup>主、仁智不非、尾生守信、禍至身滅。事若有益、假違要行、儻非令<sup>733</sup>理、雖順必前<sup>734</sup>、不可護已一名、令四海懷惑。內乖太祖、外潤黔元、令沙門還俗、省侍父母、成天下之孝、各各自活、不惱他人。使率土獲利、捨我<sup>735</sup>從夏、六合同一、即是揚名萬代、以顯太祖、即孝之終也、何得言非。

奏曰、若言壞佛有益、毀僧益民、昔太祖康日、高鑒萬理、智括千途、必佛法損他、即尋除蕩、寧肯積<sup>736</sup>年奉敬、興遍天下。又佛法存<sup>737</sup>日、損處是何、自破已來、成何利潤、若實無益、寧非不孝。

詔曰、法非不孝、廢興有時、道亦難准、制由上行、王者依<sup>738</sup>則、縱有小

720「止」、興・七本「心」。721「兵」、興本「岳」。722「因」、七本「日」。723「曰」、七本「目」。724「壞」、七本「懷」。725「敬」、七本「故」。726「況」、七本「咒」。727「弗」、興本「佛」。728「之」、七本ナシ。729「冒」、七本「四月」。730「專」、七本「傳」。731「令」、興本「念」、七本「合」。732「伐」、七本「代」。733「令」、興・七本「合」。734「前」、興・七本「剪」。735「我」、興本「戎」、七本「戒」。736「積」、興本ナシ。737「存」、興本「損」。738「依」、興・七本「作」。

利尚<sup>739</sup>須休廢、況佛無益、理不可容。何者、敬事無徵、招感<sup>740</sup>無効、自救無聊、何能益國。自廢已來、民役稍希、租調年增、兵師日<sup>741</sup>盛、東平齊國、西定妖我<sup>742</sup>、國安民樂、豈非有益。事<sup>743</sup>有益、太祖存日、屢嘗討齊、何不見獲、朕壞佛法、若是違害、亦可亡身。既平東夏、明知有益、廢之合理、義無更興。

奏曰、自國立政、惟貴於道、制化養民、寧高於德。止<sup>744</sup>見道消國喪、未有兵強祚久、是以虐紂恃衆禍傾帝業、周武脩德福集皇基。夫羌驕戰、遂至滅身、勾踐以道、危而更安、以此<sup>745</sup>論之、何關<sup>746</sup>壞佛退僧、方平東夏、直是毀佛、當此託定之時、偶然斯會、妄謂壞法有益。若爾、湯代<sup>747</sup>有夏、文王滅崇、武王誅紂、秦并天下、赤漢滅項、此等諸君、豈由壞佛。

自後交論、譏毀人法、或以抗禮君親、或謂妄稱佛性、或譏辯析色心、或重見作非業、或指身本陰陽、林皆隨難消解。帝終構難重疊、三番五番、窮理盡性、林則無疑不遣、有難斯通。

帝曰、卿言業不乖理、凡有入聖之期、性非業外、道有通凡之趣。此則道無不在、凡聖該通、是則教無孔釋、虛崇如是之言、形通道<sup>748</sup>俗、徒加剔翦之飾。是知帝王即是如來、宜儕<sup>749</sup>丈六、王公即是菩薩、省事文殊、耆年可爲上座、不用資頭、仁惠眞爲檀度、豈假棄國。和平第一精僧、寧勞布薩、貞謹即成木叉、何必受戒、儉約實是少欲、無假頭陀、蔬食至好長齋、豈煩斷穀。放任妙同無我、何藉解空、忘功全通大乘、寧希波若、文武直是二智、不觀空有、權謀略<sup>750</sup>徑成巧便、豈<sup>751</sup>待變化。加官眞爲受記、無謝證果、爵錄交獲天堂、何待上界<sup>752</sup>、罰戮見感地獄、不指泥犁。以民爲子、可謂大慈、四海爲家、即同法界、治政以理、何異救物、安樂百姓、寧殊拔苦、前<sup>753</sup>罰殘害、理是降魔、君臨天下、眞成得道。汪汪何殊淨土、濟濟豈謝迦維、卿懷異見、妄生偏執、即事而言、何處非道。

奏曰、伏承聖旨、義博言深、融道混俗、移專散執。乃令觸處乘眞、有情

739「尚」、七本「當」。740「感」、興本「咸」。741「日」、興本「自」。742「我」、興・七本「戎」。743「事」、七本「若事」。744「止」、興・七本「正」。745「此」、七本ナシ。746「關」、七本「開」。747「代」、興本「伐」。748「道」、七本ナシ。749「儕」、麗本「停」。750「略」、七本ナシ。751「豈」、七本「崇」。752「界」、興本「劣」。753「前」、興・七本「剪」。

俱道、物我咸通<sup>754</sup>、千徒齊一。美則美<sup>755</sup>矣、愚臣尚疑、若使至道惟一、則無二可融、若理恒外内、則自可常別、若一而非一、則半是半非、二而無二、則乍道乍俗。是則縑素<sup>756</sup>錯亂、儒釋失序、外内交雜、上下參倫、何直<sup>757</sup>遠沈清化、亦是近惑民俗。是以陰陽同氣、生殺恒殊、天地齊形、高卑常異。不可以其<sup>758</sup>俱形、而使地動天靜<sup>759</sup>、或<sup>760</sup>者見其並氣、而令陰生陽殺、即事永無此理、虛言難可成<sup>761</sup>用、所以形齊氣一、可得言同、生殺高卑、義無不別。故使同而不同、一而不一、道俗之理、有齊無與、無爲自別。又若王名雖一、凡聖天殊、形事微同、寬狹全異。是故<sup>762</sup>之<sup>763</sup>爲一、止可以道齊<sup>764</sup>俗、如其俱益於世、則<sup>765</sup>兩理幽顯齊<sup>766</sup>明。今則興一廢一<sup>767</sup>、眞成不可。

詔曰、卿言道俗天殊、全乖内外、亦可道應自道、無預於俗、釋應自釋、莫依儒王。道若惟道、道何所利、佛若獨佛、化有何功、故道俗相資、儒釋更顯、卿不因朕言、卿欲何論。是以内外抑揚、廢<sup>768</sup>興彼此。今國法不行、王力所斷<sup>769</sup>、廢興在數、常理無違、義無常興、廢有何咎。

奏曰、仰承聖旨、如披雲覩日、伏聽勅訓、實如聖說。道不<sup>770</sup>自道、非俗不顯、佛不自佛、惟王能興。是以釋教東傳、載經五百、弘通法化、要依王力、方知道藉人弘、神由物感、佛之盛毀、功歸聖旨、道有興廢、義無恒久、法有隱顯、理難常存<sup>771</sup>。比來已廢、義無即行、休斷既久、興期次及、興廢更遞、理自應機。並從世運、不亦宜乎。

詔曰、帝王之法、善決取捨、明斷去就、審鑒同異、妙察非常。朕於釋教、以潛思於府内<sup>772</sup>、较量於<sup>773</sup>今古、驗之以行事、算之以得失。理非常而不要、文高奇而<sup>774</sup>無用、非無端而<sup>775</sup>棄廢、何愛憎<sup>776</sup>於儒<sup>777</sup>釋。

奏曰、弘法之本、必留心於達人、通化之首、要存志於<sup>778</sup>正道。勿見忤己以惡者、懷之以疎隔、容己以美者、歡心以親近。是則自惑<sup>779</sup>於所見、自<sup>780</sup>

754「通」、興・七本「適」。755「美」、七本ナシ。756「素」、七本「索」。757「直」、興本「眞」。758「其」、興本ナシ。759「靜」、七本「淨」。760「或」、七本「惑」。761「成」、七本ナシ。762「故」、興・七本「故儒釋與無始俱興、道俗共天地同化。若欲泯」。763「之」、興本「出」。764「齊」、興・七本「廢」。765「則」、七本ナシ。766「齊」、七本「廢」。767「廢一」、興本ナシ。768「揚廢」、興本「揚齊」。769「斷」、七本「釋」。770「不」、興本「不曰道不」。771「存」、興本「在」。772「内」、七本ナシ。773「於」、七本ナシ。774「而」、興本「南」。775「而」、興本ナシ。776「愛憎」、七本「受憎」。777「儒」、興本「佛」。778「於」、興本ナシ。779「或」、七本「惑」。780「自」、興本ナシ。

亂於所聞。不可數聞有謗正之言、遂便信納、從唱而和、乘生是非、尋討愆短、日<sup>781</sup>懷憎<sup>782</sup>薄。是則以偽蚩眞、衆聲惑志。故令當疎者東<sup>783</sup>進之、當親者更遠之、遂使談論偏駁、取捨專非、斯乃害眞之禍患、喪德之妖累。於是帝不答、乃更開異途、以發論端。

問曰、朕聞君子舉厝、必合於禮、明哲動止、要應於機。比類賜卿食、言不飲酒食肉、且酒是和神之藥、肉爲充肌之膳、古今同味、卿何獨鄙。若身居喪服、禮制不食、即如今賜、自可得食、可食不食、豈非過耶。

奏曰、貪財喜色、貞夫所鄙、好膳嗜味、廉士所惡。割情從道、前賢所歎、抑慾崇德、往哲同嗟。況肉由殺<sup>784</sup>、酒能亂神、不食是理、寧可爲非。

詔曰、肉由害命、斷之且然、酒不損<sup>785</sup>生、何爲頓制。若使無損<sup>786</sup>計罪、無過言非、飲漿食飯、亦應得罪、而實不爾、酒何偏斷。

奏曰、結戒隨事、得罪據心、肉體因害、食之即罪、酒性非損<sup>787</sup>、過由弊神。餘處生過、過生由酒、斷酒即除<sup>788</sup>、所以遮制不同、非謂酒體是罪。

詔曰、罪有遮性、酒體生罪。今有耐酒之人、能飲不醉、又不弊神、亦不生罪、此人飲酒應不得罪。斯則能飲無過、不能招咎<sup>789</sup>、何關斷酒戒戒善、可謂能飲耐酒、常名持戒、少飲即醉、是大罪人。

奏曰、制過防非、本爲生善、戒是心善、身口無違、緣中止息、遮性兩斷、乃名戒<sup>790</sup>善。今耐酒之人既不亂神、未破餘戒、實理非罪、正以飲生罪酒、外違遮教、緣中生犯、仍名有罪、以乖不飲、猶非持戒。

詔曰、本<sup>791</sup>士懷道、要由妙解、至人高達、貴其不執<sup>792</sup>、融心與法、性齊寬肆、意共虛空、同量萬物、無不是善善<sup>793</sup>惡、何有非道。是則居酒臥肉之中、寧能有罪、帶<sup>794</sup>婦懷兒而遊、豈言生過。故使太子取婦得道、周陀以捨妻沈淪、淨<sup>795</sup>名以處俗高達、身子以出家愚執。是故善者未可成善、惡者何足言惡、禁酒斷肉之奇、殊乖大道。

奏曰、龍虎以鱗牙爲能、獫<sup>796</sup>鳥以超翺爲才、君<sup>797</sup>子以解行爲道、賢哲以

781「日」、興本ナシ。782「憎」、七本「懷」。783「東」、七本ナシ、興本「更」。784「殺」、興・七本「殺命」。785「損」、七本「指」。786「損」、七本「指」。787「損」、七本「指」。788「除」、興本「餘」。789「咎」、七本「各」。790「戒」、七本「或」。791「本」、興・七本「大」。792「執」、七本「報」。793「善」、興・七本ナシ。794「帶」、興本ナシ。795「淨」、興本「淨言生過故使太子取婦得道陴以捨妻沉淪淨」。796「獫」、

眞實成德、故使内外稱奇。緇素高尚、若惟解而無行、同沙井而非潤、專虛而不實、似空雲而無雨<sup>798</sup>。是以匠<sup>799</sup>萬物者、以繩墨爲正、御天下者、以法理<sup>800</sup>爲本。故能善行防邪、前察姦宄、故使一行之失痛於割肉、一言之善重於千金。若使心根妙解、則居惡爲善、神智虛明、處罪成福、亦可移臣賤質、居天重任、迴聖極尊、處臣卑<sup>801</sup>下。是則君臣雜亂、上下倒錯、即事不可、古今未<sup>802</sup>有。何異詞談忠孝、身恒叛逆、語論慈捨、形常殺盜、口閑<sup>803</sup>百技、觸事無能、言通萬里、足不出戶、斯皆情切事奢、言高無用。是以才有大而無用、理有小<sup>804</sup>而必適<sup>805</sup>。執此爲道、誠難取信。

詔曰、執情未可論道、小智者難與談眞。是以井坎之魚<sup>806</sup>、寧知東海深廣、燕雀籬翔、詎<sup>807</sup>羨鵬鳳之遊、斯皆固<sup>808</sup>小以違大趣、守文害於通途。若以我我於<sup>809</sup>物、無<sup>810</sup>物而非我、以物物於我、無我而非物、我既不異於物、物復焉異於我、我物兩忘、自他齊一。虚心者是物無不同、遺功者無事而不可。

奏曰、仰<sup>811</sup>承聖旨、名義深博、宗原浩汚<sup>812</sup>、究察莫由、事等窺天、誰測其廣、又同測海、寧識其深。若以小小於大、無大而不小<sup>813</sup>、以大大於小、無小而非大。大無不大、則秋毫非小小、無不、則太山非大<sup>814</sup>。故使大大非大小、小小非小大、是則小大異於同、小大同於異、無大小之異同、何小大之同異。方知非異可異同、寧有同可同異、無同可同異非異同、無異可異同無同異、是故無同而同非同、無異而異非異、何同異而可異同、非異同而可同異。

帝遂不答、於是君臣寂然不言。良久、詔乃<sup>815</sup>問曰、卿何寂寞<sup>816</sup>、乃欲散有歸無。勿以談不適懷、遂息清辯。

奏曰、古人當言而懼、發言而憂、是以古有<sup>817</sup>言之君、世傳忘功之士。所以息言表知、非爲不適。

七本「後」。797「君」、興本ナシ。798「雨」、興本「有」。799「匠」、興本「遊」。800「理」、興本「深」。801「卑」、七本「早」。802「未」、興本「來」。803「閑」、興本「聞」。804「小」、興本ナシ。805「適」、興・七本「通」。806「坎之魚」、七本「故之魯」。807「詎」、興本「護」。808「固」、七本「因」。809「於」、七本ナシ。810「無」、興本ナシ。811「仰」、七本「何」。812「浩汚」、興本「法行」。813「不小」、興本「大」。814「大」、興本ナシ、七本「大大」。815「乃」、七本「及」。816「寞」、七本「實」。817「有」、興・七本「有不」。

詔曰、至人無爲、未曾不爲、知者不言、未曾不言。亦有鸚鵡言而無用、鳳雞不言成軌、木有無任<sup>818</sup>得存、雁有不鳴致死。卿今取捨、若爲自適。又曰、士<sup>819</sup>有一言、而知人有目擊而道存、亦有觀色審情、復有聽言辯德。朕與卿言爲日既久、其間旨趣寧不略委、卿可爲朕在<sup>820</sup>所申陳、令諸世人知朕意焉。是則助朕、何愧忠誠。林以佛法淪<sup>821</sup>陷、冒死申請、帝情較執、不遂所論、辯論雖明、終非本意。

承長安廢教後、別立通道觀、其所學者惟是老莊<sup>822</sup>、好設虛談、通申三教、冀因<sup>823</sup>義勢、發明釋部。乃表鄴城義學沙<sup>824</sup>門十人並聰敏高明者、請預通道<sup>825</sup>觀。上覽表即曰、卿入通道觀大好、學無不有、至論補已、大爲利益。仍設食、訖曰、卿可裝束入關<sup>826</sup>、衆人前却。至五月一日、至長安延壽殿奉見、二十四日帝往雲陽宮、至六月一日帝崩。

天元發<sup>827</sup>祚在同州、至九月十三日、長宗伯岐公奏訖、帝允許之曰、佛理<sup>828</sup>弘大、道極幽微、興施有則<sup>829</sup>、法須研究。如此累奏、恐有稽違。奏曰、臣奉申事、止爲興法、數啓懇勸、惟願早行。今聖上允可、議曹奏決、上下含弘、定無異趣、一日頒行、天下稱慶、臣何敢言。

至大成元年正月十五日、語<sup>830</sup>曰、弘建玄風<sup>831</sup>、三寶尊重<sup>832</sup>、特宜脩敬、佛化弘廣、理可歸崇。其舊沙門中德清高者七人、在正武殿西、安置行道。二月二十六日改元大象、又勅、佛法弘大、千<sup>833</sup>古共崇、豈有沈隱、捨而不行。自今已後、王公<sup>834</sup>已下并及黎庶<sup>835</sup>、並宜修事、知朕意焉。

即於其日、殿嚴尊像、具修虔敬。于時佛道二衆、各證一大德、令昇法座、敷揚妙典、遂人懷無畏、互吐微言。佛理汪汪、中<sup>836</sup>深莫測、道宗漂泊、清淺可知、挫銳席中、王公嗟賞。

至四月二十八日、下詔曰、佛義幽深<sup>837</sup>、神奇弘大、必廣開化儀、通其修行。崇奉之徒、依經自檢、遵道之人、勿須剪髮毀形、以乖大道、宜可存鬚

818「任」、興本「住」。819「曰士」、七本「星」。820「在」、七本「在錄」。821「淪」、七本「論」。822「莊」、七本ナシ。823「因」、七本「日」。824「沙」、七本「町」。825「道」、七本ナシ。826「關」、七本「開」。827「發」、興・七本「登」。828「理」、興本ナシ。829「則」、興本ナシ。830「語」、興・七本「詔」。831「風」、七本「鳳」。832「重」、興本ナシ。833「千」、興本「千百」。834「公」、七本「共」。835「庶」、七本「廣」。836「中」、興・七本「沖」。837「深」、七本「途」。



髮嚴服、以進高趣。令選舊沙門中、懿德貞潔、學業冲博、名實灼然、聲望可嘉者一百二十人、在陟岵寺爲國行道、擬欲供養資須、四事無乏。其民間禪誦、一無有礙、惟京師及洛陽各立一寺<sup>838</sup>、自<sup>839</sup>餘郡猶未通許。

周大象元年五月二十八日、任道林法師在同州衛道虎宅修述其事。呈<sup>840</sup>上內史<sup>841</sup>沛公宇文譯視覽、小內史臨經<sup>842</sup>公宗<sup>843</sup>文弘披讀、常禮上士託<sup>844</sup>跋行恭、委尋都上士叱寇臣<sup>845</sup>審覆。

高祖諱邕、即西魏丞相宇文黑泰之第三子也。泰以魏氏廢帝三年崩、世子洛陽公覺嗣位、受魏禪號大周、其年被廢。立弟寧都公敏、三年崩、諡明帝。立弟魯國公、即高是也。改號保定、盡五年、改元天和、盡六年、改建德、至三年滅佛法、六年平齊、江淮巴蜀、中原一統<sup>846</sup>。帝以爲得政於天下也、改號宣政、五月便崩。

初帝深信佛宗、曾無有二。流俗<sup>847</sup>讖緯、黑衣當王、以僧緇服、彌所經懷。所以太祖入關<sup>848</sup>、便改衣幘、悉爲皂色、用厭不祥、乃至高齊竊忌釋種、將戮稠師、以通覺故、所以免害、遂使周祖相從嫉<sup>849</sup>之。危身事迫、信用讒佞、終是信非徹到、故受<sup>850</sup>斯言、不思禍國滅身、勇意而行誅剪、三寶摧碎、寶命銷亡<sup>851</sup>。所以統御既窮、當年便殞。子贇襲位、改元大成、二十六日禪位子衍、改元大象。贇號天元、明年五月、天元又崩、後年正月、改元大定<sup>852</sup>。於二月內國禪有隋、改號開皇、率改皂衣<sup>853</sup>普同黃色、是知讖緯虛誕。光武已著<sup>854</sup>前規卜射雉期、虞氏加其潤色、漢末<sup>855</sup>謠言、黃衣當王、張通<sup>856</sup>・張<sup>857</sup>魯並變服以應之、黃武又改元以附之、斯術<sup>858</sup>不亡<sup>859</sup>。又見周隋交禪、以事徵驗、終歸於空。若夫興廢之<sup>860</sup>道、曆數有斯<sup>861</sup>、因<sup>862</sup>亡故昌<sup>863</sup>、亡亦爲貴。故經云、難遭想滅、大聖爲之碎身、隨機得度、淨土由來不毀。周武行事、不亦宜<sup>864</sup>乎。

838「立一寺」、七本「共一本」。839「自」、七本「目」。840「呈」、七本「星」。841「史」、七本ナシ。842「經」、七本「注」。843「宗」、興・七本「字」。844「士託」、興・七本「事托」。845「臣」、七本ナシ。846「統」、七本「緣」。847「俗」、七本「浴」。848「關」、七本「開」。849「嫉」、七本「疾」。850「受」、興本「是」。851「亡」、七本「已」。852「定」、興本「空」。853「衣」、興本「服」。854「改皂……已著」、十七字、興本ナシ。855「末」、七本「衣」。856「通」、興・七本「角」。857「張」、七本ナシ。858「術」、興本ナシ。859「亡」、七本「王」。860「之」、興本「五」。861「斯」、興・七本「期」。862「期因」、興本「斯曰」、七本「斯自」。863「昌」、七本「冒」。864「宜」、興本ナシ。

道林法師、俗姓任氏、高齊之時在相州、鄴下有名大德。周氏東平、誅除釋種、當時高祖召僧共評廢立、上統等五百餘人無敢陳抗。惠遠法師崛起抗<sup>865</sup>詔、帝無以答、遂以威滅。道林法師初以他行、後乃申表帝含弘、召至御座、對坐交論二十餘日、前後七十餘番、帝<sup>866</sup>極覈微、竟不能屈。既理有所歸、乃付議曹、量其可否、會帝昇遐<sup>867</sup>、天元嗣位<sup>868</sup>。至大象元年八月二十九日議哀、九月內<sup>869</sup>申奏時深加面<sup>870</sup>許、明年正月遂詔頒<sup>871</sup>行、於是佛法如前廣通<sup>872</sup>。

#### 又大象元年二月、內鄴城故周天元皇帝納王明廣表開佛事第四

趙武帝白馬寺佛圖澄孫弟子王明廣、上衛元嵩佛法事、表達天元皇帝。至四月<sup>873</sup>八日、內史上大夫宇文譯宣勅旨、佛教興來多曆年代、論其至理、實自難明、但以世代澆浮、不依佛教、致使清淨之法變成濁穢。太祖武皇帝所以廢而不存、正爲如此。朕今情存至道、思弘善法、方<sup>874</sup>欲簡擇練行、恭修<sup>875</sup>此理<sup>876</sup>、令形服不<sup>877</sup>改、德行仍存、敬設道場、欲行善法、至<sup>878</sup>公已下並宜知委。餘如前說。

#### 隋文帝詔爲降<sup>879</sup>州天火焚老君像事第五

門下、夫妙覺垂慈、等群生於一子、玄門亭毒、總萬物而爲母。故泥<sup>880</sup>洹大教、化彼耆城、無爲眞道、被斯神國、豈<sup>881</sup>徒足相淨土、不容眞人之勝哉。曲沃東南土<sup>882</sup>名烏谷、有靈宮一<sup>883</sup>所、道佛同座、碑記湮滅、莫識修起所由、年代參差、不知營造遠近。忽有異風揚礫、如飛長者之蓋、頽雲掩地、砂<sup>884</sup>狎<sup>885</sup>司宮<sup>886</sup>之兵<sup>887</sup>、驟雨闌<sup>888</sup>干、翻伊倒洛、電女掣鞭、天帶流金之色、雷童挽軸、地有崩山之響。礪礪老君、身首各去、而佛靈相、儼然無損。黃鶴

865「抗」、興本ナシ。866「帝」、七本「章」。867「遐」、興本「遊」。868「位」、興本「保」。869「內」、七本「丙」。870「面」、七本「西」。871「頒」、興本「復」。872「通」、興本ナシ。873「四月」、興本「月四」。874「方」、興本ナシ。875「修」、七本「宿」。876「理」、七本「隍」。877「不」、七本ナシ。878「至」、興・七本「王」。879「降」、興・七本「絳」。880「泥」、七本「汰」。881「豈」、七本「宣」。882「土」、興本「土」。883「一」、七本ナシ。884「砂」、興・七本「似」。885「狎」、興本「俾」。886「宮」、七本「空」。887「兵」、興本「丘」。888「闌」、興本「蘭」。

已高、青牛遂遠、未識金<sup>889</sup>丹、安能不惑者焉、主者施行。

集論者云、夫邪正糾紛、在智猶惑、幽明<sup>890</sup>路絕、顯驗斯形。皇<sup>891</sup>覺照臨、滿於空有之域、靈瑞<sup>892</sup>感應、充於凡聖之心。自赤澤降神、青丘化及、威德之清昏識、神光<sup>893</sup>之燭幽<sup>894</sup>都、無不喪膽求師、款懷請道、所以掃六師于舍衛、梵主傾誠、偃十陣<sup>895</sup>於伽耶。魔天稽首、安得與夫區區老叟黃巾奉而抗衡、瑣瑣君<sup>896</sup>生黔首則<sup>897</sup>而齊化。故使周照照<sup>898</sup>宅生已後、唐文教迹以前、未聞釋尊儀相靈祇之所輕毀。至於李老形像、頻被欺陵、曲沃同座而別焚、彭門僂拜而道偃。斯徒衆矣、略舉知之、頑俗多迷、疑湯自結、終非異敢、故抱遲惟。

余以近歲、道訪古蹤、行至鄂西、地名樓觀、古樹摧蘗<sup>899</sup>、院宇曾殘、中有宗聖觀、觀南有尹<sup>900</sup>先生別廟。周訪道士、云此不是老<sup>901</sup>君<sup>902</sup>之本地也、尹<sup>903</sup>喜聞道、故置廟以處之。其觀地通南山、近城<sup>904</sup>有一土臺、叢樹森聳<sup>905</sup>、云是者<sup>906</sup>君之墓也<sup>907</sup>。訪問周歷、暮宿觀西尹村尹<sup>908</sup>長悉<sup>909</sup>家、因問氏族。長樂年雖遲暮、慧解清明、言晤微擊、諸道怯其過往。自云是尹令之餘胤也、東邊樓觀、此乃先君尹令之故宅也。先君志重丘園、情敦稼穡、地廣苗厚、通觀莫<sup>910</sup>因、遂結草爲樓、以用觀望、故云樓觀也。本非老君之宅、先君承老君西遁<sup>911</sup>、將往流沙、道左邀攜、逆旅相待、老君遂之此宅。周眺久之、東南高崗即先君之古<sup>912</sup>臺也、當時亦與李老共登此臺。祖宗相承、墳墓時列、不聞先君與李老西邁、此乃出自道書、非關古史。又云、昔聞李老生陳苦縣、長<sup>913</sup>亦東川、老方入秦、死於槐里、未聞正說、西化流沙、雖史遷浪言、非爲定指。莊蒙所及、斯途有歸、自餘云云、不可尋檢。

余又往始平之南二十餘里、渭水之北<sup>914</sup>、槐里古城、基趾<sup>915</sup>尚存。中有一

889「金」、七本「全」。890「明」、七本「朋」。891「皇」、興本「自皇」。892「顯驗……靈瑞」、十七字、興本ナシ。893「光」、興本「咒」。894「幽」、興本ナシ。895「陣」、興本「陳」。896「君」、興・七本「尹」。897「區區……首則」、十七字、興本ナシ。898「照」、興本「昭」、七本ナシ。899「蘗」、興本ナシ。900「尹」、興本「尸」。901「老」、興本「者」。902「君」、七本「居」。903「尹」、興本「君」。904「城」、興・七本「坡」。905「聳」、興本「從耳」。906「者」、興・七本「老」。907「也」、七本「已」。908「尹村尹」、興本「尸村尸」。909「悉」、興・七本「樂」。910「莫」、七本ナシ。911「遁」、七本「通」。912「古」、興・七本「右」。913「長」、興本「長子東」。914「北」、興本「比」。915「趾」、興本ナシ。

塚、訊問耆舊、斯塚是誰、皆莫知其由、案縣圖經、但述古城、亦不測<sup>916</sup>其年伐<sup>917</sup>、塚跡今遠。訪流沙、即<sup>918</sup>燉煌鳴沙之地是也<sup>919</sup>、彼有流沙之地、而無伯陽之風。『檢道』・『化胡』・『西昇』經等、聃往化故<sup>920</sup>、胡人不受、乃令君<sup>921</sup>喜爲佛化胡、胡人方服。今窮其浮<sup>922</sup>辯、較其宗匠、自天竺已北諸外國者、乃稱胡國、人皆<sup>923</sup>奉佛、未承喜化、還祖天竺釋迦如<sup>924</sup>來。若此搜求、聃行不遠槐里死矣、秦佚吊之、頗爲實錄、自餘虛引、未足稱之。故隋尚書令楚國公楊素、行經樓觀、見壁畫尹喜化胡之像、素告諸道士曰、「承聞老君化胡、胡人不受、令<sup>925</sup>喜變身作<sup>926</sup>佛、胡人方受。是知佛能化胡、胡人奉佛、道不能化、云何言老子化胡。」深思此言也。

胡<sup>927</sup>列時緣、露布惟遠、後進廣聞、安能博詣、想有識者、顧此懷諸。

#### 隋兩帝重佛宗俱受歸戒事第六<sup>928</sup>

安<sup>929</sup>隋著作郎王邵述隋起居經<sup>930</sup>云、帝以後<sup>931</sup>魏大統七年六月十三日、生於<sup>932</sup>同州<sup>933</sup>般若尼寺。于時赤光照室、流溢戶外、紫氣滿庭、狀如樓閣、色染人衣、內外驚異。師母以時炎熱、就而扇之、寒甚幾絕、困不能啼。有神尼者、名曰智仙、河東劉氏女也。少出家、有戒行、和上失之恐墮井、乃在佛屋儼<sup>934</sup>然坐定、時年七歲、遂<sup>935</sup>以禪觀爲業。及帝誕日、無因而至、語太祖曰、兒天佛所祐<sup>936</sup>、勿憂也。尼<sup>937</sup>遂名帝爲那羅延、言如金剛不可壞也。又曰、兒來處異倫俗家穢雜、自爲養之。太祖乃割宅爲寺、以兒委尼、不敢名問。後皇妣來抱、忽化爲龍、驚遶墮地。尼曰、何因妄觸我兒、遂令晚得天下。及年七歲、告帝曰、兒當大貴、從東國來、佛法當滅、由兒興之。尼沈靜寡<sup>938</sup>言、時道吉凶、莫不符驗。初在寺養、帝年至十三、方始還家。

及周滅二教、尼隱皇家、帝後異<sup>939</sup>自山東入爲天子、重興佛法皆如尼言。

916「測」、興本「側」。917「伐」、興・七本「代」。918「即」、興本「沙即」。919「也」、興本「已」。920「故」、七本「胡」。921「君」、興・七本「尹」。922「浮」、七本「深」。923「皆」、興本「比」。924「如」、興本ナシ。925「令」、興本ナシ。926「作」、七本「似」。927「胡」、興・七本「故」。928「第六」、興本ナシ。929「安」、興・七本「案」。930「經」、興・七本「注」。931「案隋……以後」、十七字、興本ナシ。932「於」、興本「年」。933「州」、興本「洲」。934「儼」、興本「儀」。935「遂」、興本ナシ。936「祐」、興本ナシ。937「尼」、興本「屋」。938「寡」、興本「宣」。939「異」、興・七本「果」。

及登位後、每顧群臣、追念阿闍梨、以爲口實。又云、我興由佛法、而好食麻豆、前身似從道人中來、由小時在寺、至今樂聞鍾聲。乃命史官爲尼作傳。帝昔龍潛、所經四十五州、及登極後、皆悉同時起大興國寺。仁壽元年、帝及後宮<sup>940</sup>感<sup>941</sup>舍利、並放光明、砧槌試之、宛然無損。遂前後置塔、諸州百有餘所、皆量<sup>942</sup>銘勒、隱于地府、感<sup>943</sup>發神瑞、充弼耳目<sup>944</sup>、具如王邵所撰『感應傳』。所以周祖竊忌黑衣當王、便摧滅佛法、莫識隋祖元養佛家、王者不死、何由可識、事過方委知聖作<sup>945</sup>狂、自古皆爾、備諸聞見。然帝信<sup>946</sup>重佛宗、情住<sup>947</sup>無已、每日登殿、坐列七僧、轉經問<sup>948</sup>法、乃至大漸<sup>949</sup>。至於道觀、羈縻<sup>950</sup>而已、崇建功德、佛門隆盛。時既非遙<sup>951</sup>、故略其敘。

于時曇延法師、是稱僧傑、昇於正殿而授帝菩薩戒焉、事如別顯。及大業嗣曆、彌隆前政、昔居晉府、盛集英髦。慧日法雲、道場興號、玉清金洞、玄壇著名、四海搜揚、物<sup>952</sup>歸晉府。四事供給、三業依憑、禮以家僧、不屬州省、迄于終曆、徵訪莫窮、而情慕佛宗、崇奉誠約。

天台智顛、定門幽祕、神用罕加、請爲國師、尊稱智者、言令所及、無不允從。及其即世、廢朝追感、就山造寺、廣度衆僧。下書優<sup>953</sup>問、慇懃委曲、遺錫糧粒、并諸法衣。欲使徒衆行道如師在日、故每至忌晨、必預先設供。門人歲至、面敘昔緣、情款莫二。自有帝王、於師珍敬、無以加也。至於李老符籙、曾無預懷、致使交論興言、絕於徵名<sup>954</sup>、故無編次云。

#### 集古今<sup>955</sup>論衡<sup>956</sup>實錄卷中

940「宮」、興・七本「宮同」。941「同感」、興本「威」。942「量」、興・七本「置」。943「感」、七本「威」。944「耳目」、七本「目前」。945「作」、興・七本「詐」。946「方委……帝信」、十七字、興本ナシ。947「住」、七本「注」。948「問」、興本「聞」。949「漸」、興本「衛」。950「縻」、興本「磨」。951「遙」、興本「遑」。952「物」、興・七本「總」。953「優」、七本「憂」。954「名」、七本「召」。955「今」、興・七本「今佛道」。956「衡」、興本「何」。

## 集古今佛道論衡實録卷下

唐釋道宣撰

- 大唐高祖門<sup>957</sup>僧形服利益事第一  
 武皇幸國學問僧道能生佛事第二  
 道士李仲卿著論毀佛琳法抗<sup>958</sup>辯<sup>959</sup>第三  
 太<sup>960</sup>宗勅道先佛後僧等上表請校勘<sup>961</sup>第四  
 太<sup>962</sup>宗勅道士『三皇經』不足開化令焚除第五  
 皇太<sup>963</sup>子召佛道二宗入宮親觀論義第六  
 辛中舍著『齊物論』淨琳二師抗釋第七  
 太<sup>964</sup>宗問琳師『辯正論』信毀交報事第八  
 太<sup>965</sup>宗幸弘福寺手製願文并<sup>966</sup>敘佛道<sup>967</sup>先後事第九  
 太<sup>968</sup>宗詔瑒法師翻道經爲梵文<sup>969</sup>與道士辯<sup>970</sup>事第十  
 今上召佛道二宗入內詳述名理事第十一  
 上以西明寺成召僧道士入內論義第十二  
 上以冬雪未降內齋祀名<sup>971</sup>佛道二宗論義<sup>972</sup>第十三  
 上幸東都名<sup>973</sup>西京僧道士等於彼論義<sup>974</sup>第十四<sup>975</sup>

—<sup>976</sup>高祖問僧形服有何利益琳法師奉對事第一

皇唐啓運、諸教普<sup>977</sup>興、然於佛法彌隆信重、捨京舊第、置<sup>978</sup>興聖寺、自餘會<sup>979</sup>昌・勝業・慈悲・證果・集仙等寺、架築相尋。至<sup>980</sup>道觀、無聞<sup>981</sup>於俗。武德四年、有太史令傅奕者、先是黃巾、深忌緇服。既見國家別敬、彌

957「門」、七本「問」。958「抗」、七本ナシ。959「第」、七本「事第」。960「太」、興本「大」。961「表請校勘」、七本「表請校」。962「太」、興本「大」。963「太」、興本「大」。964「太」、興本「大」。965「太」、興本「大」。966「並」、七本ナシ。967「道」、興本ナシ。968「太」、興本「大」。969「文」、興・七本ナシ。970「覈」、七本「覆」。971「名」、興・七本「召」。972「第」、七本「事第」。973「名」、七本「召」。974「第」、七本「事第」。975「上幸東都召西京僧道士等於彼論義事第十四」、興本「上幸東都召西京僧道士等於彼論義一條」。976「一」、七本ナシ。977「普」、興・七本「並」。978「置」、七本「四直」。979「會」、七本ナシ。980「至」、興・七本「至於」。981「聞」、興本「問」。

用疚心、乃上廢佛法事十有一條云、佛<sup>982</sup>經誕妄<sup>983</sup>、言妖事隱、損國破家、未聞益世。請胡佛邪教退還天竺、凡是沙門、放歸桑梓、則家國昌大、李孔之教行焉。

武皇容其小弁<sup>984</sup>、朝輔任其放言、乃下詔問僧曰、棄父母之鬚髮、去君臣之華服、利在何間<sup>985</sup>之中、益在何情之外。損益二宜、請動妙釋。

有濟法寺沙門襄陽釋法琳、憤激傳詞、側聽機候、承有斯問、即陳對曰、琳聞至道絕言、豈九流能辯、法身無象、非十翼所詮。但四趣茫茫、飄淪欲海、三界蠢蠢、顛墜邪山、諸子迷以自焚、凡夫溺而不出。大聖爲之<sup>986</sup>興世、至人所以降靈、遂開解脫之門、示以安樂之路。於是天竺王種、辭恩愛而出家、東夏貴遊、厭榮華而入道、誓出二種生死、志求一妙涅槃。弘善以報四恩、立<sup>987</sup>德以資三有、此其利益也。毀形以成其志、故棄鬚髮美容、變俗以會其道、故去君臣華服。雖形闕奉親、而內懷其孝、禮乖事主、而心戢其恩、澤被怨親、以成<sup>988</sup>大順、福霑幽顯、豈拘小違。上智之人、依佛語故爲益、下凡之類、虧聖教故爲損。懲惡則濫者自新、進善則通人感化、此其大略也。

而傅氏所奏、在司既不施行、乃多寫表狀、公然遠近流布。京室閭里、咸傳禿丁之誚、劇談席上、昌言胡鬼之謠、佛日翳而不明、僧威阻而無力。于時達量道士、動毫成論者非一、各疎佛理、曲陳邪<sup>989</sup>正、皆是<sup>990</sup>奕之所廢、豈得引廢成興、雖曰破邪、終歸邪破。

琳情出玄機、獨覺千載、器局天授、博悟生知。睹作者之小功、信乘權之有據、乃著『破邪論』。其詞曰、莊周云、六合之內、聖人論而不議、六合之外、聖人存而不論。老子云、域<sup>991</sup>中有四大、而道居其一。案<sup>992</sup>前漢『藝文志』所紀衆書、一萬三千二百六十九卷、莫不功在近益<sup>993</sup>、意在敬事君父、俱未暢於遠途、止在移風易俗。遂使三世因果、理涉且而猶昏、業報吉凶、義經丘而未曉<sup>994</sup>。斯乃六合之寰塊、三才之<sup>995</sup>俗謨、詎免四流浩汗、爲煩惱之波、六趣誼<sup>996</sup>譁、造塵勞之路者也。原夫實相杳冥、逾要道之道<sup>997</sup>、法身

982「佛」、興本「何佛」。983「誕妄」、興本「訛誕」。984「弁」、興本「辨」、七本「辯」。985「間」、七本「問」。986「之」、興本「足」、七本「人」。987「立」、七本「之」。988「成」、興本「風」。989「邪」、興本ナシ。990「是」、七本ナシ。991「域」、興本「城」。992「案」、興本「安」。993「益」、七本「蓋」。994「曉」、興本「時」。995「之」、興本ナシ。996「誼」、興本「演」。997「道」、七本ナシ。

凝家<sup>998</sup>、出玄之又玄。所以現<sup>999</sup>生忍土、誕聖王宮、示金色之身、吐至<sup>1000</sup>毫之相。行則蓮華捧足、住則百寶承<sup>1001</sup>軀、出則天主導<sup>1002</sup>前、入則<sup>1003</sup>梵王從後。聲聞菩薩、儼若朝儀、八部萬神、森然輔衛。演『涅槃』則地現六動、說『般若』則天雨四花。百福莊嚴、狀<sup>1004</sup>滿月之臨滄海、千光照曜、如聚日之映寶山。師子一吼、則外道摧鋒、法鼓暫鳴、則天<sup>1005</sup>魔稽首、是故號<sup>1006</sup>佛爲法王也、豈與衰<sup>1007</sup>周李耳比<sup>1008</sup>德爭衡、末代孔丘輒相聯類、非所言也。

文有三十餘紙、自琳論出、冠絕群篇、家藏一本、心口常誦、並流略之菁華、史書之藻鏡。茂譽於是乎佛<sup>1009</sup>騰、蒙俗由之而開悟、琳有功矣。琳以論卷初出、意在榮達、所知上之化下、風靡之言則易、乃上啓儲貳親王及公卿侯伯、並文理弘被、庶績<sup>1010</sup>咸嘉、其博詣焉。故奕奏狀因之遂寢、得使釋門重敞<sup>1011</sup>、琳有其功。東宮庶子虞世南、詳所上論爲之序、胤光<sup>1012</sup>價之顧、又重由來。

琳姓陳氏、潁川太丘之後、遠祖移於襄陽、故爲縣人焉。少出家、住荊州青溪山玉<sup>1013</sup>泉寺、博通內外、以文學見知。大業<sup>1014</sup>初元<sup>1015</sup>入關、視聽以槐里老宗、張葛承繼、言多誕謬、有阻素風、不勝其妄、親事觀闕。史云、老氏西之流沙、莊云、老氏死於槐里、二說糾紛、名實乖競、故西窮砂塞、絕李氏之蹤、中至槐城<sup>1016</sup>、有古墳之驗、追訪耆舊、莫識其源。然樓觀道宗、乃君<sup>1017</sup>喜之宅、延老君過之、非柱下居處。今觀西尹<sup>1018</sup>□君<sup>1019</sup>長樂者、村中魁峯<sup>1020</sup>、即尹令之<sup>1021</sup>後、事佛不事道也。余問焉、昌言、我祖結草爲樓、於觀望、故曰樓觀、本非老君之所宅也。今東觀中廣者、即君<sup>1022</sup>先君之宗廣也、自古至今、子孫承紹。不往流砂、昭<sup>1023</sup>穆斯在、但以時逢寬政、不事糺懲、任彼黃巾高仰尹李、致<sup>1024</sup>有符圖章醜、代代繁廣、道德宏旨豈

998「家」、興・七本「寂」。999「現」、興本「見」。1000「至」、興・七本「玉」。1001「承」、七本「冢」、興本「逐」。1002「導」、興本「尊」。1003「則」、七本ナシ。1004「狀」、興本「然」。1005「天」、七本「夫」。1006「號」、興本「子」。1007「衰」、七本「裏」。1008「比」、興本「皆」。1009「佛」、興本「沸」。1010「績」、七本「續」。1011「敞」、興本「教」。1012「光」、七本「先」。1013「玉」、興本「王」。1014「業」、興本「幸」、七本「乘」。1015「元」、興本「無」。1016「城」、七本「地」。1017「君」、七本「尹」。1018「尹」、七本「君」。1019「□君」、興・七本「村尹」。1020「峯」、七本「岸」。1021「之」、七本ナシ。1022「君」、興・七本「尹」。1023「昭」、七本「韶」。1024「致」、



其<sup>1025</sup>然乎、莫不後生存利、非老厥宗<sup>1026</sup>。琳慨其謬妄、方欲討其根源、若非共住久處、無由得成探<sup>1027</sup>蹟。則戴冠服褐、從其靜館、爲述道德、通說莊黃。昔在<sup>1028</sup>荆楚、曾經陶練、義在玄微、蘊括情抱。秦川道學、麟角罕逢、自餘章句、梗概而已。致使九仙九府之錄、三元三<sup>1029</sup>洞之儀、黃庭黃書之秘、天文步剛之術、服氣練尸、飛丹<sup>1030</sup>獲液、莫不說如指掌、寫送無遺。於是高會館宇、把臂朋從、藏篋並開、奇方畢吐。琳本期<sup>1031</sup>既暢、窮力搜求、乃見乾竺古皇老君之師、奉僧位<sup>1032</sup>高顯、道士之所推、敬佛之日如雲、重法之科霧結<sup>1033</sup>、並具抄略、用擬不虞、後乃返跡、舊徒如常綜業。

及皇運初興、傳令陳表、仲卿進喜、踏駁佛僧、著論形於見聞、興言在於貶退。琳遂依而抗<sup>1034</sup>拒、引道敬我佛乘、劉李違師背教、妄作罔冒<sup>1035</sup>凡聖。

及太宗覽論、試以顯驗之刑<sup>1036</sup>、琳對以正理極言、上帝一無所問、移於益<sup>1037</sup>部僧寺。行至百牢關、因疾而卒、時年六十有九。凡所著論、集三十餘卷、然於釋李交論、偏意敷弘、固使文據卓明、終始包富、後賢引用、不假傍求。斯即季代護法之開士也、當時用<sup>1038</sup>代相侮、逝<sup>1039</sup>後惜之、自餘玼瑣、未足言議。其對晤重沓、如後廣之、此<sup>1040</sup>但敘其風素耳。

## 二<sup>1041</sup>高祖幸國學統<sup>1042</sup>集三教問僧道是佛師事第二<sup>1043</sup>

武德八年、歲君<sup>1044</sup>協洽、駕幸國學禮陳釋<sup>1045</sup>奠<sup>1046</sup>、堂<sup>1047</sup>列三座、擬敘三宗。時勝光寺惠<sup>1048</sup>乘法師、隋場所珍、道俗敦敬、衆所樂推、以爲道首。於時五都才學、三教通人、榮貴宰伯、臺省咸集。天子下詔曰、「老教・孔教、此土<sup>1049</sup>元基、釋教後興、宜崇客<sup>1050</sup>禮。今可老先・次孔・末<sup>1051</sup>後釋宗。」當時相顧、莫敢酬抗。乘雖登座、情慮不安。太宗時爲秦王、躬臨位

興本ナシ。1025「其」、興本「有」。1026「老厥宗」、興本「在老厥」。1027「探」、七本「採」。1028「在」、興本「存」。1029「三」、七本ナシ。1030「丹」、興本「舟」。1031「期」、七本「斯」。1032「位」、興本ナシ。1033「結」、興本「法」。1034「抗」、興本ナシ。1035「罔冒」、興本「罔冒」。1036「刑」、興・七本「形」。1037「益」、七本「無」。1038「用」、興本「周」、七本「同」。1039「逝」、七本「遊」。1040「此」、七本ナシ。1041「二」、七本ナシ。1042「統」、興・七本「統」。1043「二」、七本「一」。1044「君」、興・七本「居」。1045「二武……陳釋」、十六字、興本ナシ。1046「奠」、興本「尊」。1047「堂」、七本「當」。1048「惠」、興本「慧」、七本「慧」。1049「土」、興本ナシ。1050「客」、七本「容」。1051「末」、興本「末」。

席、直視乘面、目未曾迴。頻降中使云、「無所慮、師但廣述佛宗 [7]、光敷帝德、既最末陳唱、冠徹前通。」乃命宗曰、「上天下地、其貴<sup>1052</sup>在<sup>1053</sup>人、榮位緣業、必宗佛聖。今<sup>1054</sup>將敘大致、須具禮儀、並合掌虔跪、表師資有。」據聲告纔止<sup>1055</sup>、皇儲以下、爰逮群僚、各<sup>1056</sup>下席互跪、竚聆清辯。

乘前開帝德云、「陛下巍巍堂堂<sup>1057</sup>、衆聖中王、如星中之月」、言多不載。次述釋宗、後以二難雙徵兩<sup>1058</sup>教。

先問道云、「先生廣位道宗、高邁宇<sup>1059</sup>宙、向釋『道德』云、上卷明道、下卷明德。未知此道更有大此道者、爲更無大於道者。」答曰、「天上天下、惟道至極、最大更無大於道者。」

難曰、「道是至極、最大更無大於道者、亦可道是至極之法、更無法於道者。」答曰、「道是至極之<sup>1060</sup>法、亦更無法於道者。」

難曰、「『老經』自云、“人法地、地法天、天法道、道法自然”、何意自違本宗、乃至更無法於道<sup>1061</sup>者、若道是至極之法、遂更有法於道者。何意道法最大、不得更有大於道者<sup>1062</sup>。」答曰、「道只<sup>1063</sup>是自然、自然即是<sup>1064</sup>道、所以更不別有法能法於道者。」

難曰、「道法是自然、自然即是道、道金<sup>1065</sup>得自然、自然<sup>1066</sup>法道不。」答曰、「道法是自然、自然不法道。」

難曰、「道法是自然、自然不法道、亦可道即法自然、自然不即道。」答<sup>1067</sup>曰、「道法是自然、自然即是道、所以不相法<sup>1068</sup>。」

難曰、「道法是自然、自然即是<sup>1069</sup>道、亦可地既法於天、天應即是地。然法於天、天不即地、故知道法自然、自然不即<sup>1070</sup>道、若自然即是道、天應即是地。」

於是仲卿在座、周樟神府、抽解無地、忸敕<sup>1071</sup>無答。當時榮貴<sup>1072</sup>昌<sup>1073</sup>言、

1052「末陳……其貴」、十七字、興本ナシ。1053「在」、興本「有」。1054「今」、興本「令」。1055「止」、興本「上」。1056「各」、興本「名」。1057「堂」、興本ナシ。1058「兩」、七本ナシ。1059「宇」、興本「宗」。1060「之」、興本ナシ。1061「道」、七本「直」。1062「者」、興本「更」。1063「只」、興本「品」。1064「是」、七本ナシ。1065「金」、興・七本「亦」。1066「自然」、興本ナシ。1067「答」、七本「道」。1068「法」、七本「去」。1069「是」、七本ナシ。1070「即」、興本ナシ。1071「忸敕」、興本「切敕」、七本「忸敕」。1072「貴」、興本「先」。1073「昌」、七本「唱」。

「道士遭難不通、遂使玄梯廣布、義網高<sup>1074</sup>張、可謂躡<sup>1075</sup>響風飛、應機河寫。」于<sup>1076</sup>時天子迴光、驚美其辯、舒顏解頤而笑、皇儲懿<sup>1077</sup>戚、左右重臣、並同歎重。黃巾之黨、結舌無報、博士祭酒、張喉愕視、束體轅門。惠<sup>1078</sup>日所以更明、法雲於茲還布。

尋於座中、下詔問乘。道士潘誕奏云、「悉達太子不能得佛、六年求道方得成佛、是則道能生佛、佛由道成、道是佛之父師、佛乃道之子弟、故佛經云、“求於<sup>1079</sup>無上正眞<sup>1080</sup>”、又云、“體解大<sup>1081</sup>道、發無上意”。外國語云“阿耨菩提”、晉翻之無上大道、若以此驗、道大佛小、於事可知。」

乘略答云、「震旦之與天竺、猶環海之比<sup>1082</sup>麟洲。聃乃周末<sup>1083</sup>始生、佛是周初前出、計其<sup>1084</sup>相去三世<sup>1085</sup>許王、論年所經、三百餘載、豈有照<sup>1086</sup>王世佛而退<sup>1087</sup>求敬王時道乎。勾<sup>1088</sup>虛驗實、足可知也。仲卿向敘道者、謂太上大<sup>1089</sup>道、先天地生、驚勃洞虛之中、焯曄玉清之上、是佛之師、不言周時之老聃也。且五帝之前、未聞有道、三王之季、始有聃名、漢景以來、方興道學。窮今討古、道者爲誰。案七籍九流經國之典、宗師周易、五運相生、既闢兩儀、陰陽是判、故曰一陰一陽之謂道、陰陽不測之謂神。天地於事可明、陰陽<sup>1090</sup>在生有驗、此理數然也。不云有道光<sup>1091</sup>天地生、道既莫從、何能生佛。故車<sup>1092</sup>胤云、“在己爲德、及物<sup>1093</sup>道”、殷仲文云、“德者德<sup>1094</sup>也、道者由也。言得<sup>1095</sup>孝在心、由之而成者也”、王充『論衡』云、“立身之謂德、成名之謂道”、道德者、爲若此矣、卿所言道寧異是乎。若異斯者、不足論評。豈有頭戴金冠、身披黃褐、鬢垂<sup>1096</sup>素髮、手把玉璋<sup>1097</sup>、別<sup>1098</sup>號天尊<sup>1099</sup>、居大羅之上、獨名大道、治<sup>1100</sup>玉京之中。山海之所未詳、經史之<sup>1101</sup>所不載、大羅同鳥有之說、玉京本亡是之<sup>1102</sup>談。」言畢下座。

1074「網高」、興本「細冥」。1075「躡」、興本「踊」。1076「寫于」、七本「瀉於」。1077「懿」、興本「讖」。1078「惠」、七本「慧」。1079「於」、七本ナシ。1080「眞」、七本「眞於」。1081「大」、興本「太」。1082「比」、興本「此」。1083「周末」、興本「用未」。1084「其」、興本「其其」。1085「世」、七本「三」。1086「昭」、七本「始」。1087「退」、興本「還」。1088「勾」、七本「句」。1089「大」、七本ナシ。1090「陽」、興本「陽陽」。1091「光」、興・七本「先」。1092「車」、興本「事」。1093「物」、七本「爲物」。1094「德」、興・七本「得」。1095「德」、七本「德」。1096「鬢垂」、興本「垂鬢」。1097「璋」、興本「障」。1098「別」、七本「荆」。1099「尊」、興・七本「師」。1100「治」、興本「法」。1101「之」、七本ナシ。1102「之」、興・七本ナシ。

乘爾時獨據詞鋒、舉朝屬<sup>1103</sup>自<sup>1104</sup>、致使異宗無何而退、可謂一席之揚扇、足爲萬代之舟航、可尚可師、立功立<sup>1105</sup>事。是知近假叨幸之力、遠庇護念之恩、道藉人弘、惟乘有矣。

乘姓劉氏、彭城<sup>1106</sup>人也。有陳之時、早經師訓聽『成實論』・『大涅槃經』、聲論之美、光華江表、及隋降陳國、望逸朝廷。煬帝昔在晉蕃、南鎮淮海、立四道場、追徵四遠、有名釋李、率來府供。乘以學優見舉、召入王庭、言論酬對、殊有風采<sup>1107</sup>。然其儀相魁岸、眉目<sup>1108</sup>高朗、貌體時事、不在思量、鋪詞摘藻、俊逸終<sup>1109</sup>古。自寓內推舉、聲辯之最、無越南朝。良以吳楚之文騷經陳、其翹楚典<sup>1110</sup>午南據、才學涌於波瀾、故<sup>1111</sup>得遊談玄路、天下稱焉。乘於斯伍、聲架尤甚。所以惠<sup>1112</sup>日道場、義門法將、躬衡而對雄伯、電舌而卷群英、乘於僧位、灼灼高出。

煬帝初在春坊、因從京邑談講、徒侶互<sup>1113</sup>顯英雄、論難之華、道俗同許。及成雒邑、召往東都、厚供重賜、月望相接。及<sup>1114</sup>往西平・且來<sup>1115</sup>・遼海・襄平、無不預從戎<sup>1116</sup>麾、對晤詞旨。京<sup>1117</sup>師西南建兩禪定、內獲舍利、擬瘞寺塔、終憂所重、特詔此行。輿<sup>1118</sup>自東都、西至京室、威儀福瑞、聽逸◇<sup>1119</sup>闡。及帝往江都、留乘洛邑、常<sup>1120</sup>事恒業、不擁素風。皇泰初元、彌崇敬重、內置道場、晨宵覲接。開明建始、鄭重相仍、齋講繼軫、法輪不絕。

及武德四年、蕩<sup>1121</sup>定東夏<sup>1122</sup>、入偽諸州、例留一寺。洛陽舊都、僧徒極盛、簡<sup>1123</sup>取名勝、配住同華。兩州仍舉勝達者五人、天策別供。乘以德高衆望、又處其員、在京住勝光寺。以勝光寺主僧珍法師、即隋煬國師智顛禪師之弟子也、以行解有聲、追住惠<sup>1124</sup>日、舊曾同寺、同氣相求。珍亦文帝素交、特<sup>1125</sup>隆恒准、所以奉<sup>1126</sup>國福供、並入勝光寺。乘達帝城、弘道無倦、

1103「屬」、七本「居」。1104「自」、興・七本「目」。1105「立」、七本「並」。1106「城」。興本ナシ。1107「采」、興本「來」。1108「目」、興本ナシ。1109「終」、七本「絡」。1110「典」、七本「曲」。1111「故」、興本ナシ。1112「惠」、七本「慧」。1113「互」、興本ナシ、七本「平」。1114「及」、興本「乃」。1115「來」、興・七本「末」。1116「戎」、興本「戒」。1117「京」、興本ナシ。1118「輿」、興・七本「粵」。1119「◇」、興本「邪」、七本「郊」。1120「常」、七本「帝」。1121「蕩」、興本「陽」。1122「夏」、興本「憂」、七本「復」。1123「簡」、興本「蘭」。1124「惠」、七本「慧」。1125「特」、興・七本「時」。1126「奉」、興本「泰」、七本「秦」。

福<sup>1127</sup>智二嚴、與時俱<sup>1128</sup>積。勝光北院、寶塔高華、堂宇綺<sup>1129</sup>飾、象設嚴麗、乃至畫繪瓌<sup>1130</sup>奇、冠絕區域<sup>1131</sup>、皆乘目准、心計巧<sup>1132</sup>類、神功不可思也。每有盛集、必事先驅、勇<sup>1133</sup>注若河傾、名很<sup>1134</sup>如摘錦、能使智人傾心清耳竚<sup>1135</sup>聆、逸辯不覺畧<sup>1136</sup>度形疲。自餘昏漠、但<sup>1137</sup>聞寫送<sup>1138</sup>輕快、莫知筌緒。然爲人慈育、以濟度爲心、言問所流、惟存贊悅、不及其過<sup>1139</sup>、斯亦季代之辯士也。年將八十、終於勝光寺、帝深悼惜、賻贈榮顯。

### 道士李仲卿等造論毀佛沙門法琳著『辯正論』以抗事第三

武德九年、清虛觀道士李仲卿・劉進喜猜忌佛法<sup>1140</sup>、恒加訕謗、與傅奕唇齒結構、誅窮釋宗。卿著『十異九迷論』、喜著『顯正論』、仍託傅氏上聞天聽。孟<sup>1141</sup>春下勅、京立三寺、僧限千人、餘並放還桑梓、有才用者八品處分。嚴勅行下、無敢抗言、五衆哀號<sup>1142</sup>、四俗驚歎。不久震方出帝、氣<sup>1143</sup>禔廓<sup>1144</sup>清、太宗素襲啓聞、薄究<sup>1145</sup>宗領<sup>1146</sup>、登即大赦一切休<sup>1147</sup>寧、僧還本寺、佛日還朗。

法琳前造『破邪論』、道俗具瞻、道士斯論猶未筆削、乃因劉李二論、造『辯正論』以擬之<sup>1148</sup>、一卷<sup>1149</sup>八卷、綸<sup>1150</sup>綜終古、立信當今、絕後光前、布露惟遠。潁川陳子良、才術縱橫、聲振寰宇<sup>1151</sup>、爲之住<sup>1152</sup>解、并序由來、文多不載。

### 四<sup>1153</sup>太宗下勅道先佛後僧等上諫事第四

貞觀十一年、駕巡洛邑。僧中先有與黃巾論者、聞之於上、乃下詔云、「老君垂範、義在清虛、釋迦貽則、理在因果。求其教也、汲引之跡殊途、

1127「福」、七本ナシ。1128「俱」、七本ナシ。1129「綺」、七本「河」。1130「瓌」、興本「壞」。1131「城」、興・七本「域」。1132「巧」、興本「功」。1133「勇」、七本「湧」。1134「很」、興本「狠」、七本「根」。1135「竚」、興本「紆」。1136「畧」、七本「晷」。1137「但」、興本「伯」。1138「送」、七本「逸」。1139「過」、興本「遇」。1140「法」、七本ナシ。1141「孟」、七本「蓋」。1142「號」、興・七本「端」。1143「氣」、興・七本「氣」。1144「廓」、興本「嚴」。1145「究」、興本「光」。1146「領」、興本「須」。1147「休」、興本「伏」。1148「之」、興本ナシ。1149「卷」、七本「寬」。1150「綸」、七本ナシ。1151「宇」、興本「寓」。1152「住」、興・七本「注」。1153「四」、興・七本ナシ。

求其宗也、弘益之風齊致。然大道之興、肇於遂古、源出無名之始、事高有形之外。邁兩儀而運行、包邁<sup>1154</sup>物而亭育、故能經邦<sup>1155</sup>致治、反樸還淳。至如佛教之興、基於西域<sup>1156</sup>、逮於後漢、方被中土<sup>1157</sup>、神變之理多方、報應之緣匪一。伯<sup>1158</sup>於近世、崇信滋深、人冀當年之福、家懼來生之禍<sup>1159</sup>、由是滯<sup>1160</sup>者、聞玄宗而大笑、好異者、望眞諦而爭歸、始波涌於閭里<sup>1161</sup>、終風靡<sup>1162</sup>於朝庭。遂使殊俗之典、鬱爲衆妙之先、諸華之教、翻居一乘之後。流遯忘返、於茲果<sup>1163</sup>代。今鼎祚克昌、既憑上德之慶、天下大宗<sup>1164</sup>、而賴無爲之功、宜有解張、闡茲玄化<sup>1165</sup>。自今已後、齋供行立、至於稱謂、道士・女道士、可在僧尼之前、庶敦反本、暢於九有、貽諸<sup>1166</sup>萬葉。」

時京邑僧徒各<sup>1167</sup>陳極諫、有司不納。沙門智實、後生後<sup>1168</sup>顓、內外兼明。携諸宿老、隨駕陳表、乃至開<sup>1169</sup>口、上其表略云、「僧某<sup>1170</sup>等言、某<sup>1171</sup>年迫乘乘<sup>1172</sup>楡、始逢太平之世、貌侵蒲柳、方值聖明之君。竊聞父有諍子、君有諍臣、某<sup>1173</sup>等雖預出家、仍在臣子之例、有犯無隱、敢不陳之。伏見詔書、國家本系、出自柱下、尊祖之風、形於前典<sup>1174</sup>。頒告天下、無德而稱、令道士等、在僧之上、奉以周旋、豈敢<sup>1175</sup>拒<sup>1176</sup>詔。尋老氏<sup>1177</sup>垂<sup>1178</sup>範、治國治家、所佩服章、亦無改異、不立<sup>1179</sup>館宇、不領門人、處柱下以全眞、隱龍德而養性。智者見之謂之智、愚者見之謂之愚、非魯司寇<sup>1180</sup>、莫之能識。今之道士、不遵<sup>1181</sup>其法、所著衣服、並是黃巾之餘、本非老君之裳。行三張之穢術、棄五千之妙門、反同張禹、漫行章句。從漢魏以來、常以鬼道化於浮俗、妄託老君之教、實是右<sup>1182</sup>道之苗。若位在僧尼之上、誠恐眞偽同流、有損國化。如不陳奏<sup>1183</sup>、何表臣子情。謹錄道經、及漢魏諸史<sup>1184</sup>

1154「邁」、興・七本「萬」。1155「邦」、興本「部」。1156「域」、興本「城」。1157「土」、興本「立」。1158「伯」、興・七本「泊」。1159「禍」、興本「福」。1160「滯」、興・七本「滯俗」。1161「里」、七本「星」。1162「靡」、興本「靡靡」。1163「果」、興・七本「累」。1164「宗」、興本「家」、七本「定」。1165「化」、興本「他」。1166「諸」、七本「謂」。1167「各」、興本「名」。1168「後」、七本「俊」。1169「開」、七本「關」。1170「某」、興本「其」。1171「某」、興本「其」。1172「乘乘」、興・七本「乘」。1173「某」、興・七本「其」。1174「典」、興・七本「曲」。1175「敢」、興本「聚」。1176「拒」、興・七本「樞」。1177「氏」、興・七本「君」。1178「垂」、興・七興・七本「乘」。1179「立」、興本「亦」。1180「寇」、七本「寇」。1181「遵士」、興本「遵士」、七本「遵」。1182「右」、興・七本「左」。1183「奏」、七本「秦」。1184「史」、興本「吏」。

佛先道後之事、如別所陳、伏願天慈、曲<sup>1185</sup>垂<sup>1186</sup>聽覽。」

中書侍郎岑文本宣勅語、「僧等此事、久以行訖、不伏者與杖。」諸大德寺成<sup>1187</sup>是暮年、形疲道路、飲氣而彌<sup>1188</sup>。智實勇身先出云、「不伏此理、萬刃之下、甘心伏罪。」遂杖之放還。

實少出家、住京師總持寺<sup>1189</sup>、沙彌時<sup>1190</sup>殊有高烈、有精神、善談論、有聲遠近、通『攝論』・『俱舍』。自受具已後、嚴策形心、衣鉢自隨、淨瓶常<sup>1191</sup>執、不入市、不乘騎。每有勝集、無不論難、鏗鏘高調、聲氣堅正。屬武德初、薛舉東逼、乃選翹勇僧千人、入於戎<sup>1192</sup>幕。有僧法雅、躬爲幕頭、京師鼎沸<sup>1193</sup>、僧徒無計。實於衆中大<sup>1194</sup>哭云、「雅是魔賊」、撮而毆<sup>1195</sup>。以事達太上、乃令還俗、因<sup>1196</sup>周行講肆、不染俗風。貞<sup>1197</sup>觀初元、雅有事、故下勅、令實出家、住於本<sup>1198</sup>寺。及尊黃老、令在僧冢<sup>1199</sup>、實携京邑大德、法常・慧淨・法琳等十餘人、隨頓上表、以死上請、不許之<sup>1200</sup>。實曰、「深知明詔、不可轉也、萬載之後、知僧中之有人焉。」後染疾<sup>1201</sup>、清齋如初、有勸非時食者、實曰、「余見死者多矣、臨終之時多陷戒律、豈重身輕聖、何名師資<sup>1202</sup>乎。」乃閉口不食、有問後事、答曰、「彎弓箭下、可選地邪<sup>1203</sup>。任<sup>1204</sup>後量處、省事爲要。」言已卒、寺秋三十餘矣。

### 五<sup>1205</sup>皇太子集三教學者詳論事第五

貞觀十三<sup>1206</sup>年、皇太子集諸官<sup>1207</sup>臣及三教學士、於弘文殿開明佛法。紀國寺惠<sup>1208</sup>淨法師預斯嘉會、有令召淨開『法華經』、奉旨登座、如常序胤。道士蔡晃講道論、好獨季<sup>1209</sup>時英。下令遣與抗論、晃即整容、問曰、「經稱“序品第一”、未審序第何分」。淨曰、「如來入定徵瑞、放光明<sup>1210</sup>現奇、動地雨花、假近開遠。爲破二之供<sup>1211</sup>基、作明一之由漸、故爲序也。第者爲

1185「曲」、興本「典」。1186「垂」、七本「乘」。1187「寺戒」、興・七本「等戒」。1188「彌」、興・七本「旋」。1189「寺」、七本ナシ。1190「之放……彌時」、十六字、興本ナシ。1191「常」、興本ナシ。1192「戎」、興本「戒」。1193「沸」、興本「佛」。1194「大」、興本「天」。1195「毆」、興・七本「毆之」。1196「因」、興本「困」。1197「貞」、興本「眞」。1198「本」、興本「大」。1199「冢」、興・七本「前」。1200「之」、七本ナシ。1201「疾」、七本「疲」。1202「資」、興本ナシ。1203「邪」、七本「耶」。1204「任」、興本ナシ。1205「五」、七本ナシ。1206「三」、興・七本「二」。1207「官」、興・七本「宮」。1208「惠」、七本「慧」。1209「季」、興本「秀」。1210「明」、興・七本ナシ。1211「供」、

居、一者爲始、序最居先、故稱第一。」晃曰、「第者弟也、爲弟則不得稱一、言一則不得稱弟、兩字矛盾、何以會通。」淨曰、「向不云乎、第者爲居、一者爲始。先生既不傾<sup>1212</sup>前宗、而謬陳後難、便是自難、何成難人。」晃曰、「言不領者、請爲重釋。」淨啓令曰、「昔有二人、一名蛇奴<sup>1213</sup>、道帚忘掃。一名身子、一聞千解。然則蛇<sup>1214</sup>奴再聞不悟、身子一唱千領。此非授道不明、但是納法者非。」晃曰、「法師言不出唇、何以可領。」淨曰、「菩薩說法、聲振十方、道士在坐、如迷如醉<sup>1215</sup>。豈直<sup>1216</sup>形骸聾瞽、其智抑亦有之。」晃曰、「野干說法、何由可聞。」淨曰、「天宮嚴衛、理絕獸蹤、道士魂迷、謂人爲畜。」

有國子祭酒孔穎達者、心有<sup>1217</sup>道堂<sup>1218</sup>、潛扇斯玷、曰、「承聞佛教無諍、法師何以構斯諍。」淨<sup>1219</sup>啓令曰、「如來在日、已有斯事。佛破外道、外道不道<sup>1220</sup>、反謂佛曰、「汝常自<sup>1221</sup>平等、今既以難破我、即是不平等。」佛爲通曰、「以我不平、破汝不平等<sup>1222</sup>、汝若得平、即我平也。」而今<sup>1223</sup>爾、以淨之諍、破彼之諍、彼得無諍、即淨無諍也。」於時、皇儲語祭酒曰、「君既勦<sup>1224</sup>說、眞爲道黨。」淨<sup>1225</sup>曰「常聞君子不黨、其知祭酒亦黨乎。」皇儲怡<sup>1226</sup>然大笑、合<sup>1227</sup>坐歡躍、令曰、「不徒法樂以至於斯。」

淨類入宮闈、抗論無擬、殿下目屬斯神銳<sup>1228</sup>也、尋下令曰、「紀國寺惠<sup>1229</sup>淨法師、名稱高遠、行業著聞、綱紀伽藍、必有弘益、請爲普光寺主、仍知本寺上座<sup>1230</sup>事。」復下書與普光及以淨所廣述、寺綱住持、惟人在寄等。

淨本趙郡房氏、即隋國子博士徽遠之猶子也。家氏<sup>1231</sup>儒宗、流略固其常習、而精爽清舉、卓朗文流略<sup>1232</sup>雄、機論標放、乘時搆采。少出家、遊學三河、不專師傳、於大小乘探<sup>1233</sup>蹟沈隱。

開皇末<sup>1234</sup>曆、觀化帝京、優柔教義、亟<sup>1235</sup>發光問。大業之紀、聲唱<sup>1236</sup>轉

興本「娑」、七本「洪」。1212「傾」、興·七本「領」。1213「蛇奴」、七本「地好」。1214「蛇」、七本「地」。1215「醉」、七本「解」。1216「直」、興本「眞」。1217「有」、興·七本「在」。1218「堂」、興·七本「黨」。1219「淨」、七本ナシ。1220「道」、興·七本「通」。1221「自」、七本「曰」。1222「平等」、興·七本「平」。1223「今」、興·七本「今亦」。1224「勦」、興本「對」。1225「淨」、七本「諍」。1226「怡」、七本「於」、金本「悟」。1227「合」、興本「含」。1228「銳」、興本「欽」。1229「惠」、七本「慧」。1230「座」、七本「坐」。1231「氏」、興·七本「代」。1232「流略」、興·七本ナシ。1233「探」、七本「採」。1234「末」、七本「未」。1235「亟」、七本「函」。1236「帝京……聲



高、預有才人、無不臨<sup>1237</sup>造。或決疑預<sup>1238</sup>、或示新文、讎校古今、商榷儒墨。問之不已、乃<sup>1239</sup>爲敘述。古來詩人、雅什<sup>1240</sup>雖多、罕登百二。群髦重其慧悟、服其品藻、遂勸續『詩英華』。自梁高齊宣<sup>1241</sup>以<sup>1242</sup>下遣<sup>1243</sup>于皇運、編爲十卷、吳王文學劉孝孫序之。并『俱舍』・『毘曇』・『大莊嚴』、咸爲著疏、合三十一卷。『法華』已下、行用諸要、亦續<sup>1244</sup>疏、令成誦之。住<sup>1245</sup>『經集論』、不能委述。

貞觀嗣<sup>1246</sup>寶、宰伯咸欽、僕射<sup>1247</sup>玄齡尤所敬重、每有勝集、引諸寮案、預聽法筵、日下當時、以爲榮觀之極也。然能事匪一、學罕兼通、淨之陳跡、可謂玄儒普<sup>1248</sup>驚。所以吹蕪易發、光華莫不由此。年逾縱心、風疾交集、然猶憑<sup>1249</sup>几談寫、對<sup>1250</sup>時賢。余<sup>1251</sup>曾問其疾苦、答云、「淨嘗疾甚、無計可投、承聞病是著因、固<sup>1252</sup>當<sup>1253</sup>捨著、遂召五衆一切教<sup>1254</sup>捨。夜覺有間、曉又重發、依前都<sup>1255</sup>捨、疾間亦然。今則七十有餘、生事極矣、安有爲命而捨則<sup>1256</sup>乎。念念死計、無情財<sup>1257</sup>事。昔人年至百歲、猶不體命行無常、今淨悟之、任時而已。」然其怒<sup>1258</sup>已謙光、接誘道俗、迎送禮遇、不爽恒倫。至於同法論難、知窮引通、不咎前人、共<sup>1259</sup>代即日<sup>1260</sup>、聞見自多、故不典書<sup>1261</sup>、其宗轄・其道化、履歷具見『續高僧傳』。

### 太子中舍『齊物論』并淨琳二法師抗拒<sup>1262</sup>事兩首第六

太子中舍辛誦、學該文史<sup>1263</sup>、誕傲自矜。心在道術、輕弄佛法、染翰著論、詳略釋宗。時有對<sup>1264</sup>者、誦必碎之於地、謂僧中之無人也<sup>1265</sup>。

惠<sup>1266</sup>淨法師不勝其侮、乃裁論以擬之曰、「披覽高論、博究精<sup>1267</sup>微、旨

唱」、十六字、興本ナシ。1237「臨」、興本「驗」。1238「預」、興本「豫」。1239「乃」、興本ナシ。1240「什」、七本「付」。1241「宣」、七本「寅」。1242「以」、七本「已」。1243「遣」、興・七本「逮」。1244「續」、興本「◇」。1245「住」、興本「經」、七本「注」。1246「嗣」、興本「酬」。1247「射」、興本「躬」。1248「普」、興・七本「並」。1249「憑」、興本「惠」。1250「對」、興・七本「敘對」。1251「余」、七本「途」。1252「固」、七本「因」。1253「云淨……固當」、十七字、興本ナシ。1254「教」、興・七本「都」。1255「都」、興・七本「教」。1256「則」、興本「財」。1257「財」、七本「則財」。1258「怒」、七本「怒」。1259「人共」、興本「人失」。1260「目」、興本「日」、七本「自」。1261「典書」、興・七本「曲盡」。1262「拒」、七本「樞」。1263「史」、興本「文」。1264「對」、七本「時」。1265「也」、興本ナシ。1266「惠」、七本「慧」。1267「精」、七本

瞻文華、驚心眩目。辯超<sup>1268</sup>炙輶、理跨聯理<sup>1269</sup>、幽難勃以縱橫、挾藻紛其駱驛。非夫哲士、誰其溢心。瞻彼上人、固難與對、輕持不敏、寧酬客<sup>1270</sup>難。

來論云、“一音衍說、各隨類解。蠕動衆生、皆有佛性。然則佛陀之與先覺、語從俗異。智惠<sup>1271</sup>之與般若、義本玄同<sup>1272</sup>。習知覺、若非勝因。念佛慧、豈登妙果。”答曰、“大哉、斯舉也。深固幽遠、理涉<sup>1273</sup>嫌疑、今當爲子略陳梗概。若乃門<sup>1274</sup>同答異、文郁郁<sup>1275</sup>於孔書、名一義乖、理明月<sup>1276</sup>於釋典。若名同不許義異、問一則不得答殊。此例既昇、彼並自沒、如有來<sup>1277</sup>喻、更爲提撕。夫以住無所住、萬善所以兼修。爲無不爲、一音所以齊應。豈止<sup>1278</sup>絕聖棄智、抱一守唯<sup>1279</sup>、冷然獨善、義無兼濟。較言優劣、其可倫棄<sup>1280</sup>。二宗既辯、百難斯滯。”

論云、“彼此各<sup>1281</sup>言、遂可分別。一音各解、乃翫空談。”答曰、“誠如來旨、只<sup>1282</sup>須分別。竊以道<sup>1283</sup>遙一也<sup>1284</sup>、鵬鷗不可齊乎九萬。榮枯同也、椿菌不可齊乎八千。而況燭火之倖日月、浸灌之方時雨、寧有分同潤、而遂均其曜澤哉。至若山高<sup>1285</sup>一其大小<sup>1286</sup>、彭殤<sup>1287</sup>均其壽夭、庭楹亂其橫豎、施厲<sup>1288</sup>混其妍媸<sup>1289</sup>。斯由相待不定、相奪可忘、莊生所以絕其有封、非於未始無物、斯則以余分別、政<sup>1290</sup>子分別、子<sup>1291</sup>亡分別、即余亡分別矣。君子劇談、幸無虛論、一音<sup>1292</sup>易失、駟馬難追、斯文誠矣、深<sup>1293</sup>可填<sup>1294</sup>哉。”

論云、“諸行無常、觸類緣起。復心有待、資氣涉求。然則我淨受於熏修、慧定成於繕剋。”答曰、“無常者、故吾去也。緣起者、新吾來也。故吾去矣、吾豈常乎。新吾來矣、吾豈斷<sup>1295</sup>乎。新故相傳、假熏修以成淨。美惡更代、非繕剋而難功。是則生滅破彼斷常、因果顯其中觀。斯實莊釋玄<sup>1296</sup>同、東

「釋」。1268「超」、七本ナシ。1269「理」、興・七本「環」。1270「客」、七本「容」。1271「惠」、七本「慧」。1272「同」、興本「月」。1273「涉」、興本「沙涉」。1274「門」、興・七本「問」。1275「郁」、七本ナシ。1276「月」、興・七本「明」。1277「來」、興・七本「未」。1278「止」、興本「上」。1279「唯」、興・七本「雌」。1280「棄」、興・七本「乎」。1281「各」、興・七本「名」。1282「只」、興・七本「亦」。1283「道」、興本「道」。1284「一也」、興本「也一」。1285「高」、興・七本「豪」。1286「大小」、興本「太小」。七・金本により改めた。1287「殤」、興本「陽」。1288「厲」、七本「囑」。1289「妍媸」、七本「研嗤」。1290「政」、興・七本「攻」。1291「子」、七本ナシ。1292「音」、興・七本「言」。1293「深」、七本「染」。1294「填」、興・七本「慎」。1295「斷」、七本「新」。

西理會、而吾子去彼取此、得無謬乎。”

論曰<sup>1297</sup>、續鳥截鶴、庸詎真如、草化蜂飛、何居弱喪。”答曰、“夫自然者、報分也。熏修者、業理也。報分已定、二鳥不羨於短長。業理資緣、兩蟲有待而飛化。然則事像<sup>1298</sup>易疑、沈冥難曉、幽求之士、淪或罔息。乃道圓四果、尚時<sup>1299</sup>衣珠、位隆十地、猶昏羅穀。聖賢固其若此、而況庸庸者乎。自非鑒鏡三明、雄飛七辯、安能妙契玄極、敷究幽微。貧道籍以受業家門、朋從是寄、八命<sup>1300</sup>能擇善、敢進芻蕘。如或<sup>1301</sup>鏗然、願詳金牒。”於

是辛代<sup>1302</sup>頂受斯文、頓裂邪網<sup>1303</sup>。

有<sup>1304</sup>遠聞舍人者、曾讀斯論、意所未詳、便以示沙門法琳、請更廣其義類。琳乃答曰、

「蒙示辛氏與淨法師『齊物論』、大約兩問、詞旨宏贍、理致幽絕、既開義府、物<sup>1305</sup>曜文鋒。舉佛性平等之談、引群生各解之說、陳彼此之兩難、辯玄同之一門<sup>1306</sup>。非夫契彼寰中、孰能振斯高論。美則美矣<sup>1307</sup>、疑頗疑<sup>1308</sup>焉。何者。尋上皇朝徹、始流先覺之名。法王應物、爰標佛陀之號。智慧者、蓋分別之小術。般若者、乃無知之大宗。分別緣起、所以強稱先覺、無知性家<sup>1309</sup>、於是假謂佛陀。分別即<sup>1310</sup>於外有數、無知則於內無心。於外有數、分別之見不忘。於內無心、誘引之功莫遺。甚秋毫<sup>1311</sup>之方臣嶽、喻<sup>1312</sup>尺鷃之比大鵬、不可同年而語矣。莊生云、吾亡是非、不亡彼此。庸詎然乎。所以小智不及大知<sup>1313</sup>、小年不及大年。惟彭祖之特聞、非衆人之所逮也。況三世之理不差、二諦之門可驗。是以<sup>1314</sup>聖<sup>1315</sup>立因果、凡夫有得聖之期。道稱自然、學者無成道之望。從微至著、憑繕剋而方研。修因趣果、籍熏修而始見。彼既知而故問、余亦述而略答。詳夫一音普被<sup>1316</sup>、弱喪由是同歸。四智廣覃、眞如以之自顯。自顯也者、惟微惟彰。同歸也者、孰來孰去。蓋

1296「玄」、七本「云」。1297「曰」、興・七本「云」。1298「象」、七本「像」。1299「時」、七本「昧」。1300「八命」、七本「人布」、興本「希」。1301「或」、七本「惑」。1302「代」、七本「氏」。1303「網」、七本「納」。1304「有」、七本「有李」。1305「物」、興・七本「特」。1306「門」、麗本「問」。1307「矣」、興本「美」、七本ナシ。1308「疑」、七本ナシ。1309「家」、興・七本「寂」。1310「即」、興本「既」。1311「毫」、興本「高」。1312「喻」、七本「踰」。1313「知」、興・七本「智」。1314「以」、興本ナシ。1315「聖」、七本「聖之」。1316「被」、七本「彼」。

知隨業受報、二鳥不嫌其短長。因濕致生、雲<sup>1317</sup>無擇於飛化。不存待與無待、明即待之、非待矣。請誠<sup>1318</sup>論之。

昔闕澤有言、“孔老法天、諸天法佛。洪範九疇、承天制用。上方十善、奉佛茲<sup>1319</sup>風。”若將孔老以匹聖尊、可謂子貢賢於仲尼、跛鼈陵於駿驥。欲觀渤澥、更保涓<sup>1320</sup>流、何異蔽目而視毛端、却行以求郢路、非所應也、非所應也。且王導・周顛、宰輔之冠蓋。王濛・謝尚、人倫之羽儀、次則王謐・郗超・劉璆<sup>1321</sup>・謝容等、普<sup>1322</sup>江左英彥。七十餘人、皆學綜九流、才映千古、咸言性靈真要、可以持身濟俗者、莫過於釋氏之教。及宗<sup>1323</sup>文帝與何尚之・王玄保等、亦有此談、如其“宇內並遵斯要、吾當坐<sup>1324</sup>致太平矣”。尚之又云、“十善暢、則人天興。五戒行、則鬼畜絕。其實濟世<sup>1325</sup>之玄範、豈造次而可論乎。”中舍學富才高、文華理切、秦懸一字、蜀掛<sup>1326</sup>千金、何以當茲奇麗也。不量管見、輕陳鄙俚、敢此有酬、以麻續組耳。」李舍人得琳重釋、渙<sup>1327</sup>神解、重疑頓消。

仍以斯論、廣於視聽、故得二文雙顯、各其志乎。

#### 太宗文皇帝問沙門法<sup>1328</sup>琳交報顯應事<sup>1329</sup>第七

貞觀十四年、先有黃巾西華觀秦<sup>1330</sup>世英者、挾方術以自媚、因程器於<sup>1331</sup>儲兩、素嫉釋宗。陰上法琳所造之論云、「此『辯正』但欲誹訕皇宗、罪當內<sup>1332</sup>上。」太宗聞之、便下勅沙汰僧尼、貌減年齒。使御史韋<sup>1333</sup>棕・將軍于伯億、并寺省州縣官人、日別鴻臚、檢閱情狀、見在<sup>1334</sup>衆僧、宜依遺教。仍追訪琳身、據法<sup>1335</sup>推勘。琳振椀<sup>1336</sup>奪<sup>1337</sup>發、追徵未及、即詣公庭、輕生是對、不懼性命、乃繫之縲紲。

下詔問曰、「周之宗盟、異姓爲後、尊祖重<sup>1338</sup>親、實由先古、何爲追逐其

1317「雲」、七本「兩蟲」。1318「誠」、興・七本「試」。1319「茲」、興・七本「慈」。1320「涓」、興本「絹」。1321「璆」、七本ナシ。1322「普」、興・七本「並」。1323「宗」、興・七本「宋」。1324「坐」、興本「幽」。1325「世」、七本「世也」。1326「掛」、七本「柱」。1327「煥」、興本「渙然」七本「濡然」。1328「法」、興本ナシ。1329「事」、興本ナシ。1330「秦」、七本「奉」。1331「於」、興・七本「宇」。1332「內」、興・七本「罔」。1333「韋」、興本「壽」。1334「在」、七本「有」。1335「法」、七本ナシ。1336「振椀」、興本「◇椀」。1337「奪」、興・七本「奮」。1338「重」、興本ナシ。

短、首鼠兩端、廣引形似之言、備陳不遜之喻、也毀我祖禰、謗黷<sup>1339</sup>我先人。如此要各<sup>1340</sup>、罪有不恕。」

琳答曰、「文王大聖、周公大賢、追遠慎終、昊天靡答。孝悌之至、通於神明。雖有宗廟、義不爭長。何者皇天無親、竟由輔德。古人黨理而不黨親、不自我後。雖親、有罪必罰、雖疎、有功必賞<sup>1341</sup>罰理當、故天下和平。老子習訓、道宗德教、加於百姓、恕<sup>1342</sup>己謙光、仁風形于四海。」又、「告<sup>1343</sup>師各<sup>1344</sup>佛、佛者覺一切人也。乾竺古皇、西昇逝矣、討尋老<sup>1345</sup>教、始末可追、日授中經、示誨弟子、言吾師者、善入泥洹、綿綿常在、吾今逝<sup>1346</sup>矣。今劉李所述、謗滅老氏<sup>1347</sup>之師、世莫能知、所以者<sup>1348</sup>茲『辯正論』有八卷、略對道士六十餘條、並陳史籍、前言實非謗毀家國。自後辨對三十餘列、具狀奏聞。」

勅云、「所著『辯正論・信毀交報篇』曰、“有念觀音者、臨刃不傷”、且放七日、令<sup>1349</sup>爾念之、試及形期、能無傷不。」琳外纏經梏、內迫形期、水火交懷、惟祈顯應。恰至限滿、忽神思彰勇、橫逸胸懷、頓亡死畏、立待追對。須臾勅至云、「今赦期已滿、即事如<sup>1350</sup>刑<sup>1351</sup>、有何所念、念有靈不。」琳答曰、「自隋季擾攘、四海佛<sup>1352</sup>騰、毒疫流行、干戈競起、興師伐、各擅兵威、臣佞君荒、不爲正治、遏絕王路、固執一隅。自皇王吊伐<sup>1353</sup>、載清海陸、期實觀音之力、咸資勢至之功。比德連衡、道齊上聖、救橫死於帝庭、免淫刑<sup>1354</sup>於都市。琳<sup>1355</sup>於七日已來、不念觀音、惟念陛下。」又勅詔書侍御、韋悰問琳、「有詔令<sup>1356</sup>念觀音、何因不念、乃云惟念陛下。」琳答、「伏承觀音聖鑿、塵刑<sup>1357</sup>六道、上天下地、皆爲師範。然大唐光宅四海九夷<sup>1358</sup>、奉職八表形清、君聖臣賢、不爲枉濫。陛下子育、恒品如經、即是觀音。既<sup>1359</sup>其靈鑒<sup>1360</sup>相符、所以惟念陛下。且琳著『辯正論』、爰與書史符同、

1339「黷」、七本「譴」。1340「各」、興・七本「名」。1341「賞」、興本「貴」。1342「恕」、興本ナシ。1343「告」、興・七本「吾」。1344「各」、興・七本「名」。1345「老」、興本「者」。1346「逝」、七本「遊」。1347「氏」、七本「代」。1348「者」、七本「著」。1349「令」、興本「念」。1350「如」、興・七本「加」。1351「刑」、興本「形」。1352「佛」、七本「沸」。1353「吊伐」、興本「帛代」。1354「刑」、興本「形」。1355「琳」、七本ナシ。1356「令」、興本「命」。1357「刑」、興・七本「形」。1358「夷」、興本「幾」。1359「既」、七本「形」。1360「鑒」、興本「監」。

一句參差、任從斧鉞。陛下若<sup>1361</sup>順忠順正、琳則不損一毛、陛下若刑監<sup>1362</sup>無辜<sup>1363</sup>、琳則有伏屍之痛。」以狀奏<sup>1364</sup>聞、遂不加罪。下勅徙於益部僧寺。

於時朝廷上下、知英構扇、御史韋<sup>1365</sup>棕、審英飾詐。疑陽陳俗、乃奏彈曰、「竊以大道鬱興、沖虛之跡<sup>1366</sup>斯闡。玄風既播、無爲之教實隆。未有身預黃冠、志同凡<sup>1367</sup>素者也。道士秦英、頗解醫方、薄閑咒禁、親戚寄命、羸疾投身。姦姪其妻、禽獸不若。情違正教、心類豺狼。逞貪競之懷、恣邪穢之行。家藏妻子、門有姬童、乘肥衣輕、出入衢路、揚眉奪<sup>1368</sup>袂、無憚憲章。健羨未忘、親<sup>1369</sup>衡<sup>1370</sup>在慮。斯原不殄、至教或虧、請置嚴科、以懲姪侈。」有勅追入大理、竟以狂狷<sup>1371</sup>被誅、公私同知<sup>1372</sup>賊惡、怪其死晚。

#### 文帝幸弘福寺立願重施敘佛道先後第八

貞觀十五年五月十四日、太宗文帝躬幸弘福寺、於時僧衆<sup>1373</sup>並出、虞候遠闕<sup>1374</sup>。勅召大德五人、在<sup>1375</sup>寺內堂中坐訖、具敘立寺所由。意存<sup>1376</sup>太穆皇后、哀淚橫流、僧並垂淚。

乃手製願文曰、「皇帝菩薩戒弟子、稽首和南十方諸佛菩薩・聖僧・天龍大衆。若夫至理凝寂、道絕名言、大慈方便、隨機攝誘。濟苦海以智舟、朗重昏以慧日。開曉度脫、不可思議。弟子夙<sup>1377</sup>罹愆臺、早嬰偏<sup>1378</sup>罰。追惟撫育之恩、每念慈顏之遠、泣西<sup>1379</sup>崩心、永無逮及。號天暨地、何所厝身。歲月不居、炎涼亟<sup>1380</sup>改、荼毒之痛、在乎粉骨。敬養已絕、萬<sup>1381</sup>恨不追、冤<sup>1382</sup>酷之深、百身何贖。惟以舟<sup>1383</sup>誠、歸依三寶、謹於弘福道場奉施齋供、并施施財<sup>1384</sup>、以充檀捨<sup>1385</sup>、用斯功德、奉爲先靈。願心悟無爲、神遷妙喜、策紺馬以入香城、躡金階而昇寶殿、遊玩法樂、逍遙淨土、永蔭法雲、常喰甘露、疾證菩提、早登正覺。六道四生、並同斯願。」

1361「陛下若」、興本ナシ。1362「監」、七本「濫」。1363「辜」、興本「事」。1364「奏」、興本「奉」。1365「韋」、興本「壽」。1366「跡」、興本ナシ。1367「凡」、七本「九」。1368「奪」、興・七本「奮」。1369「親」、興・七本「觀」。1370「衡」、興・七本「微」。1371「狷」、七本「損」。1372「知」、七本「和」。1373「衆」、七本「眾生」。1374「闕」、七本「關」。1375「在」、興本「有」。1376「存」、七本「在」。1377「夙」、七本「風」。1378「偏」、七本ナシ。1379「西」、興・七本「血」。1380「亟」、七本「函」。1381「萬」、七本「方」。1382「冤」、興本「究」。1383「舟」、七本「丹」。1384「施財」、興本「施則」。1385「捨」、七本「誓」。

帝謂僧曰、「比以老君是朕先宗、尊祖重親、有生之本、故令<sup>1386</sup>在前、師等應恨恨。」寺主道懿奉對、「陛下尊重祖宗、使天下成式、僧等荷國恩重<sup>1387</sup>、安心行道。詔<sup>1388</sup>旨行下、咸大歡喜、豈敢恨恨。」

帝曰、「朕以先宗在前、可即大於佛也。自有國已來、何處別造道觀。凡有功德、並歸寺家、國內戰場之始、無不一心歸命於佛。今天下大定、戰場之地、並置<sup>1389</sup>佛宇、乃至本宅先妣、惟置佛寺。朕敬有處、所以盡命歸依、師等宜悉朕懷。彼道士者、止是師習先宗、故位在前。今李家據國、李老在前、若釋家治化、則釋門居上、可不平也。」

僧等起謝、帝曰、「坐。此是弟子意耳<sup>1390</sup>、不述不知。天時大熱、房宇窄狹、若爲居住、今有施物、可造後房、使僧等竟<sup>1391</sup>展行道。」餘言多不載、事訖還宮。

#### 太宗下勅以道士『三皇經』不足傳授命<sup>1392</sup>焚除事第九

貞觀二十二年十月、有吉州上表云、「有事天尊者、行三皇齋法。依檢其經、乃云“欲爲天子、欲爲皇后者、可讀此經。”據此言及國家、檢田令云、“道士通三皇者、給地三十畝<sup>1393</sup>。”檢公式令、“諸有令式不便者、奏聞此三皇經。”」文言有異、具錄以聞。

有勅令百官議定、「依追道士張慧<sup>1394</sup>元、問有此言不<sup>1395</sup>、惠<sup>1396</sup>元答云、“此處『三皇經』並無此言、不知遠州何因有此。然爲之一字、聲有平去。若平聲讀之、誠如所奏、若去聲讀之、此乃爲國、於理不<sup>1397</sup>妨。”臣等以爲惠元所說、不乖觀<sup>1398</sup>善。然此經中、天文大字・符圖等、不入家籍<sup>1399</sup>、請除、餘者請留。」吏部楊纂等議云、「依讀『三皇經』、全與老子『道德經』義類不同、並不可留、以惑於後。」

勅旨、「其『三皇經』並收取焚之、其道士通『道德經』者給地三十畝。」仍著令。於時、省司下諸州收『三皇經』、並聚於尚書禮部廳前、于尚書

1386「令」、興本「命」。1387「恩重」、七本「重恩」。1388「詔」、興本ナシ。1389「置」、興本「景」。1390「耳」、興本「可」。1391「竟」、興・七本「寬」。1392「命」、興・七本「令」。1393「畝」、興本「就」。1394「慧」、興・七本「惠」。1395「不」、興本ナシ。1396「惠」、興本「慧」。1397「不」、七本「無」。1398「觀」、興・七本「勸」。1399「家籍」、麗本「篆籀」。

以火焚蕪、一時灰燼。

昔宋時鮑靜初造『三皇』被誅、今仍宗尚、改「三皇」爲「三洞」、忘<sup>1400</sup>立天<sup>1401</sup>大字、惑誤昏俗、其詐顯然、迷<sup>1402</sup>者不覺。今遇大唐聖帝、體其偽妄、故此焚除。近如大業末年、京師五通觀道士輔慧<sup>1403</sup>詳、三年不言、改『涅槃』爲『長樂經』、將欲入山巖中。於時條制不許出城門、候見其內著黃衣、又獲新經、執送留守。及<sup>1404</sup>至勘校、改經事實、尚書衛文昇、以狀奏聞、於金光門外戮之。耳目生靈、之所固<sup>1405</sup>委、其覺者如此、不覺者有之。然彼輒爾制經、寫於藏篋、無人檢勘、誰辯偽真<sup>1406</sup>。且所造者、文義淺俗、濫引佛經、讀者無味、不足觀採。至如『南華』、幽求固是、命家之作、不可及。

#### 文<sup>1407</sup>帝詔令樊法師翻老子爲梵文第十

貞觀二十一年、西域使李義表還、奏稱、東天竺童子王所、未有佛法、外道宗盛<sup>1408</sup>。臣已告云<sup>1409</sup>、「脂那大國、未有佛教已前、舊有得道人說經、在俗流布。但此文不來、若得文<sup>1410</sup>者、必當信奉。」彼王言、「卿還本國、譯爲梵言、我欲見之。必道越此徒、傳通不曉。」登即下勅、令樊法師與諸道士、對共譯出。

於時道士蔡英・成英二人李宗之望、自餘鋒穎三十餘人、並集五通觀、日別參議、詳覈『道德』。樊乃句句披<sup>1411</sup>析、窮其義類、得其旨理、乃爲譯之。諸道士等並引用佛經、『中』・『百』等論、以通玄極。

樊曰、「佛教道教、理致天乖、安用佛理通明道義。」如是言議往還、累日窮勘。出語濩落、的據無從。或誦四諦四果、或誦無得無待、名聲雲誦、寶聖俱靈。樊<sup>1412</sup>曰、「諸先生何事遊言、無可<sup>1413</sup>尋究。向說四諦四果、道經不明、何因喪本、虛談『老子』。且據四諦一門、門有多義、義理難曉、作論<sup>1414</sup>辯之。佛教如是、不可陷倫。向問四諦、但<sup>1415</sup>答其名、諦別廣義、尋

1400「忘」、興・七本「妄」。1401「天」、興本「天文」。1402「迷」、七本「述」。1403「慧」、興本「慧」。1404「及」、興本「乃」。1405「固」、興・七本「同」。1406「眞」、七本「直」。1407「文」、七本「又」。1408「盛」、興本「成」。1409「云」、七本「去」。1410「文」、七本「聞」。1411「披」、興本「被」。1412「樊」、興本「然」。1413「可」、興本「所」。1414「論」、七本「論義」。1415「但」、七本「俱」。



問莫識、如何以此欲相抗乎。道經明道、但是一義、又無別論用以通辯、不得引佛義宗、用解『老子』、斯理定也。」晃遂歸情曰、「自昔相傳、祖承佛義、所以『維摩』『三論』見素字<sup>1416</sup>宗、致令吐言命旨、無非斯理。且道義玄通、洗情爲本、在文雖異、厥趣攸<sup>1417</sup>同、故引解之、理例無爽。如僧肇著論、盛引老莊、成誦在心、由來不怪。佛言似道、如何不思。」奘曰、「佛教初開、深經尚雍<sup>1418</sup>、老談玄理、微附虛懷、盡照落筌、滯而未解。故『肇論』序<sup>1419</sup>致、聯類喻之、非謂比擬、便同涯極。今經正論、繁富人謀、各有司南、兩不諧會。然老之『道德』、文止<sup>1420</sup>五千、無論解之。但有群注<sup>1421</sup>、自餘千卷、事雜符圖、蓋張葛之聃<sup>1422</sup>附、非老君之氣叶。又『道德』兩卷、詞旨沉深、漢景重之、誠不虛及。至如何晏・王弼・嚴道・鍾會・顧歡・蕭繹・盧景裕・韋處玄之流、數十餘家、注解老經、指歸非一。皆推涉<sup>1423</sup>俗理、莫引佛言、如何棄置舊縱<sup>1424</sup>、越津釋府。將非探蹟過度、失混沌之竅<sup>1425</sup>耶。」

於是諸徒無言以對、遂即染翰綴文。厥初云道、此乃人言、梵云未加、可以翻度。道士等一時舉袂曰、「道翻末伽、失於古譯。古稱菩提、此謂<sup>1426</sup>爲道、未聞末伽以爲道也。」奘曰<sup>1427</sup>、「今翻『道德』、奉勅不輕、須覈方言、乃名傳旨。菩提言覺、末伽言道、唐梵音義、確爾難乖、豈得浪翻、冒<sup>1428</sup>罔天聽。」道士成英曰、「佛陀言覺、菩提言道、由來盛談、道俗<sup>1429</sup>委、今翻末伽、何得非妄。」奘曰、「傳聞濫眞、良談匪惑。未達梵言、故存恒習。佛陀西天音、唐言覺者、菩提天語、人言爲覺。此則人法<sup>1430</sup>兩異、聲眾<sup>1431</sup>全乖。末伽爲道、通或齊<sup>1432</sup>解、如不見信、謂是委<sup>1433</sup>談。請以此語問彼西人、足所行道、彼名何物、非末伽者、余是罪人。非惟罔<sup>1434</sup>上、當時乃取笑天下。」自此衆鋒一時潛退、便譯書<sup>1435</sup>文。

1416「字」、興・七本「學」。1417「攸」、興本「彼」。1418「雍」、興・七本「壅」。1419「序」、七本ナシ。1420「止」、興本「亦止」、七本「只止」。1421「注」、興本「經」。1422「聃」、興・七本「肯」。1423「涉」、興本「沙」。1424「縱」、興・七本「蹤」。1425「之竅」、興本「敷」。1426「謂」、七本ナシ。1427「曰」、興本「且」。1428「冒」、興本「白月」、七本「四月」。1429「俗」、七本「俗同」。1430「法」、興本「結」。1431「眾」、興・七本「采」。1432「或齊」、興本「或隣」、七本「國齊」。1433「委」、興・七本「妄」。1434「惟罔」、七本「唯罔」。1435「書」、興・七本「盡」。

河上序胤、闕而不出。成英曰、「老經幽祕、聞必具儀、非夫序胤、何以開悟。請爲翻度、惠彼邊戎。」契曰、「觀老存身存國之文、文<sup>1436</sup>詞具矣。叩齒咽液之序、序實驚人。同巫覡之淫吐<sup>1437</sup>、等禽獸之淺術、將恐西關<sup>1438</sup>異國、有愧卿邦。」英等不愜其情、以事陳諸朝宰、中書馬<sup>1439</sup>周曰、「西域<sup>1440</sup>有道如李莊不。」答曰、「彼土尚、九十六家、並厭形骸爲桎梏、指神我爲聖本。莫不淪滯、情<sup>1441</sup>有致使、不拔我根。故其陶練<sup>1442</sup>精靈、不能出俗、上極非想、終墜無間。至如順俗四大之術、冥物<sup>1443</sup>六諦之宗、東夏老莊所未言也。若翻老序、彼必以爲笑林。契告忠誠、如何不相體悉。」當時中書門下同僚、咸然此述、遂<sup>1444</sup>不翻之。

契姓陳氏、潁川人也。後葉居於兩河、以慧解馳名。周行嶽<sup>1445</sup>瀆、承西梵學富、誓欲博求。以貞觀初入關、住莊嚴寺、學梵書語、不久並通。上表西行、有司不許。因間行、遠<sup>1446</sup>詣天竺、三年方達。所在王臣高勝、無不重之。經十餘年、備獲經論、旋於京邑。天子降禮、賜以優言。貞觀末年、敬重尤甚。常處內禁、行往畢隨。永徽已來、不爽前敬。常以翻譯而爲命家、今在北山玉華宮寺、領徒翻經、勤<sup>1447</sup>注不絕。然其高行不可具陳、別有大傳、廣文如彼。

自永徽嗣曆<sup>1448</sup>、屢發深衷、降意佛宗、徵延論道。覽前王之逸軌、追賢達之<sup>1449</sup>事。宗<sup>1450</sup>魏兩朝、咸興談述。周隋接運、俱暢論衡。然則晉氏南遷<sup>1451</sup>、以釋宗爲命族。魏朝北有、齊縉黃而等駕。由是江表、談玄規猷。自隔關河語極、淄澠一亂、所以<sup>1452</sup>屢有揚激、教義殊途。雖事拒輪、終歸陷網。雲泥路絕、聲采罕追。人代致混、論辯韜隱。顧斯陳迹<sup>1453</sup>、不逸懷悼。致黃巾、被責緘默。當時彼出<sup>1454</sup>論場、昌言我勝、未登席者、隨言信之。輒以所聞、敘斯實錄。事連宸極、故絕浮詞。

1436「文」、七本ナシ。1437「淫吐」、興本「吐淫」、七本「姪哇」。1438「關」、興本「開」。1439「馬」、七本ナシ。1440「域」、興本ナシ。1441「情」、七本「清」。1442「練」、興本「陳」。1443「物」、興・七本「初」。1444「遂」、七本ナシ。1445「嶽」、興本「兵」。1446「遠」、興本「迷」。1447「勤」、興本「對」。1448「嗣曆」、興本「副廣」。1449「之」、興・七本「之行」。1450「宗」、七本「宋」。1451「遷」、興・七本「還」。1452「以」、七本ナシ。1453「跡」、七本「亦」。1454「出」、七本「上」。

十一<sup>1455</sup>今上佛道二宗入内詳述名理第十一

顯慶三年四月下勅、追僧及道士各七人、入内論義。時會隱法師立五蘊義、神泰法師立九斷知義。道士黃頤<sup>1456</sup>・李榮・黃壽等、次第論義。並以莫識名體、茫如夢海、雖事往返、寥落無歸。

次下勅遣道士豎義、李榮立道生萬物義。大慈恩僧慧立登<sup>1457</sup>論座。先敘云、「皇帝皇后、神功聖德、遠夷順化、宇内肅清。豈直<sup>1458</sup>掩映軒義、亦乃罕寵<sup>1459</sup>周漢。」又嘆仰佛化、截濟黎元、文<sup>1460</sup>多不載。

便問榮曰、「先生立“道生萬物”、未知此道爲是有知、爲是無知。」答、「道經云“人法地、地法天、天<sup>1461</sup>法道”、既爲天地之法、豈曰無知。」難曰、「向敘道爲萬物之母、今度萬物不由道生、何者。若使道是有知、則惟生於善、何故只<sup>1462</sup>生於惡。據此善惡昇沈、叢雜總生、則無知矣。如不通悟、請廣其類。至如人君未開闢之時、何不早生今日。聖主子育<sup>1463</sup>黔黎、與之榮樂、乃生誕共工・蚩尤・桀<sup>1464</sup>紂・幽厲之徒、殘酷群生、授以塗炭。人臣之中、何不惟生稷契・憂<sup>1465</sup>龍之輩、而復生飛廉・惡來、斯尚新王之侶、諛諂其君、令邦<sup>1466</sup>國危亂哉。羽族之中、何不惟生鸞鳳善鳥、而復生梟鏡禽乎。毛群之中、何不惟生騏驎・驕驢、而復生豺狼豪蝟乎。草木之中、何不惟生松柏・梓桂・蕙蓀・蘭菊、而復生楠櫨・檉棘・葶艾・蒺藜乎。既而混生<sup>1467</sup>萬物、不鑄善惡、則道是無知、不能生物。何得云天地取法、而爲萬物之宗始乎。據我如來大聖、窮理盡性之教也、天地萬物皆是衆生業力<sup>1468</sup>所感。善業多者、則瑠璃爲地、黃金界道、瓊枝蔭陌、玉葉垂<sup>1469</sup>空、甘露充糧、綺衣爲座。惡業多者、則砂壤爲土、瓦礫爲衢、稗飯充虛、麻衣被體、泥行雨宿、霜穫暑耘。日夜驅馳、以供公府。皆自業自作、無人使之。吾<sup>1470</sup>子心愚不識、橫言道生。道實不生、一何可愍。」李榮得此一徵、愕然不知何對。立時乘機拂弄、榮亦杜口默然、於是<sup>1471</sup>赧然下座。

次<sup>1472</sup>黃壽登座、豎老子名義、會隱法師將事整容、與其抗論。夫唯論難

1455「十一」、興・七本ナシ。1456「頤」、七本「歸」。1457「登」、七本ナシ。1458「直」、七本「眞」。1459「罕寵」、興・七本「牢籠」。1460「文」、七本ナシ。1461「天」、七本ナシ。1462「只」、興・七本「亦」。1463「育」、興本「宐」。1464「桀」、興・七本「禁」。1465「憂」、興本「夔」。1466「令邦」、興本「念邪」。1467「生」、興本ナシ。1468「力」、興本「方」。1469「垂」、七本ナシ。1470「吾」、興本「五」。1471「是」、興本「是故」。

之體、褒貶爲先、恐難道名、有所觸誤、即奏、「黃壽身預黃冠、不知忌諱。城狐社鼠、徒事依憑。國家遠承龍德之後、陛下即老君子孫。豈有對人子孫、公<sup>1473</sup>談祖禰之名字。至如五千文內、大有好義、不能標列、而說聖人之名。計罪論形<sup>1474</sup>、黃壽死有餘及。」於時蒙勅云、「是更堅別義。」壽因此挫銳、流汗失圖、難事言對、次序乖越。遞相擊論、遂至逼暝<sup>1475</sup>。僧等見將燭來、便起辭退。

勅曰、「向觀師等兩家義論、宗旨未甚分明。」立遂奏云、「向來兩家議論、宗旨不明、誠如聖旨。何者。衆僧豎義、道士不識其源。既恥無言、遂鐘闌<sup>1476</sup>漫語。如僧豎<sup>1477</sup>五蘊義、黃隲以蔭名來難、且蔭以覆蓋爲宗、蘊以積聚爲義。如色有二十一聚、在色名之下。識有八種聚、在一名之下、舉統以收、稱爲蘊義。若<sup>1478</sup>以蔭名來難、義理全乖。又神泰豎九斷知義、道士生來未聞此名。雖上論座、不知發問之處、無以遮羞、遂浪作餘語。眞可謂欲適南越、而總轡北冥。馬足雖行朔方、終非趣越之步。李榮浪語、亦復如是。由是宗旨不明、塵黷聖聽、過在道士。然佛法大<sup>1479</sup>宗、因緣爲義、故論云“未曾有一法不從因緣生”、且如眼觀殿柱、須具五緣、一識心不亂、二眼不壞、三藉以光明、四有境現前、五中間無障。必具此緣、方得見柱。若使曦<sup>1480</sup>光已沒、龍燭未明、縱<sup>1481</sup>有朱楹、何由可見。又如穀子、陽和之月、愚<sup>1482</sup>水土人功、則能生芽。夏盛甕裏、冬委地中、緣不具故、畢竟不生。人亦如是、內<sup>1483</sup>則業惑爲因、外則父母爲緣、身方得生。父母乖各、終不能生。如是禽魚鳥獸、萬物皆爾、從因緣生。故經云、“深入緣起、斷諸邪見、有無二邊、無復餘習。”以佛智慧、窮法實相、是故號佛爲無等覺、爲天人師。外道之輩、則不如是、皆悉邪網覆心、倒針刺眼。或言、諸<sup>1484</sup>法自然而生、即是此方莊老之義。或言從自在天生、或言韋紐天生、或言無因、或言宿作、此並西方異道之計也。皆不知法本、不識因緣、信意放<sup>1485</sup>言、桂<sup>1486</sup>誤蒙俗、致使天人惑其飾詐。」

1472「次」、七本「次道士」。1473「子孫公」、興本「子公孫」、七本「之孫公」。1474「形」、七本「刑」。1475「暝」、七本「曠」。1476「闌」、七本「聞」。1477「豎」、七本「賢」。1478「若」、七本「名」。1479「大」、七本「太」。1480「曦」、七本「曦了」。1481「縱」、興・七本「從」。1482「愚」、興・七本「遇」。1483「內」、興本ナシ。1484「諸」、興・七本ナシ。1485「放」、興本「故」。1486「桂」、興本「註」。

又對聖上說三性義、一遍計性、二依他起性<sup>1487</sup>、三圓成實性。外道所立、遍計性收、事等空花、由來非有、廣解三性、言多不具。

自上起來、經過食頃、僧及道士陪侍、臣僚兩行立聽。時既夜久、息言奉辭、勅云<sup>1488</sup>「好去」、各還宿所。經停少時、勅<sup>1489</sup>使出云「語師等因緣義大好、何不早論。」于時三藏已下、莫不欣慶。斯則無勞廣略、碎蕩高旗、不藉軍威<sup>1490</sup>、堅城屠陷、見之今日矣。于時道士不識蘊蔭斷知等<sup>1491</sup>義、莫允帝情。散席之後、承內給事王德云、「勅語道士等何不學佛經。」因斯以言釋李宗人、學業優劣、辯給通塞、實錄如前、貧富之懷、亦具瞻矣。

十二<sup>1492</sup>上以西明寺成功德圓滿佛僧創<sup>1493</sup>入榮泰所<sup>1494</sup>期各口<sup>1495</sup>僧道士入內殿躬御論場觀其義理事第十二

顯慶三年六月十二日、西明寺成、城郭道俗雲合、幢蓋嚴華。明辰良日、將欲入寺。簾鼓振地、香華亂空。自北城之達南寺十餘里中、街衢闐闐。至十三日清旦、帝御安福門上、群公<sup>1496</sup>僚佐、備列于下。田<sup>1497</sup>出繡像・長旛、高廣驚於視聽。從於大街、沿路南往、普皆御覽、事訖方還。

尋即勅、追僧・道士各七人入。上幸百福殿、內官引僧在東、道士在西、俱時上殿。帝曰、「佛道二教、同歸一善。然則梵境虛宗、爲於無爲。玄門深奧、德於不德。師等栖誠碧落、學照古今、志契寶坊、業光空有、可共談名理、以相啓沃。」慧立奉對、「陛下叡性、自天欽明纂曆、九功包於虞夏、七德冠於嬴劉、遂使天平地成、遐安邇肅。既而寓內無事、垂慮玄門、爰詔緇黃、考覈名理。但僧道士等、輕生<sup>1498</sup>多幸、濫沐恩光、遂得屢入金門、頻昇玉砌。所恐聞見寡狹、詞韻庸疎、虛煩聽覽、不足觀採、伏僧<sup>1499</sup>悚汗。」

降勅云、「好、師等依位坐。」又勅云、「師可一人登座開題。」時清都觀道士張惠元奏云、「周之宗盟、異姓爲後。陛下宗承柱下、今日豎義、道士不得不先。又夷夏不同、客主位別、望請道士於先上座。」帝沈默久之。立遂

1487「性」、七本ナシ。1488「云」、七本「言」。1489「奉辭……時勅」、十五字、興本ナシ。1490「威」、七本ナシ。1491「等」、七本ナシ。1492「十二」、興・七本ナシ。1493「創」、興本ナシ。1494「所」、興本ナシ。1495「各口」、興・七本「又召」。1496「公」、興本ナシ。1497「田」、興・七本「内」。1498「生」、七本ナシ。1499「僧」、七本「增」。

奏曰、「竊尋諸佛如來、德高衆聖、道冠人天。爲三千大千之獨尊、作百億四洲之慈父、引迷拯溺、惟佛一人。此地未出娑婆、即是釋迦之兆域、惠元何得濫言客主、妄定<sup>1500</sup>華夷。伏惟陛下、屈初地之尊、光臨瞻部、受佛付囑、顯揚聖地。薰慈燈於暗室、浮慧舸於苦流<sup>1501</sup>。書云“皇天無親、惟德是輔”、蓋此之謂。惠元邪說、未可爲依。」勅云、「好、更遞上仍僧爲先。」

爾時會隱法師昇座、豎四無畏義。道士七人、各陳難。無足敘之、事在別傳。

次道士李榮、開六洞義、擬佛法六通爲言<sup>1502</sup>。立昇論席、問榮六洞名<sup>1503</sup>數。答訖、徵云、「夫言洞者、豈不於物通達、無壅義耶。」答、「是。」難曰、「若使於物通達無擁、名洞未委、老君於物得洞以不。」答云、「是<sup>1504</sup>、老君上聖、何得非洞。」徵曰、「若使老君於物<sup>1505</sup>通洞者、何故道經云“天下大患、莫若有身、使我無身、吾何患也”」。據此、則老君於身尚礙、何能洞於萬物。」榮云、「師緩莫過陵轢。榮在蜀日、已聞師名、不謂今在天庭、得親談論。共師俱是出家人、莫苦事非駁。」立報曰、「觀先生此語、似索狐息。古人云“黃塵下不許借稍”、乍可出外別敘暄涼、此席終須定其邪正。向云與立同是出家、檢形計事、焉<sup>1506</sup>可同耶。先生鬢髮不剪、禪袴未除。手把桃符、腰懸赤袋。巡門厭鬼、歷巷摩兒。本不異淫祀邪巫、豈得同我清虛釋子。」李榮大<sup>1507</sup>怒云、「汝若以翦<sup>1508</sup>髮爲好、何不剔眉。」立曰<sup>1509</sup>、「何爲剔眉。」榮曰、「一種毛故。」立曰、「一種是毛、剔髮亦剔眉。卿亦一種是毛、何爲角髮不角髭。」榮遂杜默無對。立詞<sup>1510</sup>曰、「昔平津於十難、李榮死於一言。論德立謝、古人論功、無慚往哲。」於是即避席。主上解頤<sup>1511</sup>大笑、次後諸僧與論。時熱、坐<sup>1512</sup>久恐榮<sup>1513</sup>、且辭主上。勅云、「好。」遂散還寺。

觀<sup>1514</sup>三藏玄奘在西明度僧、不在論席。十四日平旦、勅使報奘、「七僧入內與道士論議、五人論道大勝、幽州最好<sup>1515</sup>。兩人雖未論義<sup>1516</sup>、亦應例是勝也。」

1500「定」、興本「空」。1501「流」、興本「沉」、七本「惱」。1502「言」、金本「玄」。1503「名」、七本「各」。1504「是」、興・七本ナシ。1505「物」、七本ナシ。1506「焉」、七本「馬」。1507「大」、七本「本」。1508「剪」、七本「前」。1509「曰」、七本ナシ。1510「詞」、興・七本「調」。1511「頤」、七本「顏」。1512「坐」、七本ナシ。1513「榮」、興本「勞」。1514「觀」、七本ナシ。1515「好」、七本ナシ。1516「義」、七本「議」。

立姓趙氏、其先爲益之後、益孫造、父有功於周穆王、封於趙城、遂因氏焉。趙衰・趙盾即其遠祖、隨宦東西、故爲北地之新平人也。祖禮周太中大夫平東將軍、上柱國龍門侯<sup>1517</sup>。父毅隨祕書郎司隸刺史、崇儒好道、撰『文帝起居注』二十五卷、『大業略概』三卷、並祕閣。董狐眞<sup>1518</sup>筆、公有之矣、立即司隸第三子也<sup>1519</sup>。

幼鍾荼毒、有叔照法師、攜接慈育、年十五、貞觀三年出家、住幽州昭仁寺、推<sup>1520</sup>以公貫、無由遠學。生知特達、不染俗流、志仰前良、謀猷慧解。迺假借經史、內外披尋、自強不息、通鏡今古。一坐北荒、二十餘載、聲榮藉甚、曜逸京阜卓<sup>1521</sup>。慈恩譯經、通訪巖穴、以文辯騰譽<sup>1522</sup>、致此徵延。永徽元年、舉以申省、依迫參譯。既染芝蘭、芬郁逾美。自到帝京、頻登闕輦、契<sup>1523</sup>齊行道、率先總至。所以道<sup>1524</sup>達功業、咸立之能、光輝論道、咸立之力、前後重錫、備顯僧倫。既非教元、略而不述。然其聲辯包富、寫送雲行、事逾宿構<sup>1525</sup>、蓋難與競。遂使挫拉強禦、傾倒帝前、顧問此何人斯。答曰、「其本幽<sup>1526</sup>州僧也。」所以帝偏眄矚允<sup>1527</sup>、罰遣類造。奘云、「幽州師大好。」斯言有旨。至七日內、勅鴻臚卿韋慶儉、補充西明寺都維那。性不習諠詣、闕辭退、所司抑之、不爲通表。因理僧務、不墜尋<sup>1528</sup>倫<sup>1529</sup>。

### 十三<sup>1530</sup>帝以冬早內立<sup>1531</sup>祀佛道二宗論議第十三

顯慶三年冬十一月、上以冬雪未零、憂勞在慮、思弘法雨、霽祈雪降。爰構福場、故能靜處、中禁廣嚴法座。下勅召大慈恩寺沙門義褒、東明觀道士張惠元等入內。於別中殿、講道論好。

于斯時也、內外宮禁咸集法筵<sup>1532</sup>。釋李搜揚、選窮翹楚。即斯榮觀、終古無之。天子親<sup>1533</sup>、褒所來邑、於座具答。時士<sup>1534</sup>榮先昇高座、立本際義。勅褒云、「承師能論義、請昇高座、共談名理。」便即登座。問云、「即<sup>1535</sup>義

1517「侯」、七本「使」。1518「眞」、興・七本「直」。1519「也」、七本ナシ。1520「推」、興本「權」、七本「擁」。1521「卓」、興本「阜」、七本「皋」。1522「譽」、七本「舉」。1523「契」、七本「熱」。1524「道」、興・七本「導」。1525「構」、七本「接」。1526「幽」、七本「幽」。1527「允」、七本「冗」。1528「尋」、七本「彝」。1529「司抑……彝倫」、十五字、七本ナシ。1530「十三」、興・七本ナシ。1531「立」、興・七本「立齋」。1532「筵」、七本「延」。1533「親」、興・七本「親問」。1534「士」、興・七本「道士」。1535

標本際、爲<sup>1536</sup>本於際、名爲本際、本於<sup>1537</sup>道、名爲本際。」答云、「互得進。」難云、「道本於際、際爲道本、亦可際本於道、道爲際元。」答云、「何往不通。」並曰、「若使道將本際、互得相返、亦可自然與道、互得相法。」答曰、「道但法自然、自然不法道。」又並曰、「若使道法於自然、自然不法道、亦可道本於本際、本際不本道。」於是道士著難、恐墜厥宗、但在緘默、不能加報。

褒即覆詰<sup>1538</sup>難云、「汝道本於本際、遂得道際互相本。亦可道法於自然、何爲道自不得互相法。」榮得重並、既不領難、又不解詰<sup>1539</sup>、便浪嘲<sup>1540</sup>云、「法師喚我爲先生、汝便我之弟子。」褒應聲挫云、「今對聖言論、申明邪正、明<sup>1541</sup>簡帝心。芻蕘之嘲<sup>1542</sup>、塵黷天聽、義須棄置、誠不可也。雖然無言不酬、古有遺詰、聊以相答。我以事佛<sup>1543</sup>爲師、我爲佛之弟子、汝既稱<sup>1544</sup>先生、汝應先道而生。我爲弟子、佛是我師。汝若先道而生、汝即<sup>1545</sup>應爲前<sup>1546</sup>祖。」道士當時忸怩無對、塵尾垂頓、聲氣俱下。褒因調曰、「塵尾已萎、鹿巾將折。語聲既慈<sup>1547</sup>、義鋒亦摧。」李榮無對、逡巡下席。

尋即有勅、命<sup>1548</sup>褒依法登座。辭曰、「義褒江表僧、山中朽<sup>1549</sup>、天光遠被、漏影林泉。輕枉<sup>1550</sup>絲綸、親臨御覽。然則佛法僧寶、無上福田、梯橙樂山、津梁苦海、法身常住、迹示興亡。像教住持、取資帝力。伏惟陛下、道邁軒義、德隆<sup>1551</sup>堯舜、遊刃萬機、弘顯三寶。皇后懋續宮闈<sup>1552</sup>、皇太子聲高啓顯。今爲膏雨不降、瑞雪未零、憂勞黎庶、設齋祈<sup>1553</sup>福。紫庭之内、建立勝幢、黃屋之中、安施法座。欲使道風常扇、佛日連輝。爰<sup>1554</sup>詔緇黃、各陳名理、玉階闡玉京之教、金闕揚金口之言。以斯景福、莊嚴聖御。伏願皇帝、金輪永轉、玉鏡恒明、等敬北辰、慶隆南嶽<sup>1555</sup>。皇后心明七耀、體國<sup>1556</sup>二儀、垂訓六宮、母儀萬國。皇太子凝<sup>1557</sup>神望苑<sup>1558</sup>、作睿春坊、布

「即」、興・七本「既」。1536「為」、興・七本「為道」。1537「本於」、七本「大於」。1538「詰」、興・七本本「詰」。1539「詰」、興・七本本「詰」。1540「嘲」、興・七本「朝」。1541「明」、興・七本「用」。1542「嘲」、興・七本「朝」。1543「佛」、七本ナシ。1544「稱」、七本「稱爲」。1545「即」、七本「則」。1546「前」、興・七本「道」。1547「慈」、興本「惡」、七本「惡」。1548「命」、七本「令」。1549「朽」、興本ナシ。1550「枉」、七本ナシ。1551「隆」、七本「際」。1552「闈」、七本ナシ。1553「祈」、興本ナシ。1554「爰」、興本「受」。1555「嶽」、興本「兵」。1556「國」、興本「固」、七本「因」。1557「凝」、興本「疑」。1558「苑」、興本「蒙」。



采<sup>1559</sup>前星、披圖下武。

義褒海隅遺隱、忽廁高<sup>1560</sup>華。以有怯之心、登無畏之座。用木訥<sup>1561</sup>之口、釋解頤之談云<sup>1562</sup>。然則聖旨斯臨、課虛立義、今標義日、厥號摩訶般若波羅蜜義。此乃<sup>1563</sup>大義之鴻駕、方等之龍津、菩薩大師、如來智母。摩訶大也、般若慧<sup>1564</sup>也、波羅蜜者、到彼岸也。夫玄府不足盡甚<sup>1565</sup>深華、故寄大以自<sup>1566</sup>之。水鏡未<sup>1567</sup>可喻其澄朗、假慧以明之。造盡不可得其崖<sup>1568</sup>極、借度以稱之。」

道士張惠元問曰、「音是胡音、字是唐字。翻胡爲唐、此爲何益。」答曰、「字是唐字、音是梵音。譯梵爲唐、彼此俱益。」又難曰、「胡音何能益人。」答曰、「佛生天竺、梵音爲正、教流中夏、利見甚多。云何無益。」彼進無難、返唱不通、褒調之曰、「道士年耄、今復發狂。答<sup>1569</sup>義若此、頓不思量。」張曰、「我那忽狂。」褒調曰、「子心不狂、那出狂語。退亦往矣、佇軸何爲。」張遂復座。

姚道士次論<sup>1570</sup>曰、「般若非遇<sup>1571</sup>智、何以翻爲智。」答<sup>1572</sup>、「爲欲破愚癡、嘆<sup>1573</sup>美稱爲智。」姚責之<sup>1574</sup>、「何者是愚癡、而將智來破。」答曰、「愚人是道士、將智以破之。」姚曰、「我那忽是愚。」答曰、「般若非愚智、破愚曠爲智。道士若亡愚、我智藥亦遣。」如是覆却數番、姚遂飲氣吞聲、周悼失守、無難坐默。褒因總調云、「張生則逃狂無所、姚道士避愚無地、狂愚既退、李可進開<sup>1575</sup>。」榮<sup>1576</sup>問曰、「義標般若波羅蜜、斯乃非彼非此、何以言到彼岸。」答曰<sup>1577</sup>、「般若非彼此、歎美爲度彼。」榮曰、「非彼非此、歎度彼岸、亦應非彼非此、歎到此岸。」答、「雖彼此兩亡、歎彼令離紫<sup>1578</sup>。」榮曰、「歎彼不歎此、亦應非此不非彼。」答、「彼令離此、離<sup>1579</sup>彼亦亡。」榮更無難、乃朝<sup>1580</sup>曰、「僧頭似彈丸、解義不團樂。」褒接聲曰、「今彈彈黃雀、已

1559「采」、七本「彩」。1560「高」、七本「嵩」。1561「木訥」、興本「不調」。1562「云」、興・七本「云云」。1563「乃」、興本「及」。1564「慧」、興本「慧」。1565「甚」、七本「其」。1566「自」、興本「日」、七本「因」。1567「未」、七本ナシ。1568「崖」、興本「岸」。1569「答」、七本「益」。1570「論」、七本「論義」。1571「遇」、興・七本「愚」。1572「答」、七本「答曰」。1573「嘆」、七本「歎」。1574「之」、七本「云」。1575「開」、七本「關」。1576「榮」、七本「榮因」。1577「曰」、七本ナシ。1578「紫」、七本作「此」。1579「離」、興・七本「此離」。1580「朝」、興本「嘲」。

射兩鴟鵂。彈彈黃雀足、射射鴟鵂腰。」于時李既發機被彈、張元拔前助之。褒又調<sup>1581</sup>曰、「李不拔、張<sup>1582</sup>強<sup>1583</sup>助言。姚生一愚、那不見救。」即<sup>1584</sup>發言云云。褒合調曰、「兩人助一人、三愚成一智。昔聞今已見、斯言有從記。」于時天子欣然、內宮誼合、李榮俛首不已、言、「作如此解義、何須遠從吳地來。」褒云、「三吳之地、本出英賢。橫目苟身、舊無人物云<sup>1585</sup>。」言訖下座。當斯時也、獨御黃老、無敢抗言。可謂振論鼓於王庭、不異提婆之日。灑法音於帝掖<sup>1586</sup>、何殊身子之秋。

事罷相從、還栖公館。褒謂諸道士曰、「駟不及舌、明言非易。天下清論、何有窮涯。等星<sup>1587</sup>曜之在天、類河山之鎮地、須便引用、未待鄙言。何有面對天顏、輕爲譎<sup>1588</sup>論、脫付法推、罪當不敬。賴<sup>1589</sup>慈弘、恕<sup>1590</sup>其不逮不敬之罪、終難可逃。」道士等大慚。張元曰、「不須述也。」褒曰、「往不可咎、來<sup>1591</sup>猶可追。請廣義方、統詳名理。豈非釋李高軌、不墜風流、勝負兩亡、情理雙遺者也。」

筆者詳略褒之義道、可曰勝顯當時、准的萬代、碎黃巾於黃屋、不藉漢師、列帝網於帝前、無勞<sup>1592</sup>秦陣。是以雲梯嬰帶、徒聞姚主之談。吞併合從、成祖宋君之美。信矣。

#### 上幸東都又召西京僧道<sup>1593</sup>士等往論事第十四

顯慶五年、車駕東都、歸心佛道、宗尚義理。匪因談敘、無由釋會。下勅、追大慈恩寺僧義褒、西明寺僧惠立等、各侍者二人、東赴洛邑、登即郵傳。依往至合辟<sup>1594</sup>宮奉見、敘論義旨、不爽經通。下<sup>1595</sup>勅、停東都淨土寺。褒即於彼講『大品』・『三論』、聲華崇盛、光僧<sup>1596</sup>逾隆。

褒姓薛氏、常州晉陵、蓋齊相孟嘗君之後、大吳名臣綜瑩之胤也。而天體高邈、履性清明。少染緇衣、長遊聽採。初在蘇州<sup>1597</sup>明法師所、服勤教義、

1581「調」、七本「詞」。1582「張」、七本ナシ。1583「強」、七本ナシ。1584「即」、興・七本「姚即」。1585「云」、興・七本「云云」。1586「掖」、七本「振」。1587「星」、興本「皇」。1588「譎」、七本「謙」。1589「賴」、七本「賴聖」。1590「恕」、七本「如」。1591「來」、興本ナシ。1592「勞」、七本「榮」。1593「道」、興本ナシ。1594「辟」、興本「壁」、七本「壁」。1595「下」、興本ナシ。1596「僧」、興・七本「價」。1597「蘇州」、興・七本ナシ。

具美清涼、『大品』・『華嚴』、開明巖穴。又往指雲山婺州曠法師所、經于多載、備閱幽求、會體素誠、爽拔玄致。於是周流禹穴三十餘年、傳經述論、學侶奔繼。每惟大乘至教、元在僧<sup>1598</sup>陰、播蕩淳源、乃流楊越、嗟乎高軌、中原失縱。後住東陽金華山法幢寺。弘法不倦、終日坐忘、思契伊心、長懷卒歲。

會慈恩申請寓內搜揚、京邑髦彥承風仰德、以名聞奏<sup>1599</sup>、下勅徵延。既達京師、幽優頓蕩。三藏玄奘不以形隔致猜、共敘大綱、護法爲務。請所學經論、通<sup>1600</sup>誦<sup>1601</sup>十遍、顧諸門徒、並往聽之。

時在慈恩創開宏理、有空雙遣、藥病齊亡。于時、執有毘曇、存空成實、分河飲水之客、別部說戒之徒<sup>1602</sup>、我見鏗然、欵然驚視、皆謂空見外道、或曰「空花道人」。遂即負氣輻天、莫不承風摧轍、喪魂破膽、失路迷歸。褒乃誨以謗<sup>1603</sup>法之愆、示以信首<sup>1604</sup>之路。責以三開、則周悼無計。尊<sup>1605</sup>以五過、則負罪彌天。辯給之口、引用飛流、能使答對無前。翔集雲雨、自戾止日下、光問德音、宰輔傾誠、道勝嗟賞。中興大法。斯人在斯、纔有一月<sup>1606</sup>、即蒙勅召中禁明道、躬閱清言<sup>1607</sup>、如前略述、不爽華望。

晚巡洛下、重復徵延、聲榮藉甚、彌隆今古。不意法幢忽崩、仁舟淪沒、因疾卒於洛邑、幽明結慘、道俗悲涼。下詔流問、并給賻贈、令葬鄉邑。自餘道勝、未獲其文、隨<sup>1608</sup>得編之、恐有遺逸、故耳。

#### 集佛道論衡實錄卷下

保延四年（戊己（午））六月廿日一交已了

願主聖人快尋奉書寫一切經也<sup>1609</sup>

1598「僧」、興・七本「渭」。1599「奏」、七本「卷」。1600「通」、興本「道」。1601「誦」、興・七本「講」。1602「徒」、興本「往」。1603「謗」、七本「論」。1604「首」、興本「道」。1605「尊」、七本「導」。1606「月」、興本「日」、七本「有」。1607「言」、七本ナシ。1608「隨」、興本「墮」。1609「保延四年戊己午六月廿日一交已了願主聖人快尋奉書寫一切經也」、興・七本ナシ。

## Summary

### The Old Japanese Manuscript Version of Daoxuan's *Ji gu jin Fo Dao lun heng*: Bibliographical Introduction and Diplomatic Edition

Wang Xue

The *Ji gu jin Fo Dao lun heng* 集古今佛道論衡 compiled by Daoxuan 道宣 in the Tang Dynasty is a collection of essays related to the controversy between Buddhism and Taoism. All traditional woodblock editions of the Chinese Buddhist Canon printed after the 10<sup>th</sup> century, including the *Kaibao zang* 開寶藏, divide the text into four scrolls 卷 while the old Japanese manuscripts have three scrolls. Extant old Japanese manuscripts of the *Ji gu jin Fo Dao lun heng* are found in the collections of the Kongō-ji, Kōshō-ji, Nanatsu-dera, Saihō-ji, Shingū-ji, and Myōren-ji. A comparison of the notations in the scriptural catalogues 經録 and the content of the extant witnesses confirms that the old Japanese manuscripts reflect an early version of the text. This proves that the old Japanese manuscripts are indispensable materials for the study of the *Ji gu jin Fo Dao lun heng*. The extant manuscripts date to the 12<sup>th</sup> century but it can be assumed that they derive from copies going as far back as at least the 9<sup>th</sup> century. Compared to the traditional woodblock editions, these manuscripts are closely connected to the Southern 江南 lineage of the Chinese Buddhist Canon.

The present paper contains two parts: a bibliographical introduction and a diplomatic edition. The bibliographical introduction offers a survey of all the old Japanese manuscripts of the *Ji gu jin Fo Dao lun heng*, focusing on the codicological and bibliographical data of the Kongō-ji manuscript (in three scrolls), which was chosen as the basic text for the facsimile edition, as well as the Kōshō-ji and Nanatsu-dera manuscripts

which were used for collation. I also look into origin of these manuscripts as well in the transmission lineage to which they are connected.

*Postgraduate Student,  
International College  
for Postgraduate Buddhist Studies*